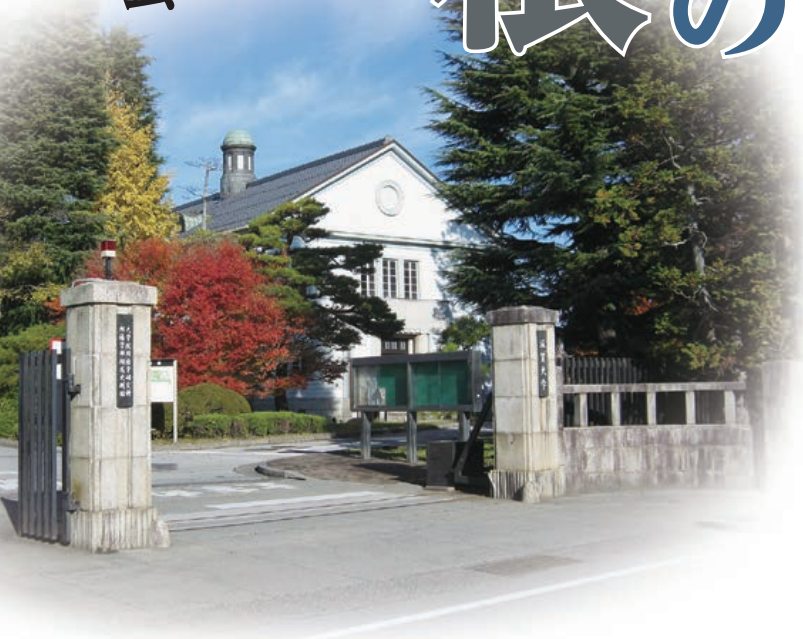


滋賀大学経済学部創立90周年記念

わが青春の 彦根

陵水会



滋賀大学経済学部創立90周年記念

わが青春の
彦根

陵水会

まえがきに代えて

陵水会理事長 戸田 一雄

平成24年6月、未熟者ながら、伝統ある陵水会の理事長をお引き受けすることになりました。同窓会運営の経験など殆ど無かった私が最初に知りたかったのは、陵水会の会員の方々が自分達の同窓会をどう感じ、どう持つて行くべきか？ 90周年の記念として何を為すべきか？ 多くの人のご意見を知る事でした。そしてその解は全国各地で実施されている「陵水会」の支部年度総会に出席し、ざっくばらんにお話を聞くことにある事を知りました。

この1年、許される限り沢山の支部総会に出席し、多くの先輩諸兄に我々の向かうべき方向をご指導いただきました。教えて頂きました多くの陵水会員の皆様に厚く御礼を申し上げます。

さて、皆様とのざっくばらんな話の中で、良く出て来ましたご意見は、もっと会

員相互のことを知る為に、お互いが大きなテーブルに着き、共通したテーマで語り合う機会があれば良いと言うことでした。また自分たちが闊歩した若き日のことを想い出として残しておきたいと言うお声も少なからずありました。

そんな中、広島の総会から戻った私に、石井和佳支部長(大3)より、総会出席の御礼と共に、ご自分がかつて石田ゼミの会誌「石田ゼミの友」に連載投稿されていたご自分の学生時代の想い出のコピーを送って頂きました。同じゼミの後輩として、この作品は以前読んだ記憶はありましたが、改めて読ませて頂き、その内容が大変面白いだけでなく、当時の世相や物価にも鋭くメスが入った素晴らしいものであり、大変感銘を受けました。

これだ！ 創立90周年に当たり、全員が思い出を語り合うそんなエッセイ集を皆で作ろう！ と心に決め、石井さんのご意見も聞きながら提案。理事長・副理事長会議、臨時支部長会議などで中身を検討し、正式に発刊の方向が決まりました。

全員、その発行についての異論はありませんでしたが、唯一、本の装丁については意見が分かれました。A4、週刊誌の様なもので良いと言う意見もありましたが、私は4/6サイズのハードカバー仕様を強く押させて頂きました。これは出来上がったエッセイ集が、終生、陵水会会員の皆さんの本棚を飾り続けるもので

あつてほしいからでした。

それぞれが、それぞれの充実した4年間を小さな城下町で過ごしました。都会の喧騒とはかけ離れた静かな街での良き思い出を皆で共有したい。そしてこのエッセイ集の発刊で、また新しい人の輪が広がって欲しいと期待しています。

(了)

平成25年8月16日

彦根高等商業学校校歌

藤村 作 作詞
岡野 貞 一作曲

一、見よ漫々として 琵琶の湖
朝生命の色に輝き
夕神秘の虹をうかがふ
躍れる波あり 和める面あり
大なる自然
これぞわが友

二、聞け黙々として 語る史書
内に所信を固く保ちて
外に果敢の策を立てつ
国難救いて 身命捧げし
た、ふべき偉人
これぞわが師よ

三、ああ燦然として 残る事業
ながく富国の訣は傳はり
ひろく聖者の徳はにほふ
不屈の商魂 不滅の正心
仰ぐべき軌範
これぞわが道

滋賀大学学歌

花田比露思 作詞
片山穎太郎 作曲

一、遠がすむ 琵琶のみずうみ
とりよるふ 比良靈仙
近江はや 国の真中
正気の あつまるところ

二、ここに建つ 滋賀大学
學術を 深く究め
人格を 磨き高め
天下の 模範とならむ

三、比良が嶺を 雲は隠さめ
みづうみに 霧は立ため
我等は 倦まず励む
無限の 進歩を信じ



旧 伊 聖 寮

伊 聖 寮 歌

江 崎 三 男 作 詞
古 賀 政 男 作 曲

一、眼もはろばると暁の

湖上を渡る春風に

陽と波の交響は

佳き日明けぬと告ぐるかな

佳き日明けぬと告ぐるかな

二、希望の朝日身に浴びて

若き男の児の雄叫びは

かの大賢が感激の

熱き血潮を伝うなり

熱き血潮を伝うなり

三、人の心よ浄かれと

北に峙つ胆嶺の

肌に耀う白雪に

見よや久遠の啓示あり

見よや久遠の啓示あり

四、今学び舎の窓に倚り

夜の静寂に聞き入れば

古城に通う松籟に

故郷の思慕杳かなる

故郷の思慕杳かなる

五、夕闇湖に迫る頃

聖徳びて立つ時に

小波遠く融けゆくは

吾等が若き歌の声

吾等が若き歌の声

まえがきに代えて

陵水会理事長 戸田 一雄

彦根高等商業学校校歌

滋賀大学学歌

偲聖寮寮歌

わが青春の彦根

追憶の詩(故延澤慶太郎君に捧ぐ)

彦根高商の思い出

戦時下二年六ヶ月の学窓生活

思い出

彦根と私と俳句

拾われた青春 — 対米戦抄録 —

彦根での思い出の数々

恩師宅訪問記

わが青春の友

懐しく楽しかりし彦根

入学直前後の思い出

忘れまじ痛恨事

わが青春の思い出

永沢先生の思い出

私の二十歳

岸川通藏(本21)

廣瀬精一(本21)

前畑成温(本22)

久保田暁一(本23)

高木早苗(本24)

永野隆一(本24)

池下正(工2)

伊藤藤雄(工2)

小野盛四郎(工2)

木村正夫(工2)

31

35

39

42

46

49

52

54

56

58

野口康夫(本11)

西岡孝(本19)

山崎昇(本19)

内堀善一(本20)

後藤隆(本20)

榊原明(本20)

14

16

18

22

26

28

42

46

49

52

56

58

わが青春の思い出	近藤 伊助(工2)	60	生涯力漕 後輩のコックスに伝えたいこと	川 辺 正 郎(大2)	80
わが青春の思い出	田 中 邦 博(工2)	62	ああ青春！ 寮歌・開寮祭	石 井 和 佳(大3)	85
学園の思い出	高 橋 信 人(工2)	64	わが青春の彦根と楯円球	日 比 久 一(大3)	91
わが青春の思い出	津 布 良 孝 夫(工2)	65	彦根の四季と現況	岡 田 清 士(大4)	94
私の就職事情	中 村 恒 夫(工2)	67	ヨット部創設から、全国レベルへの道	箸 方 海 三(大4)	97
わが青春の思い出	山 路 宏(工2)	69	わが青春の彦根 — 悔恨と空手道 —	中 川 郁 三(大5)	100
戦後三年目一九四八年、極東軍事裁判判決の年に彦根経専入学、一九五三年、日米友好通商航海条約調印の年に大学卒業	井 上 輝 重(大1)	71	わが青春の記	中 野 吉 隆(大5)	103
雑感	西 脇 光 男(大1)	74	俳 句(陵水名古屋俳壇)		106
わが青春の彦根 追憶	三 上 剛 一(大1)	77	わが青春の彦根	光 橋 貢(大6)	108
			生涯の糧！ 彦根交友録	春 名 公 雄(大7)	111

わが青春のふるさと彦根

—ポルト部入部当時の思い出—……………115

吉田紀幸(大7)

Samuelson (Economics)……………118

門野久義(大8)

想い出の街・彦根……………121

河原崎貞弘(大8)

卒業から五十三年経って……………124

刀裨館信雄(大8)

「滋大陵水新聞会」思い出日記……………127

林史欣(大8)

我が青春「ポルト部の四年間」……………131

羽原秀俊(大8)

湖上生活4年……………135

興津成実(大9)

悪夢…卒業試験……………139

後藤寅二郎(大9)

人生を豊かにしてくれた

「硬式野球部」と「彦球会」……………142

小柏博美(大10)

恩師山本安次郎先生

〈先生の教えを心に留めて〉……………145

一柳善郎(大11)

仇敵彦根での五年間……………148

黒澤日出男(大11)

生協運動に参加して……………154

稲邑明也(大12)

『ちーちゃん』ちの一人パーティー……………157

戸田一雄(大12)

安保騒動……………161

守谷貞夫(大12)

一生ものの四年間……………164

倉坪和久(大13)

私の実家……………167

西部宏道(大13)

彦根を想う……………170

森本正(大13)

クラブバイト・イン Hikone……………173

大西久一(大14)

陵水新聞会・自治会・生協組織部・大学祭……	奥谷弘和(大14)	177	わが青春の彦根——旅こそ、わが稼業——……	藤田茂生(大16)	216
加藤ゼミ第一期生の想い出……	川崎 昊(大14)	182	我が青春の彦根……	山内善朗(大16)	219
寮と琵琶湖と彦根城……	原 綱宗(大14)	186	彦根に感謝……	松村禎一(大17)	222
大学留年……	黒田悦司(大15)	189	琵琶湖周遊徒歩の旅……	伊藤 晃(大18)	224
剣道そして我が青春の町彦根			陵水ボート戦後復興の秘話……	北居和夫(大18)	228
人生ままならぬもよし……	杉本佳彦(大15)	193	学生時代の想い出……	中村嘉秀(大18)	231
わが青春の彦根……	棚橋 猛(大15)	198	酒と唄と人生……	林 貞夫(大18)	234
私の中藪3丁目での下宿生活……	村瀬英己(大15)	206	わが青春滋賀大生……	平田 修(大18)	237
我が友ラグビー部同期吉本氏を偲んで……	吉田勇夫(大15)	209	わが心の故郷 彦根……	駒井久夫(大19)	240
彦根の想い出……	谷尾清隆(大16)	213	私と滋賀大学そして彦根……	小山久照(大19)	244

青春の街 彦根……………	西村孝一(大19)	249	青春のページ〜学びを知る〜……………	須田邦雄(大22・院2)	284
一緒に学び遊ぼうや……………	山田 督(大19)	252	創立九十周年に思う……………	堀 義 廣(大22)	287
彦根城は、私の、心のランドマークだった……………	大熊 博(大20)	254	思い出のひとつま……………		
わが青春の彦根……………	大谷 潔(大20)	258	―農村調査に参加したこと―……………	富田 修(大23)	290
芹川河岸にて―屋台「かえで」のおばちゃん……………	佐藤孝一(大20)	261	彦根駅……………	兄玉正治(大25)	293
彦根……………	長谷川 力雄(大20)	264	やさしき彦根……………	小西了介(大26)	297
嗚呼、彦根……………	水野 久仁昭(大20)	269	故伊達誠司君お母様からのお便り……………	太田昌 伸(大29)	300
わが青春の彦根……………	太田 修一(大21)	272	私の人生を変えた滋賀大学……………	松尾洋一(大31)	303
オールに托した青春……………			良き先輩・同輩・後輩との出会い……………	山下勝 義(大31)	309
〜片岡監督と一杯のビール……………	阿部吉博(大22)	279	陵水ファイルハーモニー管弦楽団……………	横井隆 幸(大33)	311

わが青春の彦根	高井 マサ代(大38)	316
かけがえのない、私の「彦根」	岡 雅之(大44)	319
彦根での輝かしき青春時代	尾中 治 幸(大58)	321
遅れてきた大学生	谷 口 廣(大59)	324
彦根から世界へ	山 脇 薫(大60)	327
封印された青春の日	外村 元 三(短1)	330
短大一回生から	廣 瀬 喜 一(短1)	333
我が青春の彦根	大 島 一 彦(短7)	337
わが青春の街 彦根	福 山 昌 男(短8)	341
「青春の彦根」の輝きをいつまでも	岩 根 順 子(短14)	344

我が青春譜	中 嶋 篤 仁(短18)	347
想い出の我が学び舎	大 堀 良 一(短20)	350
あとがき―『わが青春の彦根』に寄せて	経済学部長 梅 澤 直 樹	

わが青春の彦根



野口康夫(本11)

陵水会の90周年、誠におめでとございます。

今からおよそ80年前、彦根の街に学び、遊んだ同期生158人も、今では、東京に住む吉井啓之亮君、四国新居浜に住む神野寿行君と私だけの3人になりました。同期には、丸紅社長になった池田松次郎君もいました。

3—4年前までは、神戸在住の荒川玄市郎君や吉井君と年に数回、京都・墨染の旅館で3人だけの同窓会を開催し、若かった彦根の思い出話、戦争体験、家族のことなど、夜遅くまで酒を飲みながら話し合ったものです。2年前に荒川君が亡くなり、今は吉井君と月に3—5回ほど電話で近況を交換し合っています。

彦根では、偲聖寮生活を初年の一年間経験し、その後駅前前の薬局の2階に初めて下宿を見つけ、友人達との交流の場となりました。処が、家主の老夫婦から、「是非、養子になってくれ」

と請われ、「一人息子なので」とお断りして、京町へ下宿を変わりました。彦根の街で覚えた酒のお陰で、今も毎晩、晩酌を欠かしたことがありません。

当時の下宿代は月5円、学校横の魚仙の食事代は、朝が15銭、昼が20銭でした。

卒業翌年の昭和12年8月に支那事変勃発による召集令状を受け、伏見の16師団、伊勢の15師団で訓練を受けて、大阪の天保山から船で上海へ、その後、常州を経て金壇へと出征しました。40度を越す炎天下での行軍、数え切れない交戦は今も忘れられません。吉井君との電話では、いつも彦根の話から互いの戦争体験（吉井君は7年間、荒井君は4年間満州、4年間のシベリア抑留を体験）と、長電話になります。「なにくそ、ここで死ねるか」と気力を振り絞ったことが、今の長寿につながったと思います。

今年の吉井君の年賀状を引用させていただきます。「98年、過ぎれば短いものでした。7年の従軍生活、波乱多き人生でしたが、万時終末の今日の想いは我が国の弥栄のみです」。なお、私事ですが、私の長女の婿と、孫娘の婿が共に滋賀大の卒業生で、我が家は3代続けて、彦根の卒業生です。

追憶の詩（故延澤慶太郎君に捧ぐ）

西岡 孝（本19）

海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍、

大皇の辺にこそ死なめ、顧みはせじ

天皇に生命を捧げることは私たちの世代の者の常識であり、若者達は純粹に国家に殉ずる使命感を燃焼させていましたから、戦争参加の動機は、ことさら改めて特殊な意識を持つものではありませんでした。

そんな中で延澤君は人一倍愛国心に燃えていましたし、必ず戦争に勝つ、その為には自らを犠牲にしてもとの滅私奉公の精神で、進んで海軍飛行予備学生に志願したものと思われます。その志は誠に壮で尊敬措く能わざるものがあります。

「慶太郎今宵今生最後の御別れを申し上げます。待ちに待った、特攻の命は下りました。生を

享けて二十有余年、始めて味わう心の清さ。私の血は必ずや皇国の危急を挽回するでしょう。徒に嘆き悲しまないでください。決して決してご落胆なきよう涙等見せられては折角の私の名誉が無くなります。はるか南海の空の涯より皆様のご多幸をお祈り申し上げます。」との遺書を両親に認めて昭和二十年四月十六日出水基地から特攻隊の指揮官として出撃、敵空母に果敢に体当たりし、喜界島南東海上に散華しました。

心からご冥福をお祈りいたします。

あの夏の炎天下、共にヘドが出るまで練習に明け暮れた日日、われらの野球部のチームメイトに延澤君もいて、その情熱をもやしていました。彼は八幡商時代からのスラッガー、ずい分とチームの勝利に貢献していました。チームメイトは皆トビ切り人が良かった。

それが為にチームはいつも底ぬけに明るく私もチームの一員として毎日愉快に過ごし、すばらしい青春の一ページを飾る事が出来ました。しかしチームメイトの中で延澤君、彦根中の山中君、武義中の赤堀君三君が戦死し、残念でなりません。

この上は彼らの分までも、このような戦争の悲惨さ、愚かさを次代に語り伝えて二度と戦争をくり返さない様、努力を続ける事が何よりの供養になるものと信じております。

彦根高商の思い出



山崎

昇(本19)

古びた田舎の駅舎を出た途端、林立する運動部の幟と、鉢巻き姿の学生さんに迎えられて、彦根の第一歩が始まりました。

昭和十六年四月(一九四一年)、日本を取り巻く政情は厳しく、支那大陸や国際情勢の混乱、緊張の高まりと共に強硬論へと動き出していました。

その様な時代、幼い時から軍国少年であった私は、旧制中学では体育会系を中心に、硬派の不良少年でした。旧制高校の受験に失敗し、再起を覚悟していた矢先、三年上の兄(神戸一中・彦根高商卒)の勧めで受けた後期試験、その高倍率の難関校にどうした事か合格してしまいました。

入学して驚いた事は、廻りの皆が誰も彼もトップクラスの秀才ばかり、又、先輩の方々も関西・中京の財界で大活躍されている官立高商の有名校であることを知り、驚きととまどいに浮

き足立つ思いでした。

元々、国際的な仕事我希望でしたので、東亜経済中心の学部に入れた事は良かったのですが（当時の官報表示、本科第二部Ⅱ支那科Ⅱ現在なら経済学部東亜政経学科でしょうか）第二外国語の支那語が難しく卒業まで苦勞の連続でした。

彦根高商の素晴らしさは、学問の舎として高いレベルの専門教育と共に、人格形成と強固な体力と精神力を鍛える体育会運動部の充実活動にありました。競技の勝負けよりも目的に向って一生懸命努力する事の大切さ、苦しい時に助け合う強い絆に結ばれた厚い友情の大切な事を教えてくれました。

この様な経緯で始まった彦根の生活、良い環境、素晴らしい学友に恵まれ、楽しく思い出多い青春時代を過ごすことが出来ました。

陽光に輝く彦根城、キャンパスから見上げる西の丸三重櫓の白壁、桜花爛漫、桜のトンネル、毎時になる時報堂のかねの音、クローバーの緑の絨緞のグラウンド、冬には真白き雪を頂く伊吹山。

その中で学生生活が始まりました。

私達の在学した昭和十六年～十八年頃の彦根は小さい城下町で、戦時中であり乍ら何不自由なく平和で静かな町でした。お城



高商の帽章と帽子です

も今の様な観光地でなく、歴史とロマンを秘めて優雅に佇み、我々学生の憩いの場を提供してくれていました。町全体が学生の街と言う雰囲気の中で、自由と青春を謳歌しつつ送った学生生活は、ラグビー部活動と共に楽しい思い出の充実した良き時代でした。

正門を出た通りには高商生専用の店が一つの街を形成していました。本屋、靴屋、理髪店、うどん屋、パン屋、四十九町の風呂屋、夫々お世話になりました。今は総て無くなっているのが残念で淋しい思いで一杯です。

昭和十七年半ば、静かな彦根にも戦局の波が押し寄せて来ました。私達も学業短縮、国を守り日本民族を守る為に、戦場の最前線に立つ将校として厳しい訓練を受け、死を賭して軍務に就きました。

昭和二十年八月十五日、戦争は終わりました。本土防衛命令で満州(現中国黒竜江省)より内地に転配されていた私は、八月末陸軍少尉で復員して来ましたが、兄を始め多くの優秀な学友の戦死の報に接し、痛恨の悲しみに涙しました。



右から二人目が宇野宗佑君です。

世の中は変わっていました。その激変と価値観の余りにも落差の大きさに、非常な戸惑いと心の混乱にさいなまれる日々でした。我々の今迄の学問、人生は何だったのか、と悩む時間もありませんでした。荒廃した国土の中で新しい日本の復活へ、その力強い第一歩を踏み出していきました。苦勞し乍ら前を向いて建学の精神を胸に、彦根高商の先輩諸氏の名声と実績を誇りと励みに、新しい門を少しづつ押し開いていく事が出来ました。

因みに同期に元総理大臣、故宇野宗佑兄、滋賀大学教授故小倉栄一郎兄等優秀な学友がおりましたが、もう会えないのが残念です。

貴重な紙面をお借りしての自叙伝的な高商生活の思い出となりましたが、運よく生き延びて来た九十年の人生の中で、印象深い出来事を纏めてみました。有難うございました。

― 陵水会の益々の御発展と御活躍を祈り上げます。

終



緑のクロバーのグラウンド

戦時下二年六ヶ月の学窓生活



内堀 善一（本20）

我々が彦根高商に入学したのは昭和十七年（一九四二年）四月であるが、その前年十二月に太平洋戦争が勃発していた。そして三学年に進級した頃は「負け戦」続きで、日本軍は危機に直面していた。既に六か月の繰り上げ卒業が決定しており、五月に入ると我々第3学年は名古屋市郊外の鳥居松陸軍造兵廠へ勤労働員となり、日夜兵器の製作に従事した。この様に極めて慌ただしい状況下ではあったが、それだけに向上心は強く、充実した学窓生活であったと思われる。

今でも心に残る印象の濃い事柄二、三を記して思い出の記とする。

①開校二十周年記念の懸賞論文応募のこと。

昭和十八年は開校二十周年で、懸賞論文の募集があり応募した。テーマは幾つか決められて

いて、私は『国学者の経済思想』を選び図書館通いで取り組んだ。国学者とは加茂真淵、本居宣長、荷田春満、平田篤胤らであるが、これらの学者がどのような経済思想を有していたかを探り出すだけでも大変難儀なことであった。どのように結論したか論文の内容は思い出せないが、評点は佳作であった。終業年限の短縮、勤労働員されたことにより卒業論文執筆を免除されたので、在学中唯一の論文となった。

②勤労働員のこと。

前述の通り、昭和十九年五月陸軍造兵廠へ勤労働員を命ぜられた。私の作業は、フライス盤で合金の金属面を削りミイリング マシン用等の刃具を製作することであった。計器盤（インデックス？）で芯を出す作業（材料の中心点をきめること）も難しく、最初の頃は「御釈迦おしよか」（不良品のこと）続出で、貴重な材料の消耗に心を痛めたものである。一か月も経てば生活環境、作業にも慣れて熟練工並の評価を受けるようになった。

一週間に1回か2回、母校教授は動員先を訪れて授業をして戴いた。疲れた身体で受講も難儀ではあったが、疲れを癒し気持ちの安らぐ一時であり、学校の配慮に感謝したことであった。

③卒業式のしり。

昭和十九年（一九四四年）九月二十日、前日動員先から慌ただしく帰校して第二十回卒業式に臨んだ。一部学友は既に軍隊に行っており、第2学年生徒は大同製鋼の工場へ勤労働員で不在、来賓もなく何んとも侘しい卒業式であった。若松信重君は「簡素な卒業式だったが、なぜか城山から聞こえて来た蟬の声が今も耳に残っている」と記しているが、その記憶はない。大部分の者は即刻軍隊に行くことになっていたので、田岡校長の式辞は入隊壮行の辞であった。式の終わりに校歌を斉唱したが、校歌を歌うのもこれが最後かと思うと急に熱いものが込み上げてきたことを覚えている。この時一心にグランドピアノを弾いてくれた人への思慕の情は深い。彼女は真心こめて鍵盤をたたき、征途につく若人への餞としてくれたものと信じている。この時の校歌斉唱は今でも胸臆にあり、校歌を歌うたびにそのシーンが蘇る。

6 戦時下の教育・研究・校友会活動

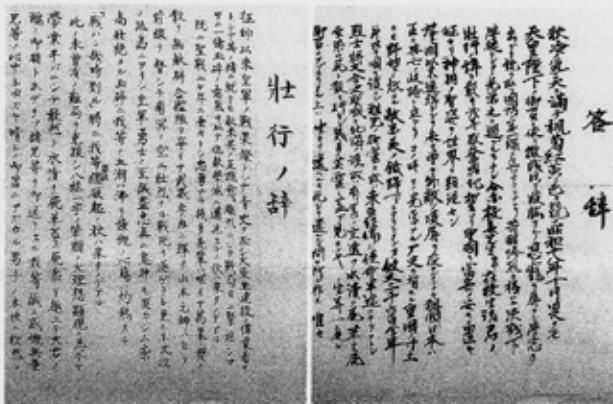
昭和6年の廣州事変前後から学園も戦時色が濃くなり軍事教練が強化され、行軍・教養遠征宿泊・査閲等が毎年実施された。そしてついに軍醫工場への学徒動員、陸軍特別幹部候補生、陸軍特別操縦見習、海軍整備学生

への学徒出陣となってペンを捨て、銃をとるという時代となったのである。このような戦時色は学問や教育のうえにも影響を及ぼし、旧課程では研究指導は第3学年に課していたが、これを第2学年の2学期から課し学生の自学自習、独



経済学部校舎

創力養成につとめた。また基本科目を必修として選択科目を廃らした。昭和12年7月7日に勃発した日中戦争を契機として東亞に関する知識と東洋人の新しい発展方向に関する判断力を養う目的で昭和14年4月に東亞科が増設された。この制度は山口高商と本校だけのもので、学科目は高商の通常科目のほか中国思想史、中国经济論等の東亞に関するものが多くあった。



学徒出陣の辞及び答辞 「壮行ノ辞」は若松信重氏（高商昭和19年9月卒）、「答辞」は入替者総代岡本次郎氏（東亞科2年在学中）のものである。

平成元年3月発行「滋賀大学史」から抜粋

思い出

後藤 隆(本20)

私にとって彦根高商時代の思い出の大半は剣道であった。

広島商業の頃、二段になり、高商の剣道部の同級生8人の中では大将格であった。毎日放課後、夜暗くなるまで稽古をした。毎週一度、京都の武徳殿教授の佐藤忠造教士が指導にこられ、士気は高かった。特に一年上級組は三段が二人もいて強く、三商大主催と岡山医大主催の全国大会に夫々優勝した。二年になると、堀端にある松聖館(字が間違いか)に、近郊通学の者を除き全員、合宿させられた。三畳位の個室で、母屋の二階部屋には一年上級の宇野宗佑氏が寮長として睨みをきかしていた。彼は、戦後、シベリヤ抑留から帰り、政界に入り、田中角栄の門下で、通産大臣、首相を務めたが、学生時代も優秀で、彼の部屋は本棚で一杯で、短歌や俳句を嗜み、音楽好きか、ハーモニカを吹いていた。なかなかのファイトマンで厳しい人だった。寒稽古は早朝、雪の中を裸足で道場まで駆けて行った。当時、戦争が激しくなり、三年生になった時、名古

屋近くの下松陸軍造兵廠に勤労働員させられたが、その頃、一年先輩の川村氏と彦根の警察署で昇段試験で渡り合い、川村氏は四段、私は三段に昇格した。

戦後、私は剣道を止めた。しかし、京都大学時代、偶々佐藤師範にめぐり合い、先生の勧めでお供して週末、八瀬の大原のせせらぎの庵に、長い白髭の古老を訪ね、虚無僧流の尺八を教わった。一年位続いたが、それから先生とは疎遠になった。また、私は終戦時、宇佐海軍航空隊にいて、主計少尉、庶務主任として主計長と共に隊に残り、二千人の隊員の退職金支払の残務整理をして翌年二月郷里広島に帰ったが、両親は爆心地から2キロの家の下敷きに遭い、10キロ奥の親戚に避難していた。父は比較的元気だったが、母は原爆症状ひどく寝込んでいた。私は面白くないので彦根の元下宿先に移り、学校の図書館通いをしていたが、西田哲学を思想とした難解な経済原論を習った桑原晋先生が、公職追放になって彦根の自宅に居られ、剣道部の部長でもあったので、時折お伺いして話を聞いた。九州佐賀生まれで古武士の風格の人だった。また、痩せて小柄、独眼の田岡先生は教頭でもあり憲法の講義を受けたが、たまたま戦後、ヤンマー本社の顧問弁護士をしておられ、奇縁で私の結婚式で仲人をお願いした。私は昭和32年、ブラジルヤンマー創設のため渡伯、15年前に社長を退任、いまだ本社の参与の資格で、妻に先立たれ、米寿を過ぎててもブラジル生活を楽しんでいる。

彦根と私と俳句



榊原

明(本20)

卒業六十周年の記念文集に、私の拙い俳句を寄稿しようと思いついたのは、実は私と俳句とは何れも彦根と深い関係があった故です。まずその理由から説明します。

私は愛知県立豊橋中学校(現県立時習館高校)の四十三回卒業であります、同期の卒業生に山本勇君という学友が居りました。彼は常に、生れは彦根で高商の門前で生れたと申して居りましたが、当時はそれほど気にも止めて居りませんでした。いよいよ卒業間際になり、私は名高商と早稲田を受験することに決めていましたが、身体検査日の都合で両校とも受験する事が不可能となり、急に彦根高商に変更しました。前記山本君は常に彦根高商入学を希望していましたので、受験日には湖畔の宿(名前は忘れましたが)に同宿して試験に望みました。彼は不運にも不合格となったので、大阪歯科専門学校へ進み歯科医師となって豊橋で開業する結果となりました。

今より七年程前になりますが、私は菌の治療が必要になったので彼の医院を訪れて治療をうけ、義菌を作って貰いました。さて、料金を支払おうとすると、彼は「料金は受け取らないが、その代りに俳句の会に入らないか」と誘われて否応なしに入会させられました。私は勿論作句するような文才も無かったのですが、句会に出席の回数を重ねるうちに俳句の面白さに魅せられて今日に至った次第です。

前書が長くなりましたが、今回の文集発刊にあたり「是非俳句を寄稿して」と勧められて参加した訳です。あれこれ思案の中から『彦根だなあと思われる句』を中心に選び出してみました。駄句の羅列でお恥ずかしい次第ですが、彦根のイメージを少しでも思い浮かべて頂けるならば、これ俳人の喜びであります。

俳句は金も要らず、時間の制約もなく何時でも作れます。そして突然名句が生まれる楽しみがあります。興味のある方は惚け防止のためにも是非やってみて下さい。忘れていた文字も思い出させてくれます。

人知れず芽ぶく柳やお濠端

緑雨彦根の城は煙りたる

夏燕飛ぶや一閃天守閣

冬木立埋れ木の舎訪ねけり

雪積みて魴の船の帰り来る

南冥に還らぬ友や桜散る

青春の夢未だに尽きぬ傘寿かな

二〇〇六年二月

「彦根高商 九十九会」発行

『卒業六十周年記念文集』から再掲

拾われた青春 — 対米戦抄録 —



岸川 通 藏(本21)

一 見よ満々として琵琶の湖

後年、大学院受験資格のひとつになる卒業証書第三三三〇号は昭和二十年九月二十日付、在学期間のうち彦根は一六ヵ月しかない。彦根高等商業学校を受験したのは旧制高校を落ちた翌日で、滑り止めに高等商業の受験が可能になった初年、昭和十八年早春である。

年末には退学して高校に再挑戦する夢は、一〇月に公布された在学徴集延期臨時特例・学徒出陣で呆気なく消える。しかし、凄い先生方の教室は魅力に溢れ、例えば、『BACON'S ESSAYS』[XXI OF STUDIES] For expert men can execute……; but the general counsels, and the plots and marshaling of affairs, come best from those that are learned. に刮目するがその幸せは続かない。既に昭和十七年六月、ミッドウエーで練達の搭乗員と主力空母四隻を失い、風雲は急を告げていた。

二 体力が全て

昭和十九年三月「決戦非常措置要綱に基く学徒動員実施要綱」の動員先は同年八月、名古屋市大同製鋼宝生工場である。製鋼工は午前六時からの二直二交替、二トン電気炉の小窓へシャベルで屑鉄の装填に寸秒を争い、熔鋼になるとテストピースを採って試験室へ走り、成分を調整して出鋼することを休まずに繰り返す。重労働には耐えたが、七月に陥落したサイパンから高空で来襲するボーイングB 29に対する有効な反撃を一度も見ないまま徴兵される。

三 出陣学徒の疑問

昭和二〇年二月入営、一九歳。渡された九九式歩兵銃・二八六六五四〇号には天皇家の兵器を示す菊の紋章が刻まれている。旭川市北部第三部隊の兵科幹部候補生合格者のうち九四名が大雪山に一週間隔離され、凄まじい昼夜強行演習の最終日に経理部の試験を受ける。問題は「商業使用人」「ブラウン運動」等、論文は「和の意義につき述べよ」で二名の合格発表は七月十二日、米軍の沖繩上陸(四月一日)後のこの周到な試験実施には違和感があった。

経理部合格以前は「ア号作戦」と呼ぶ爆弾を抱いて米軍戦車に飛び込む訓練で、この戦死は人間魚雷回天かいてんや有人ロケット爆弾桜花おうか等々の特攻死九六〇五名の集計外である。四月から六

月の沖繩戦では、米英艦船一三二七隻に対して航空特攻二五七一機の命中率が七・二%しかない。一方、米軍は「日本打倒作戦計画」を実施し、七月二十六日、日本に完全降伏を呼び掛けた「ポツダム宣言」を発表する。

八月十五日敗戦、女性も戦火の被害が大きい。B29に家を焼かれ青年の戦死二三〇万人以上で一緒に暮らす男が居ない。一夜の食と宿を求めて駅周辺に群がる女を見たのは、復員直後の昭和二〇年九月末である。これらの戦争責任(法的、政治的、道義的、開戦・戦争遂行、敗戦等の責任)は誰にあるのか？

天皇の戦争責任については諸説がある。東大教授(のち最高裁長官)横田喜三郎「過去の最高の責任者がその責任をとろうとせず、国民もまた責任をとらせようとせずあいまいに葬り去るならば、どうして真の民主国家が建設されようか」(昭和二十三年八月二十六日)。京大教授大石真「法律論として見る限り天皇に責任はないが、道義的にみれば責任があると考えるのも自然だろう」。

四 再度の青春

昭和六十二年四月「桜花爛漫」の大阪市大に合格、六十二歳。経済、商学両科のゼミに参加を許され、修士論文は運輸省の港湾計画にかかる採算基準を設定する『地方(新設)ターミナ

ルの需要条件』である。港湾局の「道央、仙台湾、新潟、北関東、若狭湾、沖縄等の地域に総合的な機能を備えた外貿ターミナルを整備する」(運輸省『21世紀への港湾』、昭和六〇年四月)には原価意識が欠落している。

「紅萌ゆる」京都大学の指導教官は「修学は三年以上を目途とし、一年目は学部から始めること、行政法の岡村先生には話してある。試験にパスしたので何も遠慮せず自由にして宜しい」と法一九研究室に席を与えられたのは平成六年、六十九歳になっていた。

再度の青春に恵まれたのはその昔、彦根高商に拾われたお陰に外ならない。

以上

彦根での思い出の数々



廣瀬 精一（本21）

一、住居、食事、娯楽について

一年間は全寮の予定でしたが、寮が火災になった為、下宿する事になりました。

食事は学生専用の所（松盛館）とする為、学校の行き帰りと、更に夕食の為、日に二回城址を眺めて外濠を往復しておりました。

食事もドンブリ一杯ではたらず、雑炊の行列によく並んでいました。

ただ、試験の時は時間が惜しい為、雑炊の行列についておれず、家から持って来たソバ粉とか、大豆の脱脂豆を食べて我慢していました。

娯楽については、色んな規制が行われ、飲食店も時間や食べる物も限定され、映画も外国映画はドイツ映画丈と云う様になって、余り行くこともなく、古本屋を廻って外国の小説を買ったり、友達の下宿に行つてだべる位のことでした。従つて余り金を使う機会もなかったので、

仕送りがいつも余っていました。学生時代が一番青春としては楽しい時だと思えますが、特に、これと云った事ありませんでした。

二、クラブ活動について(馬術部)

馬術部に入ったが、馬も徴用され、一般にも少なくなり、学校にもいない為、日曜日に農家へ行つて、練習をすると言う様な状態でした。

一度京都の輜重隊に、一週間程泊まり込みで訓練に行つた時、一度京都市内へ乗馬練習に出た時、段々、皆から遅れ、後ろからついて来ている兵隊が遅れた馬の尻を叩いたため、馬は急に駆足になり、びっくりすると共に振り落とされない様必死になり、何とか落馬せずに兵舎まで帰つたことがありました。

三、勤勞奉仕様々

麥刈、稲刈奉仕に能登川とか河瀬に行きましたが、何分にも初めてすることで、余り役に立たなかったと思いますが、農家の方には非常に大事にして頂き、特にその当時としては有難かつたのは白米のお握りをお腹一杯食べたことが、非常に嬉しく忘れられない思い出となっております。

名古屋の大同製鋼に行った時は、勤労働員と云うことで、長期間寮に泊まり込みで、交替で夜勤もすることになり、食事とか睡眠も不規則のため、時々体調をこわして帰省静養を必要としました。

四、帰省

彦根から家(兵庫県芦屋)に帰る時は良いのですが、家から帰る際、長距離の汽車の切符の發賣枚数が制限され、朝早くでないと買えなくなり、一度夜に帰る時省線の切符は自由を買えたので京都まで来て、彦根までの汽車の切符を買おうとしたら賣って貰えず、止むを得ず、省線一駅丈の切符で大阪發米原止りの汽車に乗って、車中はがらあきで車掌が見えると便所に入った。彦根で下車した後、駅の便所に入って汽車が出てから荷物の出入口から出たこともあり、ありました。

又一度郷里(富山県)に帰る為、彦根で米原行の列車に乗ろうとしたら、車中が一杯で乗車口の戸が開かないため、止むを得ず、彦根から米原までリュックをかついだまゝで乗車口にぶら下がって行ったが、途中短いですが、トンネルもあり一寸怖い思いをしました。

五、その他彦根での思い出

毎日外濠を通つて学校に行く時、堀と石垣や色々な木々を眺めながら歩いた静かな街並、特に櫻の頃はそれらが一段と華やかに映り、夜は薄墨の内に浮かび上がる様に見え、堀の中では食用蛙が大きな声で鳴いていたのを思い出します。

城には人が訪ねて来た時には、必ずといってよい位登つたものですが、自分一人でも気が向くと色んな登り口から何度も登つたものです。特に、夕方天守閣から夕陽の沈む琵琶湖を眺めるのが好きでした。

又周囲を眺め眼下に見える昔の藩主の下屋敷の楽々園にも一度泊まつて見たいものだと思いますが、彦根にいる時は勿論、戦後何回か彦根に行く機会はありましたが、仲々泊まる機会がありませんでした。

しかし、今から三十年程前に勤務先の職員と一緒に彦根城、竹生島、伊吹山へ旅行した際、玄宮園の八景亭に初めて泊まる事が出来、古風な建物と泉水庭園を眺め四十年振りに思いがかなった気がいたしました。

恩師宅訪問記

前畑 成 温(本22)

彦根における青春の思い出は数数あるが、その中でも忘れられない思い出は恩師宅訪問のことである。

私は何人かの恩師宅を訪問したが、それを記述したい。

まず、私が在校時代の校長(初代)の秋山範二先生宅である。先生は道元の研究の権威であり、当時私も「歎異抄」を愛読していたので、道元の話を知ろうと思いつきました。私達は三人でした。所が実際に道元の話は全く拝聴することなく、先生の前で三人が勝手に人生についての討論を始めたのです。先生の前にいると、何か心の中のものが出出される如き思いで、私達は言いたいことをしゃべり続けたのです。先生は私達の討論には全く口をはさまず、腕を組まれて、「フム、フム」とうなずいておられました。考えてみると、先生はさすが教育者で、私達は言いたいことを腹藏なく吐き出す形になりました。これは得難い収穫でした。私達の想

い出の一齣になりました。

続いて経済（金融論）の石田興平先生宅訪問です。先生宅へは私一人で行きました。

私は先生から経済の話ではなく、人生の話を聞こうと思い訪問しました。私が「歎異抄」の事を口に出しますと、先生は目下自分はこれを読んでいると出して出された書は、田辺元先生の「懺悔道としての哲学」という書でした。当時私は哲学ゼミナールに入っており、カントや西田幾太郎を研究していました。私は田辺先生の書は読んでいませんでしたが、石田先生のお話してから人生をすこし理解出来たような心境でした。

続いて、商業学の芳谷有道先生宅訪問です。先生のお宅は学校のすぐ隣の公舎に住われており、つつましかなお宅でした。先生宅へは私一人で訪問しました。先生は背筋をぴんと伸ばして、私と向き合い対座されました。当時、玉川上水で入水自殺した作家の「太宰治」の全盛時代で私が太宰の話をしますと先生も太宰の「人間失格」を読んでおられ、大変感動したというお話でした。先生とも商業の話でなく、人生の話に終始しました。卒業後も私は先生に人生論めいた長い手紙を差し上げた事がありました。先生は私の手紙を授業中に、生徒達に読まれたとお聞きしました。

私はこのほか、哲学の高田彬先生宅や、英語の片山暢一先生宅、それに方角の森順次先生宅を訪問しました。紙幅の関係で割愛させていただきます。

結局、私が先生宅を訪れて得たものは、人生の生き方でした。そして、三年間で得たものは経済や哲学でなく、学ぶとはどういうことか、学ぶことによって、どのように人生を変えてゆくのか、という事でした。

終りに青春の想いを短歌に託したいと思います。

吾が青春の短歌五首

想い出は尽くせぬも恩師宅への訪問今も鮮やかに甦るなり

毎夕赤赤と陽の沈みゆく湖畔に立ちて遠き未来を夢みし日日

友人と小学校庭にて野球せし時淋し気に見つめいし若き女教師よ

幾年か経て下宿先訪れしに人の住む気配なくて家はさびれていた

年を重ねて妻と母校を訪れき先ず誘いしは想い出多き偲聖寮なり

(完)

わが青春の友



久保田 暁 一（本23）

この五月に大阪に住むN君が手紙をくれた。その手紙には、奥さんを昨年亡くして以来の生活状況が簡潔に書かれ、それに関連して、近く息子のいる金沢に移る予定だと記されていた。その夜、私はN君に電話を入れて、詳しく状況を確かめた。N君は、「心配をかけてすまない。僕は元気だし、息子にも負担をかけるつもりはない。だけど、これからの行く末を考えておくことも大事だと思うからね。」と、N君は菌切れ良い、さばさばした口調で言った。そして終わりに、「君の元気な声を聞けて良かったよ」と言って電話をきった。

数日後、N君は、金沢行きを実行した。そして金沢から手紙をくれた。私は季刊で出している個人通信の『だるま通信』を送った。それに対してN君は、励ましの意味もこめてカンパの寄金をしてくれた。

N君は、本当に律儀で気の良い友人である。機敏で容姿も整っている。その日、私は再び金

沢へ電話して、お互いに高齢だから身体に気をつけて元気に生きて行こうと励ましあった。その話の合間に彦根経済専門学校に入学し、共に学生寮の「偲聖寮」で生活した六十余年前の青春時代を懐かしむと共に、特に親しくしていた寮友―S G君、A I君、T N君らの早すぎた死別を惜しんだ。

振り返ってみると、G君は豪快で物怖じしない性格で、寮内で自由にふるまい、闊歩しながらも誰からも親しまれ、一目おかれていた。二回生の時に学生会長にも選ばれていた。卒業後、K銀行に勤め、彦根支店長になった。

I君は卒業後、地本の金沢に帰り国税局に務め、部長クラスまで進んでいる。非常に母親思いであり、よく勉強していた小柄な青年であった。

もう一人のT N君は運動競技、特にマラソンを得意とし、「オリンピッククに出るんだ」と言い、いつも走りこんでいた。卒業後は建設会社につとめていた。

これらユニークな個性と力を持つ友ではあったが、早く死に、残っているのはN君と私だけである。書き遅れたがN君は、卒業後は「日商岩井繊維KK」に就職し、その人柄と能力を発揮して活躍した。最後に私だが、経専に入学して間もない昭和二十二年五月十一日、クリスチャンの姉が二十一歳にして肺結核で召天したのを契機に、キリスト教会に行くと共に聖書を手にするようになり、翌年のクリスマスに郷里の日本キリスト教団大溝教会で受洗す

るまでになった。思うに人生で大切なこととして「出会い」があるが、幾多の先賢が指摘しているように、人生途上において「いかなる書物、いかなる人」に出会うかによって、その人間の行く道が決定づけられることが多い。私の場合は、クリスチャンの姉が、若くして教師となり、清純な信仰生活を全うして、召天した姉との愛と死の出会いが、私の人生の方向を決めたと言えよう。

姉とは死別したが彦根では、経済専門学校の一学生として商業経済を学び、校内の一角にたてられた「偲聖寮」に住まいして、新しくできた友のN君やG君やI君らと親しくして生活を楽しんでいた。夜、肩を組みながら町を闊歩したり、恥ずかしげもなく寮歌を歌って歩いたりするのも楽しかった。時には仲間の真似をして、ズボンのかわりに袴をはいて得意になっていたこともある。

眼もはろばろと暁の

湖上を渡る春風に

陽と波の交響は

住き日明けぬと告ぐるかな

佳き日明けぬと告ぐるかな

これは「偲聖寮寮歌」一番の歌詩であるが、今私は、当時の稚氣的だった姿を思い浮かべながら口ずさんでいる。

N君も私も早や八十四歳。もうあとがない。私は学校卒業後、いろいろ曲折はあったが、教師として一途に歩んできた。生かされてきた命である。命在る限り精一杯生き抜きたい。

私は、これまでの交流と支えを感謝しつつ、わが青春の友であってくれたN君の健康を心から祈っている。



昭和 25 年卒業の日に彦根経済専門学校校庭にて 左はN君 右は筆者

(二〇一三・八・二二)

懐しく楽しかりし彦根



高木 早苗(本24)

随処作主立処皆真

旧制中学5年間は余りにも波乱万丈の月日であった。小学校、中学校と教育はすべて軍が唯一つの進路で何の疑いもなく突進して来た。中学3年の真夏8月15日玉音放送と共に敗戦という厳しい現実には平和国家として生きて行かねばならなくなった。

直面した入試に真剣に学友と競い合う日々を過ごした。

桜花爛漫の彦根城下の入学当日は50年経過した今でも臉にはつきり浮かぶ。彦根経専生として3年間経済的条件の悪さを除いては振り返る度に楽しみで一ぱいの毎日で卒業したら社会人として活躍する事を夢みながら遊びに勉学に励んだ。

大垣中学時代からの学友も10数名と多く遊びとともに悪事も働いた。人との交際、話術も不得手だったのを少しでもと思えず、められるまゝ、に學術講演部に入り、虎姫高校、長浜北高

校、八幡商業高校等、江頭教授等と共に高校の講堂で30分間の話をしたのが恥かしくもなつかしく思い出される。朝鮮動乱真最中の8月15日から2泊3日で湖北を野宿で過ごした。

当時は鉄道もなくバスも利用せず木の本駅からテントをバズーカ砲にみたて、歩き、自炊しながら夜には遠く彦根の灯を昼には琵琶湖で遊泳した。

卒業式前に、多忙との事で3月1日から東海銀行本店営業部の為替課に勤務した。家族から離れ寮生活では、優秀な先輩達も多く充実した生活だった。卒業当日学友諸兄とは、今日を限りで再会出来ない学友もいると思うと非常に切ない思いがこみあげた。

恩師から一言と、教授にお願いしたところ傍の硯から筆をとり校長の秋山教授は副題の「随处に主と為りて立つ處皆真なり」と一気にお書き戴いた。曹洞宗、道元禪師の真髓を説いた言葉と承った。江頭教授「青雲万里道不窮」森教授「正心」高田馨教授「忍耐」、芳谷教授「美は永遠の欣びなり」を戴いた。ゼミの山本教授には御病氣の為残念乍ら戴けなかったが卒業後拙宅にもお越し頂き、先生から薫陶を受けた。

東京に居を移され喜寿の祝いを川本、楠田両兄と社会において大活躍しているゼミ後輩達と共にお祝したのがなつかしく思い出される。

東京都において問題となった複式簿記、中世ローマの僧侶であり数学者であったルカ・パチオリの発見した貸借平均の原理(今ではノーベル賞もの)を我が人生に適用できれば最高と考

える。

哲学に背を向けた学生時代、今となって秋山範二先生の「随処に…」に寸暇を惜しんで勉強したいと思っている。

入学直前後の思い出



永野 隆一（本24）

惺寮でのストーム決行

受験時の宿は、袋町近くの旅館「とばや」でした。当夜は受験生で溢れ、夜中に掛けふとんを取られ風邪を引いての受験でした。

入寮は東寮二号室で敦賀中学出身の小高昭一君と同室、福井中学出身の八田一郎君、信州出身の相馬忠雄、長島文雄、今村雅弘の諸氏も続いての部屋に入っていました。

入寮早々、茶目つ気を発揮して、ストームの決行となり、東寮有志数人がグループを作り、下駄を履き、洗面器を叩いて先ずは西寮二階からスタートしました。

蛮声を張上げてのストームは、途中賛同者も増え、階下部屋の電灯が点滅するほどの勢いで、一段と大声を挙げて中寮に差し掛かるや「コラー」の一声、……一瞬蜘蛛の子が散る如く各自近くの部屋に潜り込みました。

声の主「カント」こと高田彬教授がステッキ片手に、隣りの官舎から駆けつけたという次第。「主謀者、煽動者、同調者は速やかに舎監室まで出頭せよ」との厳命、当初東寮の我々主謀者は白を切っていたが、背の高い者が居たとのこと、「こりやまずい」と観念して出頭した。（因みに同室の小高君は寮一番のノッポだった。）

結局十人前後の寮生が深夜のお説教を頂き、退寮寸前で交渉結実し事無きを得ました。

彦根市街に乗り出してのストーム

入寮歓迎会では確か野村・中島先輩達のご指導で、食糧難のため休業中の食堂を利用し寮歌の指導、市街ストームの足の運び方（右手右足を揃えて前に出し、次に左手左足を前に出す踊り方）の指導実習を受け、隊列を組み蛮声を上げながら、銀座丸菱前の広場まで元気よく街頭ストームを決行したのが懐かしい。

このような一種の馬鹿騒ぎが出来たのも、伝統的な彦根市民の優しい心くばりがあってこそのお祭り騒ぎで心から感謝しなければならない。

このストーム練習に先立っての、野村先輩の流暢なチャン語の歓迎の辞には、度肝を抜かされたこと。またこれを機会に百人余の寮生の間に、熱い友情の芽が醸成されたことが有難かった。

在学中の大事件に驚く

一、昭和二十三年六月二十八日(福井大地震)

午後五時十四分(夏時間)震源は福井県北部の九頭竜川下流域で、マグニチュード七、二とされ、福井市を中心に死者三、八九五名、負傷者一六、三七五名、建物全壊三五、四二〇戸、半壊一一、四四九戸、焼失三、六九二戸で、在寮福井県人に召集がかかり、翌朝一番の列車に飛び乗り、鯖江市出身の八田兄と帰省を強行した。(幸い父母、妹四人無事だった。)

二、昭和二十五年六月二十五日(朝鮮戦争勃発)

在学三年生の時、ゼミの友人桂田兄と二人で小倉先生のご指導の下、某協同組合の決算事務をやっている最中に朝鮮戦争勃発のニュースが入った。

忘れまじ痛恨事



池下

正(工)

工専卒後、何のためらいもなく親父の事業を継承し仕事も順調に軌道にのり仕事が進展していたところ、昭和36、37年と引きつづいて2度にわたって台風に見舞われ、増設間もない工場は大きな被災を受け莫大な損失を被り、その後30余年を経て平成7年1月末の阪神淡路の地震にて自宅が大きな損傷を受け、10ヶ月後には新居を造らねばならないはめにおちいった。これら自然災害にも増し痛恨の思いは、昭和20年4月明石より偲聖寮へ入寮、暫くでしたが米飯が食べられたこと、又人間は飢餓状態に入ると、理性を忘れ自身の制御ができなくなる様を目にする貴重な体験をした。寮では小野、矢野両君という友に恵まれ三ヶ月余を過ごし夏休み帰省への列車の切符をやっと手に入れ、鈍行にて4時間余、やっと山陽線須磨駅に停車した列車は一向に動こうとしないので10km余り歩いて、明石大蔵谷海岸縁の自宅にやっと着いたところ、住処を目にすることができない。エッどうなっているのかと思ひ敷地に入ると、地下防空壕内

にて生活をしている両親を目にし無念の涙をのむ。親父の言葉では弟は学童疎開にて不在、お前が一緒なれば消火できたかも知れないといい、そのときの様子、油脂焼夷弾は明石海峡の洋上より落下し、庭に落ちた2つは消したけれど無念の言葉、我が生涯を顧みて最大の痛恨事であった。

わが青春の思い出



伊藤 藤 雄(工藤)

昭和20年4月、彦根工專入学式の当日、米原を列車が発車した直後に、米軍の空襲に遭い、立ち往生した列車の中で歯ぎしりしていたものの、結局式には間に合わず、遅れて入学したことは、鮮烈に頭に焼きついている事実で、記さずにはいられないことである。

その次は何かと、向学心を満たすのも、まず食う工夫からせねばならない最低条件の時代であったが、寮生活の楽しい思い出はあった。予想だにもしなかつた月夜の窓に、ノートにかかった雨でない降り注いだ雫の犯人の追跡等、1年後下宿生活に入っても外食、食券1枚の食事では足らず、それぞれの工夫をしたものだ。幸い私は松盛館のTちゃんに惚れられ大盛り丼にありついたのは懐かしい思い出の一つとして記しておきたい。

その後、押しかけ下宿人岐阜のH君と同居することになり、真面目な私も次第に彼に感化され、女性を通して食べることには不自由しなくなり、四国のA君と洋裁女学生と親しくなり、

永源寺等今で言うデイトを重ねることも全て食欲を満たすのが先決の間柄とは何をか言わんやであった。

最後に一つ、私は中藪に下宿していたが、学校の正面の道を真南に向かいつき当たりに、大きな味噌樽が干してあったのを記憶されてはいないか、その中とある女の子と、初ベーゼをした覚えがあり、樽中の味噌の匂いが臭かったこと、これを称して臭い中とは、よく言ったものだと苦笑を禁じ得なかった思い出の数々等女性を廻る話題も食欲の一環と、今思えば情けない次第なり。社会に出てからも若い時はよく女に持てたもの、先年の京都におけるO君お骨折りの機友会宴会時の芸妓さん、私は繊維関係にいた時、よく先斗町で遊んだもの、舞子さんに旦那が出来て一本になる前、所詮処女を捧げて貰ったこと等、女性を廻る話題には事欠かない積もりでいるが、青春とは女性抜きでは語られないのではないか。

「若さとは年齢でなく心だ」と言われるところだが、今年の機朋会開催の10月には、大半が古稀を越した者ばかりの集まり、青春再びの気概だけは失わず会い見えたいと思ひ、馬鹿げたことを書き記したが、その際に表現の不可解なところは歓談の席上大いに語り明確にするつもり、酒の肴にされることを望んで青春の思い出記を閉じることにする。

平成10年2月2日記

(彦根工専卒業50周年記念刊行小冊子から抜刷)

永沢先生の思い出



小野 盛四郎(工2)

彦根の3年間に得たものは何かといえ、それは師友である。

とくに私が大きな影響を受けたのは永沢毅一校長である。永沢先生は私たちが入学した年の昭和20年12月彦根工専校長(経専校長も兼務)として着任された。

先生から教わったことは数多いが、たとえばサツマイモ盗難事件。その頃は食糧難がひどくて先生も生徒もグラントを畑にしてイモやカボチャを作ったが、これが盗まれるのである。

このことについて先生は言われた。「僕もイモを盗まれたがね。しかし簡単に、この学生を罪におとすことができるかね。非常に煩悶するところだ。」

内村鑑三氏の無協会派のクリスチャンとしての先生は真剣に悩まれたようである。

もう一つは在学中、若い血を燃やした工専存続運動は約50年後に結実し、1995年4月滋賀県立大学(彦根市八坂町)として開学した。

96年8月岐阜県長良川での同期会の帰途、中村恒夫、御所名達禎（竜吉）、高橋信人（小生の義兄）の3君と彦根へ立寄り、同学を尋ねたのである。

（彦根工専卒業50周年記念刊行小冊子から抜刷）

私の二十歳

木村 正 夫(工)

戦争末期の食料不足は、だんだんと深刻になって来ていたが、終戦後は貯蔵物資の放出もあり、久しぶりの砂糖や缶詰の配給に喜んだものだった。それも21、2年頃になると全くなくなり、配給は遅配、欠配が続出した。

ヤミ市、ヤミ米、タケノコ生活、等の言葉が新聞にあふれていた。

22年1月からヤミ取締武装警官の列車搭乗が開始され、22年7月には、全国一斉の飲食店の休業日があり、また農林省の食料緊急対策本部が発足した。10月にはヤミ米を買わなかった山口判事の栄養失調死が新聞で報道されている。

農家は、厳しい米の供出督促があったものの、自家用米は確保されており、中にはヤミ米で大いに儲けている家もあった。

しかし私の家は、昭和18年4月母が病死。5月父が出征。子供4人は叔父の家に預けられて

いた。

6 反余の水田は他人に耕作してもらっており、配給生活であった。

(彦根工専卒業50周年記念刊行小冊子から抜刷)

わが青春の思い出

近藤 伊助(工)

私は昭和20年10月1日に転入学しました。学校には家と教室との往復で、学内での行動範囲も狭く、寮に伺った記憶もありません。

予科練の復員組ですから、最初はとまどいも多く授業は先ずノート取りだと教えられる始末でした。学科も数学はいきなり微分・積分であり、英語は高商の片山先生が流暢に朗読されるなど、前に習っていたものとのギャップが大きすぎて悪戦苦闘したものです。

当時は戦後の混乱期で世は食糧難の時代でした。就職も家から通勤出来る学校の西隣にあった近江絹糸紡績(現オーミケンシ)に入社しましたが、定年迄に社宅を9回も転居する羽目となりました。

思い通りには成らないものです。お陰で世間は広くなりましたが…。

今も時々大学の前を通りますが、校舎も近代建築に建て替わり、当時の面影を残すのは、校

門と講堂のみとなりました。

卒業以来半世紀、無理もありません。往時を茫洋と想います。

(彦根工専卒業50周年記念刊行小冊子から抜刷)

わが青春の思い出



田中 邦博(工2)

昨秋、私は赤茶けたB4のザラ紙に、横使い、縦書きガリ版刷りの1枚の名簿を発見した。

滋賀県自動車技術要員養成所(第十一期生昭和二十三年六月二十九日卒業)の表題で、教師2名、書記1名、生徒49名の住所録である。

滋賀県愛知郡稲枝村駅前・田中邦博と彦根市大藪町・角川藤四郎の氏名が見つかる。

当時は県髓一の運転免許取得の養成所であった。現在の瀬田駅と南草津駅の間でJRに平行的な国道1号線沿間にある。

当時は起伏の有る丘で国鉄線側に傾斜して、練習コースも地道の小礫路、国道は未舗装で狭く、通所には石山か草津駅よりバス下車徒歩10分であった。

教習車はフォード乗用のセル不良、クラック始動で、エンストは下車。クラック操作で逆転ケッチンは毎度の事。直角路交代には角の小石の上に後輪を乗せないと脱輪しタイム超過。今

考えると、手作りの教習である。

現在の近代設備教習と比べ、懐かしき免許取得である。

「参考」ちなみに私の免許書は23年6月30日取得。第2種免許・大自二・大型・大特・けん引。当時の免許種類は普通自動車であった。

教習期間は1ヶ月か、2ヶ月か、記憶に無い。

(彦根工専卒業50周年記念刊行小冊子から抜刷)

学園の思い出



高橋 信人(工2)

卒業後半世紀、今日までエンジニアとして過ごしてきた私にとって、狩野先生や島津先生の工学関係の講義は、まさに入門講座であり基礎作りであった。入学して初めて手にした計算尺、電卓時代の現在には使用する機会もないが、手放せなくて仕舞ってある。また和田先生のドイツ語、習いたてのメッチェンを連発したのも良い思い出、当時お世話になった粗悪な印刷のドイツ語辞典は、今でも時々お役にたっている。材料力学の参考書も、新刊の工学便覧(機械学会)と本箱に同居している。それにしても、狩野先生のエントロピー・エンタルピーは今でも難解であることには変わりがない。

講堂で催された学園祭(?)の劇に出演、アイロンの節電使用方法について講じた覚えがあるが、地球温暖化防止を目的とした節電が叫ばれる今日、時代の先取りであったのかもしれない。いずれにしても思い出は尽きない。

(彦根工専卒業50周年記念刊行小冊子から抜刷)

わが青春の思い出



津布良 孝 夫(工2)

戦後の混乱が続く昭和23年。工業専門の学習を怠った小輩の如きに進路の展望はなく、企業への就職など遠い夢であった。

その頃たまたま新制の彦根西高校が誕生。理系教師を求めていた。就任したものの担当はなんと高2進学組の物理。不安と緊張が去らず授業を前に一夜漬け同然の準備に自分との格闘が始まった。初日の授業が今も忘れられない。

物理教室は暗幕に閉ざされ豆電球が一つ点灯。若僧教師に一泡吹かせるべく、生徒たちは机を叩いて喧騒そのもの。小輩沈着を装い暗幕の隙間から射し込む一筋の太陽光を射し「光は直進する。その光線を見給え。科学は実証より始まる。」と大音声。

一瞬沈黙が流れ平穏に戻る。すかさず Wissenschaft と黒板に大書し物理基礎編の講義が緒についた。危険な船出だ。

「数段高い能力・識見がなければ人を教えられない。」といった工専・永沢校長の戒めを実感。己の非力を恥じ就任2年後早々に教壇を去った。

流浪の歲月の始まりである。灰色の青春の一齣である。

（彦根工専卒業50周年記念刊行小冊子から抜刷）

私の就職事情



中 村 恒 夫 (工2)

大阪の工業学校を卒業。母方の里の甲良町尼子に疎開。彦根工専に入学。卒業当時は、縁故も面接先も無く、仕方なく田中邦博兄が古資料から発掘してくれた自動車教習所に3ヶ月通学・卒業。免許取得。

その間、彦根口にあったミシン会社に、どなたかの紹介で3ヶ月勤務。

然し「大阪に戻って」の夢を捨て切れず、化学科を同年次卒業の多田吉三君（大阪市立大学生活科学部教授）の紹介で、淀川の職安経由で、西野田労働基準監督署に「雇」で採用となった。

仕事は賃金不払などの苦情処理。矢張り大手企業への夢を捨て切れず。ある日の朝日新聞の求人広告に応募。50人中3人の採用枠に入り、日立造船・築港工場に入社。

然し配属先は前歴が災いし（？）新設の「安全」担当となった。当時「安全」という職務は

一般に認知されておらず、某先生から「安全の仕事って何するの！」という質問を受けた記憶がある。

50代に入り「大企業志向」も問題。を体験する。

（彦根工専卒業50周年記念刊行小冊子から抜刷）

わが青春の思い出



山路

宏(工)

古希の世代を迎えた。今日迄の暮らしに感謝と、いよいよ始まる第4楽章を、どのように締め括るか構想は纏まらぬままだ。

昭和23年20歳就職は無知無能の自分には少し荷が重過ぎたが、大阪日産自動車で暖かく迎えられたこと。経済の拡大に伴い、仕事は至って順調であり、恵まれた環境で思い残すことなく、業務に精励出来て満足している。

27年24歳見合により結婚。当時としては豪華に別府航路クルージング。帰途は航空機利用と言った新婚旅行を皮切りに、理解し会って結ばれている。二人の娘も嫁ぎ、外孫五人と会えることが何より楽しみである。

34年31歳百坪程の土地に建てた家は地震にも耐えて、吾が生涯を宿して呉れそうである。昭和の終わり61歳で戦列を離れ、「意志ある所、道あり。」の信念と健康を頼りに時間と闘つ

ている。

諸処はご加護を得て、ここまで順調に来たからには、三途の川も一足飛びで越えたいものだ。

（彦根工専卒業50周年記念刊行小冊子から抜刷）

戦後三年目一九四八年、極東軍事裁判判決の年に彦根経専入学、
一九五三年、日米友好通商航海条約調印の年に大学卒業



井上輝重(大)

敗戦で国富の七十%を失い、食住衣医全てが極端に貧困な時期に旧制中学を追い立てられる様にして卒業し彦根経済専門学校に入学した。

毎日早朝、大津市石山の東洋レーヨン(現、東レ)の社宅から東海道線を蒸気機関車が引つ張る列車に乗って通学した。途中、草津、守山、野洲、篠原、近江八幡、能登川などから乗ってくる級友と一緒に、彦根駅からは、お堀端を駆け抜けて一時限目の授業に出席した。

厳格な両親の方針で夏休、冬休、春休は全てレーヨン工場で日雇い労働者として働いた。休暇を楽しんでいる暇など皆無であった。赤錆になった廃管の運搬、深夜勤務の石炭ポイラー焚き、又、稀硫酸タンクの水洗作業では顔の皮が剥けてしまったが、小年時代の漆かぶれ位の

ものと思つていた。生来虚弱でスポーツには無縁な自分が今も生きておられるのは、弟(大2)と一緒に屈強な労働者に混じつてしごかれたお蔭かとも思う。毎日毎日が空腹、賃金を貰つた日は午後5時一斉に工場の門を飛び出し、向側にあつた茶店で芋饅頭を貪り食つた。

大学三回生になつて漸く、大津市税務課の事務の仕事にありつき、苛酷な現場労働からは解放されたが、わが青春時代に池塘春草夢の日々は無い。

期待していたゼミが始まつたが、一方既に我国の民間貿易は嚴重な管理下乍ら再開されて居りその無限の将来性に魅かれ、村橋時郎教授の民商法ゼミに入れて貰い、英米がリードする信用状の理論と通貨決済の構造に打ち込んだ。級友との麻雀とも決別して、有力な都市銀行を訪問して様々なモデルを収集、他学出身の行員の見解聴取等、面白かつた。その頃これ等有力銀行は財閥解体で行名を変えていたが、卒業の年には目出度く財閥名に復帰した。然しその後、全世界の金融機関の失態続きは業界再編を促し、今や名門の名前も変わつてしまつたのが多々あるのは周知の通り、離合集散はまだまだ続くであろう。

我が国が一八七七年、東京に大学の名称を持つ高等教育機関を設けて以来、既に一世紀半近く経過した。その間、様々な学制変革が実行されたが、実世界の要求には十分応えたものとは言い難い。先進国大学からインタンとして日本企業研修に来てゐる学生達と会うと、彼等の態度も思考法も実社会にもつと根付いてゐる様に感じる。

日本の大学はどう変わって行くべきか、又、近隣の新興諸国から留学に来る優秀且つ将来を
嘱望される人材との友情を如何に育んで行くか、彼等は同窓会にも現れて忌憚ない話をするで
あろうか。十年後の母校百周年の頃の変わり様に期待したい。

以上

雑感



西脇光男(大)

醒ヶ井の水

その女子高校生の頭文字は、「KO」であった。ノックアウト君だと思った。僕は、列車通学で二十歳であった。社会人になって、初めてそして一回だけのデートをした。ハリヨが息すると謂われた醒ヶ井の水のように清澄な女性であった。紫色のツーピースであったことを憶えている。人を介して、結婚を前提とする交際を申し込んだ。その人は一人娘で、七人姉弟の長男である僕には、所詮叶わぬ夢であった。そういう時代であった。いや、自惚れてはいけない、断りの口実であったかも知れないから…。

三井の晩鐘

琵琶湖周航の歌が大好きである。そしてそれ以上に「琵琶湖哀歌」が胸に響く。その一節、

三井の晩鐘音たえて何すすりなく浜千鳥がこの身に沁みる。何年も前に、三井寺の鐘を撞く機会に恵まれた。今は黄泉に住む妻が、上手にツケたねと珍しく褒めてくれた。その所為であろうか？

三井の晩鐘がその一つである「近江八景」は、南に偏っているので、「琵琶湖八景」が新に生まれたと識った。そう言えば、前者に彦根(城)はない。後者で、六番目に「月明」の冠がついて、「彦根の古城」として選定された、と。昭和二十五年(一九五〇年)僕の在学中のことであった。その頃は、「近江八景」なるものがあつたことすら知らなかった。

あいてい
――無情

身辺の整理を進める中で、在校時のノートが出て来た。吾乍ら良く書いたもんだ、それこそ誰かの言葉じゃないが、自分を褒めてやりたい、と思う。でも、仲間もみんなそうだったんだからと、自省。その延長線上でと言えば格好良いが、この自分の「手」で書くんだとばかりに、ワープロの世話にならなかつた。それが災いの種となり、IT音痴を自称し突張つて過ごして来てしまった。川柳の「便利さを取って遠ざけボケ防止」は、正に今を言い得て妙であるが、これは、負け惜しみも甚だしいこと。この頃になって、詳しくはホームページをご覧くださいに大いに参っている。何だか仲間外れにされた想いであるが、自業自得である。

生命の質

この六月、畏友井上輝重君の尽力により、卒後六十年のメモリアル同窓会が彦根で開催された。出席すること適わず残念至極であつた。後日、恵送を得た資料によれば、同期の仲間は半分弱が既に鬼籍に入ったとのこと、冥福を祈るや、切である。生存者も近況報告によれば、大小の差はあれ僕も含めて殆どが何等かの障りを抱えている。

この頃とくに思うことは、「生命の質」についてである。人工機器だけに依存する自意思なき存命だけは、何とか願ひ下げにしたいものである。それまでは、与えられた生命のこと、次世代になるべく迷惑をかけないように謙虚に消光しなければならぬと思つている。

我が青春の彦根 追憶



三上 剛 一(大)

1948年彦根の城下には戦後復興の息吹が滲み出ていた。商店街は現在のシャッター通り化とは確実に反対の方向にあった。

私は昭和23年官立彦根経専最後の入学組、28年国立滋賀大学最初の卒業生と云う廻り合わせにあった。経専入学式当日先ず目に飛び込んで来たのは「彦根経済大学実現期成同盟」の墨痕鮮やかな立看板であった。単科大学昇格の夢は叶う可くもなく24年滋賀大学一期生となり今年卒業60周年。以下心に響いた追憶若干を綴る。

大一英作は亘理教授が羽仁五郎著「青年に訴う」を朗々と英訳され小生英語指向の一大刺戟となった。処がその亘理先生が突然姿を消された。所謂レッドパージである。東京在勤時先生にお目にかかったが多くを語られずご無念の心中察するに余りあるものであった。思想学問の自由の背後の出来事であった。

2 回生の春或日突然在學生全員講堂集合の指示あり大津軍政部教育監イールズ中佐の講演があると云う。趣旨は米國流現実主義を高揚、理論は無力とするものに対し高田馨先生が敢然として立上り異議を唱え反論された。蓋し圧巻であった。

英書講読の授業で度々朝鮮(南北不詳)からの留学生柳君と同席した。25年6月25日朝鮮戦争勃発直後から彼の姿は消えた。爾來63年日韓朝緊張の都度柳君を想い出す。

三菱銀行入社決定の報告に貿易実務の金子忠二先生を訪ねた。「自分の父は鈴木商店の大番頭で台湾銀行を潰した。銀行は金を貸す迄は威張っているが貸した後は恐々としている商売だよ。」とぼそつと云われた。何度か体験し先生のお顔が浮かんだ。

昭和49年三菱銀行堺支店開設準備に着任した小生を当時堺市ご在住で南海電鉄副社長をしておられた高商一回の藤谷昂二大先輩が訪ねて下され貴重な地元情勢を教えて頂いたり同先輩の九大同期我堂武夫堺市長を紹介願う等大変お世話になった事が忘れられない処であるが数年前藤谷大先輩のご令嬢にお目にかかった時の会話の一部を啓上しておき度い。「父はよく彦根の話をしこよなく彦根を愛していました。大正12年彦根高商開校時の入学試験は第一高等学校より難しかった。俺はその入試に合格して彦根高商の一回生になったのだと云う自慢話が出ないと晩酌は終わりませんでした。」と。

卒業数年後ゼミの総会があり久し振りに大谷孝太郎先生の警咳に接したが先生から「君ほど

可愛気の無いゼミ生は居なかった。」と云われた。要約すると2年間何の事前相談無し、進路就職卒業凡べて事後報告だった。教師と云うのは学生から頼られ度いものなのだ。それが教師冥利なのだと。身に沁み改めた。小生三菱銀行堺支店開設準備委員長就任に際し先生は一通の書翰を下さり今も大切に保管している。曰く。歴史的商港都市堺が三菱銀行のニューフロンティアであったことが判りました。健斗甲斐のある領域であります。欣慶至極折角頑張つて下さい。小生幸い半隠居暮らしを悠々やっております。昭和49年6月18日夜。

先生の有難さが身に沁みる。我家の書棚最上段中央には大谷孝太郎著「儒將曾國藩」が鎮座する。摺筆。

生涯力漕 後輩のコックスに伝えたいこと



川 辺 正 郎(大)

漕艇部コックス

手前みそで大変恐縮ですが、

「号令をかけるコックスとしてやるべき事」

- 1 漕ぎやと一緒にバック台を……三〇〇回は当然——おかげで今も健康
- 2 艇のバランス——バウサイドが上れば右手で押さえ込む。ストロークサイドが上れば左手で押さえ込む。常に全身を使ってバランスを整える。
- 3 艇がスムーズに走っているか?は……背中を感じとる。背中に3センチ位のタコができた。今は跡形もない。
- 4 水をかいているブレードの深さや強さを知るために……銭湯に行った時、手の甲で水をかき、目で体験・会得する。
- 5 勝つ為には、皆が一つになること。

【努力を止めないかぎり壁は破れる!!】

六十数年も前のことですが、前田、荻田、小池、黒田の四人の先輩で朝日レガッタで優勝した翌年、我々四回生と三回生で組んだエイトで京都学生リーグ戦で優勝した時、部員数十四〜十六名ぐらいで平均体重が六一〜六二キロ、コックスの自分は五二キロ。二週間ほど前に漕ぎやが下痢になり、マネージャー乾の食事の努力のおかげで、なんとか克服したものの、平均体重が五七・五キロとなり、自分はデッドウェイトを減する為に、二週間程ご飯を一日に小さい茶碗に一杯だけにして、皆が昼寝をしているときは石山寺まで駈け上がり、発声練習、四十八キロまで減量した。皆が一丸となった時、気力で優勝出来ました。



S 27 年 4 月 (1952) 春の合宿

〃 出来ると確信すれば必ず道は開ける〃

オアスマンの精神は人生すべてに通じる。

三十六才から故あって裸一貫となり家内共々四人の子育てをしながら、いろいろの仕事をしつつ現在の小売屋として店をはり、今は二人の息子が後を継いで、この不景気の中、四十八年間、延々と続いている。今年六月いっぱい店の手伝い三時間も返上しますが、八十二才になってもお手伝い出来ることに感謝している昨今です。

最後に贈る言葉

「生命の力を確信して進め!!

建設は死闘！ 破壊は一瞬！

あきらめたら停滞。」



右から
石川(2回生)
長谷川(3回生)
上野(2回生)
コックス白岩(3回生)
木村(2回生)
松原(2回生)
コックス花登(3回生)

前列
黒田(1回生)
前田
コーチ?
コックス川辺
荻田(1回生) 筆者
横尾(2回生)

我が青春の彦根



川辺(写真)
木村(2回生)
松原(2回生)
上野(2回生)
横尾(2回生)
苅田(1回生)
前田(1回生)
小池(1回生)
黒田(1回生)
右から



1931(S6) 出生(三重県津市)

←(戦中)

1954(S29) 大学卒業後状況

1965(S40) 結婚後家出し独立。事業を始む。

1967(S42) 篠崎(江戸川区)の荒地に10坪の家を建てる

1969(S44) 現在の小岩に移転

1975(S50) (有)ポパイ設立

1988(H1) 鉄筋3Fに建て替え

2013(H25) スカイツリーを遠くに望む

現在の(有)ポパイ

(小売店・飲料水・缶のデリバリー兼賃貸アパート)



江戸川区南小岩五丁目
住宅街の中に小さな小売店経営
現在迄に町内の小売店七軒が閉店し
ている。一軒のみ四十三年目。

ああ青春！ 寮歌・開寮祭



石井和佳(大3)

一 寮歌

同窓会やクラス会が終わりに近づくと、誰とはなしに肩を組み、声張り上げて歌うのが、母校の寮歌ではないだろうか。

世に寮歌として、旧制一高の「嗚呼玉杯に」、旧制三高の「紅萌ゆる」(逍遙歌)、北大予科の「都ぞ弥生」などは、余りにも有名である。だが、世間で知られていなくても、卒業生にとって母校の寮歌は、それぞれに最高のものであるに違いない。

私は、学生時代幸いにも入学から卒業までの四年間、ずっと偲聖寮の生活であった(昭和二十六年四月～昭和三十年三月)。従って、寮歌は私の身に染み込んでしまった。

当時の寮には、人の憂いに我は泣き 我が喜びに人は舞う 人生意気に感じては たぎる 血潮の火と燃えて のような友情と、温かい雰囲気がいっぱい満ち満ちていた。

その中で、私たちは寮や学内はいうに及ばず、城山や湖畔での散策に、いくたび寮歌を歌ったことであろうか。ともに歌った寮友とは、今も深い絆で結ばれ、会えばすぐ昔の「青春」を分かち合うことができる。

総じて学生歌は、その時代の学生生活を思い出しながら歌うものであり、心の中に当時歌っていた雰囲気や思い出が浮かび、それゆえ郷愁にも似た懐かしさがかもっている。

あの古びた大正末期からの木造の偲聖寮、もはや現存していないが、私の脳裡にははつきりと残っており、今でも時々寮生活の夢を見る。「眼もはろばろと」と寮歌を口ずさむと、すぐにあのころの「青春」にたち返れるのである。我が「青春」は、まさにあの偲聖寮において育まれ、あの寮歌によって大いに高揚された^{はぐく}と、信じて疑わない。

そのように、私にとって喜怒哀楽をともにした寮歌は、まさしく我が「青春」の回顧であるとともに、ま



偲聖寮第29回開寮祭 昭和27年11月23日

まだまだ未来への情熱をかき立てる、人生賛歌だとも思っている。

ちなみに、「偲聖寮寮歌」の作曲者は、数々の名曲を残されたかの古賀政男氏である。

ところで、女子学生も多くいるという湖畔芹川口の鉄筋建ての寮には、まだ寮歌は生きているのであろうか？ 願わくば偲聖寮ある限り、「青春」のシンボルとして、あの寮歌はずっと歌い継いでいってもらいたいと、切に念じて止まない次第である。

二 開寮祭

毎年十一月二十三日になると、年に一度の偲聖寮の祭が、「開寮祭」と銘打って開催されていた。

メインは、各部屋のデコレーションと、食堂での寮生による演芸大会である。ぜんざい、汁粉などの食べ物も販売された。街からお客さんをたくさん呼び寄せるために、ガリ版刷りのチラシ広告を、寮生が銀座通りや駅前などで、市民に手渡してPRした。

デコレーションの思い出を、記してみよう。



開寮祭デコレーション第3位入賞「現代版エデンの園」(中寮八号室) 吉田ワンマン宰相をそそのかさんとするアメリカ蛇の意図は？ そして禁断の実は？

私が二回生のときのテーマは、「現代版エデンの園」であった。

当時、「逆コース」という言葉が盛んにはやっていたが、これは戦後の民主化、平和主義が、だんだん右旋回の社会情勢になりつつあるという、危機感をはらんでいた。

そういう風潮を憂えたので、庶民代表のサザエさん一家がまゆをひそめながら、「戦力なき軍隊」（保安隊——自衛隊の前身）などというものを創設した吉田ワマン首相の背後から、禁断のリングゴ（すなわち軍隊、真赤に塗ったバスケットボール）を食べるとそのかしている大蛇（アメリカ）を、不安そうな面持ちで指さしている構図にして、その気持ちを表現した。

蛇がまわりついている樹木は、夜中に人目を忍んで、学内の樹の枝をノコで切り取ったものである。同室の濱田（現大森）信盛君と、徹夜で仕上げたものであった。

これは三位に入賞し、賞金百円をありがたく頂いた。三回生のときは、十一月二十三日とタイミングもよ



運動会仮装行列第1位に輝く。題して「徂聖寮生30年史」
寮生オール・メン出場（昭和28年11月3日）

く「新嘗祭^{にいなめさい}」とした。

ポイントとは、当時米不足を補うために作られていた、「人造米」である。「天照皇大神」と墨筆大書した懸垂軸の前に、友人のかさもり稲荷神社の後閑和夫君から借りたお供え用のセツトをしつらえ、お皿の上に普通のお米を盛ってお供えにし、その前に「人造米」と書いた紙を垂らした、ごく簡単なものであった。

これがニュース性もあり、アイディアもよいとのことで二位に入賞し、今度は賞金二百円を頂いた。一、四回生のときは、都合で参加しなかった。

ところで、ストームが得意で柔道部の猛者^{もさ}だった同期の坂本一孝君は、剛毅^{じゆんぱく}純朴^{じゆんぱく}でとてもよい男であった。

彼が一回生のとき、「世界珍品博物館」のテーマで参加した。

部屋に何やかとゴチャゴチャ並べ立ててあったが、ひときわ目立ったのが、「神功皇后の陰毛^{じんくう}」という代物^{しろもの}である。虫眼鏡を通して見ると、なるほどそれらしき物が一本認められたが、裏話によると、それはほかならぬ彼自身の



我が偲聖寮中寮十八号室（三年間同居の親友濱田信盛君と）（昭和29年9月22日）
左：石井 右：濱田

物であったという。「アーラ、嫌ね」と、まゆをひそめるメッツェンを見る彼のしたり顔も、なかなかのものであった。

とにかく、開寮祭は楽しかった。食事はご馳走が出るし、日ごろ男臭い寮に、きれいなメッツェンやフラウがどンドンやって来るし……。

創立（開寮）三十周年（昭和二十八年）のときは、記念品として灰皿を別注し、寮生や関係者に配ってお祝をした。

以上、ああ、楽しからずや。忘れ得ぬ我が偲聖寮の「青春」よ！



懐かしい寮生活の一コマ（昭和29年9月22日）

我が青春の彦根と楳円球



日比久一(大3)

昭和二十四年五月に滋賀大学が発足したが、戦後彦根高商ラグビー部は途絶えていた。昭和二十六年六月に高商ラグビー部の創立者である高商第一回卒業故今村米蔵先輩と高商第十七回卒業故井阪先輩、第十九回卒業山崎先輩の三氏が滋賀大学経済学部体育教官故榎本助教を訪ね、ラグビー部の復活に協力していただくよう依頼され、同教官は在学生の名簿を調査した結果、同二十五年入学の故森本先輩、同二十六年入学した私の二名が高校時代ラグビーの経験者であったことから、早速私らにラグビー部復活の話があることが伝えられ、二名だけではないが、ラグビー部を復活することになった。当時森本先輩が寮で勧誘した結果同期の木本先輩が入部し、当初この三名でスタートした。部員勧誘のため三人でラグビーの基本であるパス、キックなどしていた。そのうち私の同期の山本侍由君、同二十四年入学の柴田良樹先輩が入部し、同二十五年入学の黒石・水引・刀祢館各先輩が入部し、九人となったが、同二十七年四月

入学者を勧誘した結果古川・星川・泉・松井・越智・山野・大野・石井・橋高君の九名が入部し全体で十五名を超え、大学に部として申請し、同年五月に正式に滋賀大学経済学部ラグビー部が復活した。

大学ラグビー部の初代主将は森本章先輩、マネージャーは木本隆治先輩、フォワードリーダーは黒石和男先輩、バックスリーダーは泉保行君という体制でスタートした。同二十八年八月に徳聖寮の二階の広間で初めての合宿を行った。その合宿には高商第一回卒業の今村米蔵先輩、同九回卒業の中井正朝先輩、同十回卒業の鳥居新太郎先輩、同十回卒業古江正市・同十一回卒業石田良次郎先輩、同十七回卒業の四谷清、井阪光男、林半輔、土井政一各先輩、同十九回卒業山崎昇先輩が参加されきびしい指導を受けた。就中、井阪・林・四谷の三先輩は合宿所に泊まり猛烈な特訓をされると共に、高商ラグビーの伝統をたたき込まれた。

その当時は僅かしかない大学のクラブ予算の獲得やOBの陵水ラグークラブよりの援助の獲得に木本マネージャーの大変な努力があった。勿論この時代はまだまだ食糧事情が良くなかった時代でもあった。そのほか資金集めのために全員でのアルバイトや大学の講堂を借りてダンスパーティを催した。

またグラウンドは野球の内野以外は荒れ果てたまままで練習前二時間程度草引きや石を拾い整地した。

初試合は同じ大学の学芸学部と対戦した。その後入部者は私の同期の井上五郎君、同二十七年入学の本間皓之・山田寿彦・柿中裕・同二十八年入学の光永達・能丸省三・大江通玄君が入部し徐々にチームが強化され、同年に滋賀県ラグビー協会に加盟した。また、八月には今村先輩と同志社大学の岡監督との関係で同志社大学と彦根で合同合宿を行った。同年九月には立命館大学の辻監督の指導を受けた。このころより滋賀大学芸学部、京都薬大、大阪医大、神戸商科大、大阪経済大、

大阪市大、岐阜大、大阪大等と順次定期戦を組んでいた。同二十九年に井上久和・林好・光橋貢・永田健一・斉藤信太郎・隅川利男・高藤健・時岡宣夫・山内弘之君の九名が入部した。ここでラグビーの経験者もふえ、メンバーも充実し滋賀大学経済学部ラグビー部の基礎が固まってきた。この間、特に今村、井阪両先輩はじめ高商卒の各先輩には試合、練習などに頻繁に大学のグラウンドに顔を見せられ非常に熱意を持って指導に当たられわれわれのチームを強化に努力していただいたことに深く感謝しています。



彦根の四季と現況



岡田清士(大4)

春

三月下旬入学試験時に泊まった彦根駅前の古い旅館は市の区画整理により今は無い。しかし夕食に供された黄金色の卵をまぶした鮎の刺身の美味さは忘れられない。

四月上旬入学式時、構内の櫻は満開で実に見事であった。以降生活の拠点となる偲聖寮西寮も今はないが、食堂のカレーは今も懐かしい。

夏

入学早々履修した体育の榎本教授のヨット授業で覚えた未熟な操船技術で、無謀にもその年の夏休みに友人と二人、貸ヨットで無人の多景島一周を果たした。

秋

佛壇洗濯業の下宿でご馳走になった、ご当地名物の松茸の塩焼は日本一の味に思えた。総じて、彦根の皆さんの学生に対する暖かさは、本当に良い思い出のひとつだ。

冬

卒業を目前に控え、偲聖寮仲間の竹崎覚君・故鈴木千代博君と、伊吹山三合目スキー場での久方振りの滑降は忘れ難い。又三回生時に創部された空手道部に入部し、創部

者である同期の山田実主将の温情ある指導の下に何とかついていけた。厳しい乱取り訓練、琵琶湖・芹川での寒稽古、彦根城内堀・外堀周遊の駆足体力強化にも耐え、重森三玲作の有名な方丈庭園のある京都東福寺で、日本鋼柔流正鋼館の昇段試験を受験し三級茶帯を許された。古い道衣は今も精神的支えとして大切に持っている。

通季

その他、学内のイベント事項として、膳所の教育学部との定期交流野球試合応援、偲聖寮の親睦遠足で行った醒ヶ井の日本最大のニジマス養鱒場見学、彦根藩主井伊家が帰依外護した関西紅葉三名所のひとつ永源寺ハイキング等は、懐かしい思い出の数々である。中でも同期の学友剣道部主将等が果した剣道部全国制覇日本一は、賞賛に値する快挙であった。一方学外では、近隣の近江絹糸の労働争議が全国的に喧伝された騒がしい環境にあった。このような中で、学業は芳谷ゼミも辛うじて履修、又必須科目簿記論は小倉教授の単位取得に四年掛かりと余り感心したものとは言えない。

今思えば不勉強にも、当時マルクス後の近代経済学ケインズ理論は完成された不動の定理と思っていた。

現況

現在は、デンマークとアイルランドに現れた非ケインズ効果、緊縮財政は民間消費を減らすとの予測に反し逆に増加した事も知られ、又クラウディング・アウト(押し出し効果)等の説もあるが、ミルトン・フリードマンの言うデフレは貨幣的な現象として、

安倍政権が実施しつつあるリフレーション政策には賛否両論がある。その他外交問題、原発問題、人口高齢化と減少問題、TPP、憲法改正問題など課題山積で将来展望は極めて難しい時代にある。

向後はせめて自己防衛のため認知症予防も兼ねて、経済の先行きを予想する訓練を心掛けたい。

経済学は世論（濟世救民の学）と考え常に哲学を持って見て行きたい。

ヨット部創設から、全国レベルへの道



箸 方 海 三(大4)

昭和27年入学した年の夏、長曾根の浜を散策していたところ、貸ヨットに誘われた。大学に「ヨット部」ができたばかりとのこと、未だ、持船は無く、貸しヨットを利用して、料金は2時間70円、(ちなみに偲聖寮の食券は一日70円前後)これが谷さんとの初の出会いだったと思う。

その夏だったか、冬だったか、小生が帰省の際、神戸大空襲で亡くなった長兄(同志社大学予科でヨット部に在籍)の遺品の中に、ドイツのカリー博士著なる「帆走の科学」を見出し、同好会のメンバーと香西先生のお宅へ初めて伺ったような記憶がある。確か記述はドイツ語で、文字どおり帆走の科学から、競技の戦術まで図解が多数されていた。

当時は戦後の出版物の少ない時代、ヨットの専門書などは皆無で、大変貴重なものと喜ばれ、研究が飛躍的に進められた。

昭和28年春、香西、杉本両先生に、村重事務官など学内の力添えに加え、大畑学長が琵琶湖周辺の学舎の特性を文部省に働きかけ、新艇5隻の予算を獲得された。香西先生の命名で、スナイプ級はギリシャ・ローマ神話から、A級は、万葉集の中からと記憶するが、NEPTUNE、HERMES、さざなみ、ちどり、まつかぜの進水式が行われた。これを機に、後の卒業式にて、江頭学部長から「経済学部卒はどうかと思うが、ヨット部卒で……」といわれた猛練習が始まった。地の利から、帆走時間はどこにもヒケを取らない、日本一の自信を持つに至った。当時は近畿水域で、同志社、京大、立命館が3強で、全国大会は2校が代表。同志社は全国ベスト3の常勝強豪。猛練習の結果、29年のインカレ予選で同志社に次ぐ2位で、実質創部2年にして第19回全国大会（8月・高松沖）に初挑戦できることになり、しかも本選でも予選リーグをクリアし、全国6位の快挙をなすとげ、これを機に滋賀大学経済学部ありと名を轟かせた。

これに先だって、個人戦においても同年の7～8月。北海道の第9回国体に、谷さんが一般男子で、神奈川武田氏に次ぐ第2位入賞。小生も男子監督兼補欠で、中原君と同行。多くを学



昭和29年インカレ（高松沖）

ぶことが出来、インカレの好成績につながった。

そして30年1月28日には、待望のヨットハウスが竣工。

8月には、蒲郡での「日本ヨット個人選手権」に、谷さんがA級、優勝。

向井・山本組S級、2位の大活躍。滋賀大学の名を一段と高めた。

10月には、自艇自セールへの移行に備え、これらの戦果から、5艇の予算獲得。桑野造船発注の新艇5隻の進水式が行われ、好性能から、地歩を不動のものとし、以後の黄金期につながった。

スナイプ級 D I N A、M I N E L V A

A級 いわね、みなわ、あさぎり

この創部3年間の偉業ともいべき実績は、ひとえに谷岩夫氏の強烈な情熱と指導力、香西先生ご夫妻の深いご支援の賜物であり、第3に湖辺の立地を活かしたメンバーの、どこにも負けない猛練習の所産であったと言えよう。

(ヨット部創部50周年記念誌「帆人」(平成13年刊行)より転載。)

わが青春の彦根 — 悔恨と空手道 —



中川 郁 三(大5)

昭和二十八年四月、初めて家を離れて彦根の下宿に移り住んだ。食事は大学裏門近くの外食券食堂魚仙。一汁一菜のどんぶり飯。知らぬ顔ばかり。六時に城山の夕鐘が鳴る。時代はまだ戦後であった。

下宿は大学近くの石ヶ崎町で琵琶湖までは五、六分。風呂は筋向かいの天神湯。部屋代は畳一枚百円が相場で、母屋の八畳座敷に。後に離れ座敷に移り、住み心地は向上した。庭の裏木戸から出入りできたので、下宿を閉め出された友人が時折夜遅く転げ込んできた。

勉学に適した静かな彦根の環境。そこで真面目に勉学に励んでいれば、もう少し大学を出た実感を持たたと思う。が、実際には専門分野も語学や文学なども、読書量は少なく常に心の奥底に知的劣等感がひそんでいた。

原書でケインズの「一般理論」を学ぶ白杉教授のゼミに属したが、語学力に劣る私は手っ取

り早く塩野谷九十九氏の解説に頼った。学生の第一義は学問である。本気で原書に取り組んでいれば勉強不足の贖罪がもう少しできたはずだ。私の青春時代の悔いは思考力の幼稚さとしていつまでも痕跡を留めた。

更に彦根生活の出発点で、偲聖寮に入らなかつたことにも悔いを残す。入寮者は一年で寮を出て下宿に移るのが一般であったが、この短期間の寮生活が子供から大人へのジョイント部分として、全寮制の旧制高校の代役をしていたに違いない。私はそれを見逃したのだ。

定年後、級友龍口氏の手配で東京在住の同期生十数名が年二回定例の懇談をする。一度は軽登山を伴う一泊旅行、他は居酒屋での歓談である。そのとき感じるのは、入寮者と私とは何かが違う。寮仲間が兄弟だが、私には「おいお前」感覚がない。

そんな悔恨の幾分かをグリーククラブと空手道部での活動が埋めてくれた。グリーは入学早々勧誘されて入部、セカンドテノールで卒業まで続けた。その余録が定年後のシャンソンとカラオケへと続き、セカンドライフに得がたい彩りを添えてくれた。空手の方は、「男は強くなければ生きていけない」と私には武道への指向があつた。二年生の秋、空手道同好会の勧誘ポスターを見た。よしこれだ。私は誰に相談するでもなく山田先輩を訪ね入部を許された。山田主将の指導で練習が始まる。二週間後、姫路市の本部道場で創部後初の合宿に参加。出迎えていたただいたのは、眼光鋭い美青年。それが七段教士の多田正剛館長であつた。合宿を終える頃に

は、空手道士の「気分」が背骨に宿っていた。

学内に道場をもたぬ新参同好会は、伝統ある剣道部の道場を時間借りした。束ねた藁縄で毎日道場の床を磨く。練習の終わりに、城山の上まで砂利道を裸足で駆けて往復した。正月明けには、琵琶湖長曾根浜で入水立禅の寒稽古をする。素足に雪の冷たさが脳を直撃した。スポーツ映画のカメラマンは雪の浜辺で海パン一つになって冷水に入り、プロの根性を見せつけた。

三年生の後期、初代主将の山田氏から二代目を仰せつかる。まだ段を持たぬ茶帯の時だった。カリスマ性のない茶帯率いる空手道部は危機に直面するはずだったが、山田空手に鍛えられた部員に支えられ、陰に陽に多田館長の温もりある支援をいただいて乗り切った。所属の各道場と大学合同の四国巡業十日間にも参加。部員数も保って友重氏にバトンを渡す。卒業時には二段を賜っていた。

空手道は私の肉体と精神を鍛え、人生の折々に私を励ましてくれた。

わが青春の記



中野 吉 隆(大5)

私が彦根で生活したのは、今までの人生七十八年のうちの、たった四年間ですが何物にも代えがたい濃厚な四年間でした。

その中でも偲聖寮の仲間との思い出が強烈で、今でもその仲間にあえば「俺、お前」の学生時代に帰るのです。

寮生活の思い出として、寮の窓のところに紐を張り、タオルをかけていたのですが、いつも雨も降らないのに濡れているので不思議に思いながら、顔を拭いたりしていたのです。ある時友人が濡れているのは「寮雨^{りょうう}」だよと言うので、何かと思ったら、夜二階の先輩が窓から小便をするのが原因だと分かったのです。そんなに腹も立たなかったが、すぐにタオルをかけるのはやめにしました。

寮母さんは母親のような存在で、風邪をひいて一人寮に残って心細い時に、食欲がないだろ

うとお粥を作ってくださいととても嬉しかった。

どういうわけか私の入った中寮でも気の合う仲間が八人仲良くなり、それぞれの出身県が新潟(藤田)、石川(宮崎、本屋、中野)、福井(細井)、愛知(大島)、三重(鎌田)、奈良(喜多)と六県に亘っていたので「六友会」と名付けて今に至るも仲良くしています。残念ながら、八人のうち二人が欠けて少し淋しくなりましたが、残る仲間は何かと連絡を取り合って仲良くしています。

寮の食事は一食二、三〇円程度だったと思いますが、まだ食糧事情の悪い時で街で食事をするときにも米穀通帳を持っていかないといけないくらいでした。そんなわけでそんなにご馳走が出るわけではないのですが、近くの神社の祭礼なんかがあるときには赤飯に何かおまけ(と言ってもキャラメル程度ですが)がついてみんな子どものように大喜びしたものです。

みんなカレーライスが大好きで、たまにそれが出ると大喜びで何杯もお代りをしました。いつも肉もほとんど入っていないようなカレーに、たまに肉が入っていたりすると、寮の周りを



彦根城を友人と逍遥

うろついていた赤犬が見えなくなつたが、その肉が入っているのではなどと冗談を言い合つたりしたものです。

寮での娯楽はよくトランプ遊びをしました。私はあまり遊び方を知らなかつたのですが、友人たちはよく知っていてナポレオンや大富豪やトランプ占いなど、特に占いではいい結果が出るまで一晩中やつたものです。

寮では一年に一回の寮祭があり、私たちは餅を搗いてぜんざいを作り販売するのが担当で、可愛い娘が来ると餅が二つのところを、三つも四つも入れて驚かれました。

寮の仲間の絆はとても強くて、よきにつけ悪しきにつけ助け合つたりしました。今でこそ時効ですが、マジメな(?)私は何人の代返をしたことか。また、城がすぐ近くだったので、よく一緒に城山に登り逍遙したものです。そこから眺める伊吹山や夕景の素晴らしさは何物にも代えがたい思い出と共に互いに友情を確かめ合つたものです。



校庭(グラウンド)で寮の仲間と

俳句(陵水名古屋俳壇)

石橋政雄(大6)

秋の暮琵琶湖哀歌を口遊み
講堂のダンスパーティー春の宵
学生の学会終へし花の頃

(学生の経営学会を彦根にて開催)

伊與正道(大6)

東寮五号桜吹雪の中にあり
逝く秋や書架に古りたる資本論
近江絹糸の扉に歌ひし労働歌

(昭和二十九年近江絹糸人権争議始まる)

大島一彦(短7)

陵水の桜並木に夢をはせ
梅香る城山道を駆けのぼる
語り来し友と別れの春きたる

片岡嘉幸(大25)

入学や恐る恐るに袋町
手の豆をさらに固めし春合宿
卒業や城に登りて母校見ゆ

河村實鏤(大7)

運動会たぬき踊りで風刺劇
伊吹山スキー担いで単位採り
忘れ雪仕舞の客の袋町

木村芳夫(大8)

城山に飽かず眺めし春の湖
テニスコート青春の汗しみ込みて
肩組みて歌ひし寮歌長き夜

久保 明(大6)

テニス終へ歩む湖畔や小雪舞ひ

すきま風友のごと来ぬ偲聖寮

夏休み懐かるし夜行旅

柴 宗平(大5)

我が宿はにわか雀荘走り梅雨

口ケ隊や喘ぐ暑さの彦根城

魚仙へ急ぎ足なる初時雨

倉坪和久(大13)

入学や男ばかりの歓迎会

春の夢トリはトリでも天下獲り

卒業す伝授の能を確と舞ひ

杉本佳彦(大15)

血を吐きても撃劍競ふ夏合宿

雪分けて今宵も一献袋町

佐和山をダツシユ遙かに霞む湖

榊原 明(本20)

酷暑かなゲートル巻ひて登校す

戦闘帽国民服にて入学す

松原や教授一家と水遊び

南野輝久(大5)

開寮祭「カサブランカ」とて傘吊し

香しき茸の匂ひや多賀の里

佐和山の城址で二人風光る

我が青春の彦根



光橋

貢(大6)

今年で母校の創立九〇周年を迎え一卒業生として感慨深いものを感じます。

母校での四年間恩師をはじめ、諸先輩方、同期生、後輩の方々と出会い長い人生での貴重な体験をして現在の素晴らしい人生を送れたことを感謝しています。

まず、恩師石田興平教授のゼミでのケインズ経済学を学び、卒業論文のテーマは「技術的進歩と資本蓄積」を先生指導のもとで完成したこと、その後「石田ゼミの会」ができ、学生時代から平成二十一年に解散するまで恩師、諸先輩方、後輩の皆さんとの交流を深めお互いに切磋琢磨してこれまでの人生の糧として充実した人生を歩んできました。

次に、同期の皆さん方とは今なお親密に交流にさせていたいただいているのも私にとって宝物です。卒業後二十五年目に初めて「同期会」が彦根で開催され、その時の記念写真を持って帰り家内に見せたところ、「この会は何の会?」と聞かれ、「勿論昭和三十三年卒業の同期生の皆さ

んだよ」と説明したところ「ほんとうですか？」不思議な顔をするのでよく見るとその写真に写った頭を見れば髪がまっ黒な者からまっ白な者、それに加えて全くない者、頭の地肌が見えかけている者まで卒業時と全く異なっていた。その後は二、三年に一回全国の同期の総会を開き、地元大阪では二ヶ月に一回会って旧交を温めている。

さて、私はスポーツが好きで中学・高校ではバスケットボール部所属していたが、彦根に来てラグビーフットボール部に入部した。このスポーツは、相手の突進を止め、ボールを奪取すると共にそのボールを持つて相手陣へ突進してゆく事の壮快さは他のスポーツにはないおもしろさに魅力を感じ入部した。

戦前の彦根高商ラグビー部は全盛時代を迎えていたが、戦争により休部となっていて、戦後世のなか落ち着いて来た時、高商の先輩方が来学され、大学の諸先輩方と再建するため非常に努力され、細々ながらメンバーを集めラグビーの基本を体にしたき込みながら、幾多の試練を乗り越え一戦々々成長していった。私が入学した頃は一応の基礎ができていて、私共大学二十九年入学のメンバー九名がその一



翼を担うことができたことは素晴らしい経験であった。

卒業後も引き続き滋賀大経済学部ラグビー部の先輩として後輩の指導などしていましたが、そのうち神戸製鋼の七連覇が始まる年頃から同社で副社長として活躍されていた同期の小田茂君から「ラグビー日本選手権」の入場券をいただき国立競技場へ観戦に行くようになった。今ではラグビー・トップリーグには京阪神地区での試合観戦は全てという程の力の入れようです。時には名古屋、東京にまで足を伸ばしている次第です。

最後になりましたが、私にとって彦根の四年間は私の人生にふさわしい伴侶との出会いがあったことです。

今年一月に金婚式を迎えました。お蔭様でふたり共々健康で楽しく幸せな日々を過ごさせて頂いております。

生涯の糧！ 彦根交友録



春名 公雄（大7）

一九五五（昭和三〇）年四月、下宿は護国神社東の尾末町に決めた。ここは学生課の勝課長（当時）に紹介していただいた。お婆さんが一人住まいをしている一軒屋で、玄関を入ったところの六畳間に三畳部屋がくつついていた。部屋代は月八百円。二年経って二階住まいの先輩が卒業して出て行かれたので、二階に移った。窓から彦根城が遠望できた。こちらの部屋代は月千円だった。その家は、現在は無い。

一、二回生の頃はよく玄関先で七輪に火を起こし行平鍋で飯を炊いた。二階に移ってからは食事は外食で、主に大学の食堂、大学横の学生相手の食堂（魚仙）或は京町筋辺りにあった食堂（ござれ）等に行った。昼食・夕食は「魚仙」で一五〇円位、「ござれ」で一三〇円位で、おかずを減らせば更に安く賄えた。大学授業料は月五百円。映画入場料は一五〇円ほどで、一九五五年の「野菊の如き君なりき」、五七年の「喜びも悲しみも幾年月」など思い出深い。

彦根は夏は蒸し暑く、冬は湖上を渡ってくる風は冷たく零度以下になる。暖をとるのは火鉢と、バターやチーズだった。夜バターやチーズを食べると体が温まった。

下宿のすぐ東まで運河が入り込んでいて当時は琵琶湖巡りの船の発着場があった。祝祭日の一〇時頃になると、音楽を流し始める。これで目が覚めていた。

最初に知り合ったのは、沼井義民さんだった。彼は神戸市須磨区が実家で家にもお邪魔させていただいた。暫くすると某氏、そして松田俊一さんと知り合いになった。二人とも碁が好きで、特に沼井さんは強かった。良く下宿で碁を打った。ある時、男性ばかりでは寂しいので「女性を呼ぼう！　すぐ裏に女子寮がある。誘いに行こう！」ということになり、じゃんけんで負けた二人が行くことになった。私は勝った。二人が行ったが、歳のいった舎監に「夜は外出禁止です」と

体よく断られ、すごすごと引き上げてきた。写真はヤケ酒？のシーン。隣り合わせの家には、岡田芳夫さん、柴田哲さん、吉田紀幸さんが下宿していた。「おおい。いるか」と呼びかけ



火鉢をかこんで。右・松田俊一さん、左・沼井義民さん

ると「いるよー」と返事が返ってきた。柴田さんも時々碁を打ちに来た。

ゼミは白杉庄一郎教授でゼミ生は二〇名。ポール・A・サミュエルソンの「経済学」の原書を順番制で翻訳し、ディスカッションした。随分苦労した。ゼミの修学旅行は一九五八(昭和三三)年六月初め白糸の滝・山中湖・河口湖など富士山麓を先生も一緒に周遊した。写真は河口湖畔で撮ったもの。

彦根時代の交友の一端を下宿生活を中心に取り纏めてみたが、卒業後これらの交友関係はどうなっただろうか。

沼井さんは現在も神戸市垂水区在住で、ずっと交友が続いている。松田さんは名古屋市役所勤務時代に碁の腕を磨き俳句の道も中々のもの。年賀状には大抵一句入っている。吉田さんとは私が東京勤務時代時々お会いし、現在は陵水会評議員として毎年彦根で顔を合わせている。柴田さんとは二〇〇八(平成二〇)年六月六日彦根カントリー倶楽部での第二回陵水会ゴルフコンペで同組でラウンドした。お人柄は少しも変わっておられない。岡田さんとは陵水会兵庫支部幹事会でずーとご一緒している。ゼミ生仲間では近年一番の思い出は二〇一一(平成二十三)年六月三日の第五回陵水会ゴルフコンペで奥村賢三さんと同組でプレーできたこと。彼はOUT38・IN45という素晴らしいスコアで、ドライバーショットでも常に三、四〇ヤード程おいて行かれた。楽しい一日だった。

学生時代の一番大事な事は、学問はさることながら、多くの人との交友で、それが卒業後も長く続き、人生の折々に更に出会いを重ねていくことだ。それが人間形成に大きく影響し人生を豊かにしてくれる。彦根時代はその土台造りの四年間だった。

(追記 本稿にお名前を記載させていただいた方々には、記載につき予めご承諾いただいた。特に、吉田さんには食堂名や値段について教えていただいた。感謝。)



白杉ゼミ 修学旅行、川口湖畔にて

わが青春のふるさと彦根

— ボート部入部当時の思い出 —



吉田 紀 幸(大7)

昭和30年4月桜花爛漫の彦根駅に降り立って芹川のほとりの下宿に落ち着いた。

偲聖寮に入ることができなかったので、父の友人藤田氏(本科7回)のお世話で近所に下宿を探してもらったのである。家から送ってもらった自転車で学校に通っていた。

ある日ボート部の新人歓迎のコンパがあった、新人はタダで飲めるといいうのに釣られて、痛飲のうえボート部に籍を置くこととなった。



大阪 桜ノ宮 近畿リーグ戦
(昭和31年)

5月の連休明けから早速中藪のお寺で京滋リーグ戦のための合宿に参加することとなり、小笠原・松島両君と共に合宿生活に入った。

6月上旬瀬田川のほとりのお寺に合宿所を移して試合に臨んだが、急造の新米クルーは全敗の成績で、応援に駆けつけた前田先輩から大目玉を食らった。合宿明け後、暫くは授業に出ていたが、すぐ夏休みとなり金沢に帰省して、高校時代の友人と麻雀卓を囲むのが日課だった。

7月下旬にシエルフォアの井上コックスが家庭の事情で名古屋に帰るので、かわりに小生が召集を受けて「井上氏が合宿に戻るまで乗艇せよ」とのことで、S 藤原 3 三井 2 佐々主将 B 高島の本チャンクルーのコックスとして三井寺近くの合宿所に急行した。右も左も判らぬ新米コックスではあったが、クルーに怒られながらも何とか勤めを果たしたのだろうか。このクルーが昭和30年度関西選手権に優勝した。小生はその後もぱっとした戦績も挙げられないままに昭和33年を迎えた。3月下旬



瀬田の唐橋付近の滋賀大エイト(昭和33年)

旬から朝日レガッタのための合宿を偲聖寮2階の広間ではじめた。C吉田 S小笠原 3小笹
2松野 B北沢のシエルフォアで出漕することで、時々雪の降る水位の下がった港湾に艇を出
して練習を重ねた。朝日レガッタでは予選・準決勝を勝ちあがり、決勝戦では往年の宿敵大
丸・岡山大との3艇レースで大丸には負けたが岡山大を下して準優勝であった。

試合中にB北沢の大声が全員を奮い立たせた。

年代は下るが、ボート部の輝かしい戦績の中から、昭和60年はシエルエイトが関西選手権・
瀬田川杯選手権のダブル優勝の快挙を成し遂げ合宿所の江国寺で先輩現役総員で祝杯を挙げた
のが懐かしい思い出である。

Samuelson 〈Economics〉



門野久義(大8)

大学には1956年に入った。まだ、テレビも十分普及していなかった頃である。

自宅は彦根市内であったので、大学へは自転車を通った。高校も城の堀のなかの彦根東だった。自転車で通っていた。今度は堀のすぐ外にある大学へ自転車を通うという、代わり映えのない生活であった。

多くの友人は電車で通学したり、下宿生活をしたりして、楽しそうであり、羨ましかった。

大学の帰りに、博文堂、天農堂、太田書店などの本屋へ寄るか、市立図書館へ寄るなどしていた。図書館では中央公論などの雑誌や文学書を読むなどしていた。中央公論では谷崎潤一郎の〈鍵〉が連載されていて、話題になっていた。

最初のうちはあまり友達もできず、中学生を教えるアルバイトなどをする生活だった。

しかし、クラブ活動で新聞部へ入るようになると、少しずつ友達もできるようになった。新聞部にはいろいろ個性的な人がいた。太宰治に私淑している人、絵が上手な人など。

書評を書いたり、論説を書いたり、スポーツ記事を書いたりした。広告を取りに、大阪や大津へ行つた。印刷は京都まで行つてして、刷り上がったものを持って帰つてきた。クラブの仲間であつたハイキングに行くこともあつた。

授業も一般教養科目にはとくに面白いものもなく、義務のように講義を受けていた。

ただ、語学は好きであつたので、英語、仏語、独語、露語などを学んだ。人数の少ない露語のクラスでは、喫茶店へ行つたりして、楽しかつた。

講義が進んで、経済学を習うようになると、少しずつ授業にも興味を持つようになった。市村真一氏の本が教科書に使われたが、その本の元になっている Hicks の〈The Social Framework〉を英語の原書で読んで、国民所得の概念が理解できた。論理的に書かれていて、面白いものだとおもつた。マクロ経済学がわかりかけてきたようだった。

当時、父親はガンに侵されていて、闘病の日々を送つていた。長男の私は責任も重く、気の晴れない日が多かつた。結局、大学三年生の夏に亡くなつた。

ゼミナールの選択の頃になると、当時はマルクス経済学が流行つていたが、私は、迷わず近代経済学（吉田助教授）を選んだ。ゼミのテキストには Samuelson の本が選ばれた。私はこの

Samuelson の〈Economics〉をしっかりと読み込んで、経済学がわかったと思った。この本は今でも一番影響を受けた本であると思っている。

経済学の基礎を理解したが、其の後の社会生活でどれほど役立ったことか計り知れない。

Blog <http://blog.livedoor.jp/hkadono203>

Facebook <http://facebook.com/hkadono>

想い出の街・彦根



河原崎 貞 弘(大8)

私が自宅から離れて生活をした初めての地が彦根であっただけに、その印象もかなり深いものがあつた。昭和三十一年の入学当時、東海道線には蒸気機関車が走り、彦根駅前も雑然としていて、鉄筋の建物はなかつたと思う。しかし街には国宝彦根城があり、玄宮園、楽々園の美しい庭園があり、落ち着いた環境の中で、勉強するには最適の場所であつた。自由時間を多くするため、東栄町で下宿したが、ここには四人の先輩がおられ、教えられることも多かつた。囲碁の上手な先輩の手ほどきを受け、その楽しさを教えてもらったお蔭で、会社に入ってから囲碁クラブで関西棋院の窪内九段の指導を受け、今でも老人クラブで仲間と囲碁を楽しんでいる。下宿の家主は老婦人で一人で暮らしておられた。食事はすべて外食。浴場もなかつたので、近くの銭湯に通つた。銭湯を利用したのも初めてであつた。今迄母親任せであつた身の回りのこともすべて自分でやらねばならず、自ずと自立心が養われ、自分にとつても良い経験に

なったと思う。朝眼を覚ますと三十センチ程積雪していたことを思い出す。食事は大学横の「魚仙」を利用した。大学内の食堂と変わりなく、利用客のほとんどが学生であった。時には変化を求めて市内の中心地に向くこともあった。銀座の四階建てのビルの最上階にレストランがあり、そこでたまにビーフステーキを食べるのが楽しみであった。

私が経済学部を希望したのは、世界や日本の経済がどのように動いているのかを知りたかった訳で、二回生の終りにゼミを選ぶ時ぜひ石田興平教授のゼミに入りたいと申し込んだが、面接試験があると知って驚いた。当時石田先生は経済学部長だったので、学部長室で面接を受けた。緊張していたので、何を聞かれたかは覚えていないが、幸にしてゼミに入れてもらった。ゼミでは自分が調査したことや考察したことを発表し、質疑応答をしたが、高校生活と異なるこうした経験が、将来大いに役立つことになる。私が三回生の時(昭和三十三年)に石田ゼミの会が設立され、ゼミの卒業生も含めた



いしだゼミの友総会 昭和50年11月16日
於 京都ホテル

懇親会が年一回開催され、「石田ゼミの友」が発行されることになった。ゼミの先輩後輩が消息を伝え、意見を交換するゼミの友は、先生ご夫妻が中心となって毎年発行されたが、昭和六十三年に先生がご逝去され、私もしばらく後を引継いだ。平成二十一年終に第五十二号を最終号としてその幕を閉じた。（「石田ゼミの友」は図書館内「石田記念文庫」に全巻保管されている）

石田先生には卒業後もいろいろご指導いただき、すばらしい先輩後輩と永くお付き合いさせていただいたことは、私のその後の人生に大きなプラスとなり財産となった。

滋賀大学で学び、石田ゼミで育てられたことに感謝し、創立百周年に向けて大学がますます発展して行くことを祈念します。



石田ゼミナール総会記念 1982年10月24日 於 美濃吉

卒業から五十三年経って



刀祢館 信 雄（大8）

一 学生生活

私は敗戦の翌年昭和二十一年三月、戦争で父を亡くした台湾から伊勢松阪の母の実家へ引き揚げて来ました。

それから十年後滋賀大学に入学し、彦根での四年間の学生生活が始まりました。入学した昭和三十一年は日本経済もまだ厳しい夜明前の時代でした。全国の大学生数は今と異なり少人数であったが、大卒就職率は全国平均八十％程度の就職難の時代であったと記憶しています。然し、小さいながらも滋賀大経済学部の就職率は百％とされていました。会社の就職受験に際しては学校推薦がなければ受験出来ず、そして企業側は指定校制をとっておりました。幸い滋賀大学は多くの上場企業の指定校になっていました。

当時の彦根は静かな城下町でした。入学式の訓辞で、大畑学長は「ここ彦根は日本のハイデ

ルベルグである」と述べられ自由な校風を感じました。

さて、その頃の彦根での私の大学生活は、経済的に豊かではなかったが、それなりに充実した生活を送れました。

徳聖寮を出た後、護国神社近くへ下宿しました。当時の物価は、二階八畳間の下宿代が月千円でした。寮の学生食堂は一日三食で百円くらい、授業料は年間九千円でした。一方、私の収入は仕送り、日本育英会の奨学金、学習塾と家庭教師のアルバイトが各三分の一で約一万円位でした。下宿で音楽を聞く為に購入した小型ラジオが一台九千円で、年間の授業料と同額という高度成長前の物資の高い時代でした。読書の大部分は学校と彦根市の図書館にお世話になりました。購読していたのは雑誌「世界」、「英語研究」がありました。

三回生の時、世界連邦を唱えておられた下中弥三郎氏が会長の、日本外政学会から「後進国開発について」の懸賞論文募集がありました。一等の副賞は東南アジア旅行で、初めての論文応募でした。

残念ながら結果は外政学会の本数冊が送られてきただけでした。

二 東日本大震災の復興提言

学窓を出て五十一年目の平成二十三年三月十一日大震災が発生しました。敗戦、引き揚げ、

食糧難、物不足の苦しい時代を体験した自分にとって、出来ることは何か。被災者救済の為に呼び水としての義捐金が多く集まる事。そして今こそ、国が行うべき、復興政策をいろいろ考えました。四月に入り朝日新聞社から八千字以内で「東日本大震災の復興提言」の小論文の募集がありました。国難の今こそ、確実に行うべき被災者への支援と、今後も起こりうる大災害に、的確な対応可能な国家的システムの確立こそ必要と考え、ペンを取りました。一千七百通を超える応募があったそうですが、入選には至りませんでした。然し、少しでも国の政策に反映されることがあればとの願いでした。グラントデザイン提案として提出した八項目は次の通りです。

- (1)被災土地の取り扱い
- (2)法整備と国民総背番号の導入
- (3)自治体の補完性の推進と道州制
- (4)雇用の創出
- (5)教育に介護実習を必修化する
- (6)金融と財政
- (7)原発問題とエネルギー
- (8)国際協調と新しい経済学

平成二十五年三月十一日(東日本大震災から二年の日に)

(完)

「滋大陵水新聞会」思い出日記



林 史欣(大8)

昭和三十一年四月某日

偲聖寮に入室して三日目K、S両先輩が中寮十八号室に見えた。お二人は「新聞会に入りたまえ」と口をそろえて二口。狙い撃ちである。高校からの内申書で経験者と見られたようだ。子供の頃からおつちよこちよいの性格から即座に「入ります」と回答申し上げる。

昭和三十一年八月某日

新聞会有志で体育単位の取得を念頭に、大学のテントを担いで、N、S両先輩と同輩K君と未開発だった美が原から霧ヶ峰、蓼科高原と四泊五日の山旅をする。美が原で諏訪の女子高生とのグループと近付きになる。S先輩がスナップ写真の交換で、お付き合いが一寸あったようだ。

昭和三十一年十月某日

はじめてコラム「時の動き」を任される。

ハンガリー動乱をテーマに感想を書く。ソビエットの介入も、ハンガリー政権の社会主義圏からの離脱を策するのも、どうかと言うものだったが、M先輩から立場を明確にして書くものとご指摘をうけた。夜、彦根劇場裏のカウンターだけの飲み屋に、「聞屋は呑まなきゃ」とS先輩に初めて連れて行ってもらった。

昭和三十一年四月某日

去年は四回生二人、三回生二人、二回生一人、一回生三人と計八人の会員だったが、今年は少し出入りもあって、四回生二人、三回生三人、二回生四人、一回生七人と計十六名、倍増となった。それぞれの得意分野を發揮して充実した紙面が出来るだろう。

昭和三十一年六月某日

初めての出張取材で東京開催の全学連全国大会に行く。香山健一委員長や森田実書記長の高邁なアジ演説を聴く。すこし頭がイデオロギーに染まった。彦根に戻る前に広告掲載をセールスのため有名出版社を四々五社訪ね、会計学関係の森山書店で掲載承諾を貰う。

昭和三十一年十月某日

学園祭に新聞会の出し物として世界新聞展を開催した。展示物を各国の大使館に依頼。多く

の国々から協力を得た。語学面で香西先生、江龍先生に新聞の内容表示のお世話になる。ソ連のプラウダ紙に大きくスプートニク打上成功の記事が載っていた。自画自賛だが学園祭の目玉になった。

昭和三十三年四月某日

今まで名古屋の新聞社の印刷所を使用していたが、費用の点からも時間の事からも京都がいいと印刷所を移した。校正に時間がかけられ技術者も親切で変更して良かった。

昭和三十三年六月某日

新築なったクラブ棟の部室は気持ちがいい。登校したらまず部室。そこでU先輩から丸山真男の「現代政治の思想と行動」を薦められる。「無責任の体系」という概念は日本現代史を分析理解する上で格好なツールである。



昭和三十三年十月某日

創立三十五周年の記念式典を迎える。記念号として今までの裏表二ページを四ページで発行した。一ページ全面にY君の描いた本館校舎のスケッチを掲載、広告も日本経済新聞大阪支社から貰う。一部有料として式典当日、本館玄関前に出店した。スケッチが気に入られて思ったより捌けた。

昭和三十四年四月某日

四回生になった。新聞会も三回生以下の諸君に紙面の起案を譲ることになった。入会時八名の編集室も二十名に近い。将来を嘱目される会員ばかり。「新しい資本主義」理論のこれからの展開が予想され互いの持論が行き交う。

昭和三十四年十月某日

就職受験で東京のC社に行く。役員面接で、O専務が「君はクラブ活動が新聞部だが、偏った考え方を持っていないかね」と聞いた。「社会の現実を直視し考えることを学びました。」と好い答えをした。(思い出すままに)

我が青春「ボート部の四年間」



羽原 秀 俊（大8）

昭和三十一年四月、春とはいえ花冷えのする彦根の駅に着いた。一期校の受験に破れ、屈折する気持を抱えたまま、滋賀大の門を潜った。古い構えの偲聖寮の事務所で入寮の手続きを済ますと、「勝」と自己紹介した事務長が、入れ歯をカチカチ鳴らしながら「君は東寮の四号室」と告げた。

東寮の四号室では、広島県出身の黒田先輩と相部屋だった。講義の合間に、ボート部の伊場先輩、川端先輩がこの部屋によく来て碁を打っていた。広島県出身でもある伊場先輩から、ボート部へ勧誘され、嫌々ながらOKしてしまった。胃弱で太れない体質の小生にボート部を続けられる筈がないと思っていたからだ。それでも四、五、六月と新入の仲間と、バック台でボートの基礎練習に励んだ。六月に近畿大学体育大会が、大阪の桜の宮コースで開催され、ナックルフォアに乗って初めてレースに出た。勿論、一回戦で敗退、小生がレースに出たのは

これが最初で最後となった。

二回生になってマネージャーに転向した。意外にもマネージャーの仕事は小生に適していたようだ。最初は合宿での食事担当が主で、食材の買出し、食事の準備である。献立の定番はカレー、肉ジャガ、空揚げ、鯖の煮付けなどであった。

松島先輩の手伝いをしながら覚えていった。部活動の資金集めも、マネージャー

の重要な仕事であった。寄付金集めに大阪地区のOBを訪問した記憶もある。大阪には全く土地勘がなく、訪問するOBにも一面識もなかったが、名簿を頼りに商社や薬品会社、繊維会社などを廻った。今にして思えば、滋賀大ボート部マネージャーの名刺だけで、親切に接待してくれ、寄付金までよく出してくれたと思う。先輩たちのボート部への並々ならぬ愛着を感じた。本当に有難かった。

昭和三十三年に新しい体育館が完成した。これは絶好のチャンスと、当時学生間に流行していたダンスパーティを資金集めのために企画し、部員総掛かりでパーティ券を売り捌いた。小



昭和31年6月 近畿地区大学体育大会
出漕後の記念写真

生はダンスには興味はなかったが、彼女が出来るいい機会とばかり、こっそりとダンス教室に通った。しかしパーティの当日は女性に声をかけることも、踊ることもなく、受付に座ったまま終わった。

しかし、何んと云ってもボート部での一番の思い出は大津石山での合宿である。瀬田川は関西のボートのメッカであり、春の朝日レガッタ、夏の関西選手権が開催される。なかでも関西選手権には関西の大学のみならず、広島大、岡山大、鹿児島大の参戦もあり、まさに西征の日は今ぞ来ぬという強い思い入れが部全体にあった。当時、滋賀大には石山に合宿所がなく、民家を借りて、レース前の最後の一週間の合宿に入るのが恒例だった。関選のコースは、瀬田川に架かる鉄橋下をスタートし瀬田の唐橋を通り抜け石山寺に到着二〇〇Mだった。このコースを毎日試漕するクルーを追って、暑い日照の中、したたる汗を拭いながら、



昭和33年8月 関西選手権制覇を目指して練習するクルー

自転車で懸命に伴走したのを、夏になると今でも懐かしく思い出す。しかし肝心のレースの戦績については、全く覚えていないのが不思議である。

嫌々ながら入部したボート部の四年間は、我が学生生活に濃い彩りを与えてくれたと感謝している。七十五歳を過ぎた今でも、彦根の青春の一端として強く心に刻まれている。



昭和33年8月 関西選手権の石山合宿中激励に駆けつけた先輩達と。

湖上生活4年



興津成実(大9)

滋賀大を卒業した。下宿を3度変わった。4年間彦根という町に居た事は間違いない。然しその殆どの時間を琵琶湖の上で過ごした私にとって街の印象は薄い、況して大学内の事は講堂のイメージ位しか浮かばない。

目覚めると窓の外の木々の揺らぎをみる。『いい風がふいてるな』 今日にはベタか？
『陸風か、雨が近いな』 等と感じ乍トーストを食べ、4段変速の愛車(自転車)で艇庫に行き、一人で舟を下ろし一人でヨットに乗る。

時には漫然と、時にはあるテーマを持ち、或る時はフリー練習に来た部員達との遊びのレースをやり、一回生の時から夏休みには家に帰らず高校生の合宿に参加し、アルバイトはせず、ただひたすら湖の上で過ごした。昼はヨット、夜はマジャンだけの4年間だった。

学生チャンピオン

3位、5位、2位、1位、

1位 —— 圧勝だった。

昭和35. 10. 15 — 16常滑鬼

崎港沖で行われた第1回全日

本学生ヨット個人選手権に上

記の成績で優勝。初代学生個

人チャンピオンになった。

トップでゴールした最終

レース、やったと思つた喜び

の瞬間の直後から何とも不思

議な虚しさ、身体の中を風

が吹き抜けて行くのを感じた。

ラッキーだった。先ず第一

に学生個人選手権はこの年から始まった。インカレは団体



全国日本学生ヨット個人選手権

10月15、16両日愛知県鬼崎ハーバーで開催。順位次ぎの通り。

- S級
- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1 興津、嵐田(滋賀大) | 2 的野、野本(名古屋大) |
| 田、奥村(名古屋大) | 3 佐々木、渡辺(西学院大) |
| (同志社大) | 4 葛谷、野田、有馬(関西大) |
| 工大) | 5 大村、小島、早大) |
| 6 原田、小沢(早大) | 7 深野、野田、金本(関西学院大) |
| (法政大) | 8 本田、金本(関西学院大) |
| 9 藤井、瀬屋(阪大) | 11 田中、渡辺(日大) |
| 12 小島、村上(東大) | 13 友後、藤白銀、山森(広大) |
| 14 古屋、伴内、廣瀬(慶大) | 15 真鍋、藤川、廣瀬(香川大) |
- A級
- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| 1 菅原(慶大) | 2 田中(立教大) | 3 渡辺(早大) |
| 4 石川(西南大) | 5 長尾(関西学院大) | |
| 6 西村(同志社大) | 7 関(阪大) | 8 久保田(立命館大) |
| 10 竹内(香川大) | 11 皆川(広大) | 12 茂木(小樽商大) |
| 13 谷口(名工大) | 14 藤沢(法政大) | 15 加藤(名城大) |

スナイプ 滋賀大優勝
全日本学生ヨット

【名古屋】第二回全日本学生ヨット個人選手権大会第2日は十六日午前十時から愛知県常滑市鬼崎港外で四、五回戦を行い、スナイプでは滋賀大興津、嵐田、太田組、デーンキークでは慶応菅原がそれぞれ優勝した。

▽スナイプ ①興津、嵐田、太田(滋賀大) 83分の野、野田、奥村(名古屋大) 74分の佐々木、竹本、杉本(同大) 70分葛谷、野田、渡辺(名古屋大) 66分大村、小島、有馬(西南学院) 63

②原田、小沢(早大) 77分の渡辺、友後、藤白銀、山森(広大) 77分の田中、立教) 76分の渡辺(早大) 74分の石川(西南学院) 64分の長尾(関西大) 59分の西村(同大) 55

男子は立命が優勝

関西学生卓球二部

関西学生卓球二部リーグは十六日大阪福島体育館で行われ、男子は立命、女子は奈良安大が優勝、一部への挑戦権をえた。

▽男子 ①立命5勝②阪大4勝1敗③大橋大3勝2敗④京大2勝3敗⑤早大1勝4敗⑥大橋

戦しかなかった当時、選手層の薄さから本選に出場出来ず、団体等でしか活躍の場がなかった私にとって、個人戦が行われ、しかも今年からと云うのは正に千載一遇の機会にめぐり会ったと云う事だった。

次のラッキーは、開催があやぶまれたが直前に実施方向に変わったと云う事だ。開催予定水域の中部は前年の伊勢湾台風で壊滅的被害にあい、復旧もままならず大会を返上すると云う噂が流れ、近畿では予選すら予定通りには行われていなかった。然し、名工大を始めとする地元学連の懸命の努力で、予定通り開催にこぎつけられたのだった。

更なるラッキーは開催地が名大、名工大の本拠地、川の流れに流れる潮流で有名な常滑鬼崎ヨットハーバーであった事だ。

あまりにも速い潮流から地元絶対有利の前評判であったが私は定期戦で2度レースをした経験があり、初めての人に比べれば極端などまどいと抵抗はなかったと思う。しかも全国大会を勝ち抜いて決勝に進出した強者の内、大半の選手とは旧知の仲だった。

嬉しいラッキーは多くの人から応援サポートを受けられた事だ。

開催地、名工大の樽谷キャプテン(旧姓 葛谷氏)は自身も選手として出場した(S級4位)ライバルであつたにも拘わらず、本当に親身になってお世話をいただいた。更に写真にある様にセールは私の大好きなアールの「2021」を立命館大学の田中キャプテンから、頑張つて来い

ヨッの激励と共に借り受け、この写真は同志社大ヨット部の岸さんが、最終戦トップでゴールしてハーバーに帰って来た。今迄生きて来た中で一番幸せと感じていた瞬間を、後で送っていただき私の思い出の一枚として今も大切にしている。

そして最大のラッキーは理論派の太田、ガッツの米山という、何れおとらぬヨット気狂いのクルーを得たことだろう。勝利の喜びは常に彼らと共に在った。

とにかくラッキーだったと云うのが私の優勝の感想である。

ただ一つ試合に行く時には自分は絶対に負けないと云う(うぬぼれと云われると思うが…) 自信はあった。

それはこの4年間、自分が一番長くヨットに乗っていたと云う確信があったからだ。

よく練習し、努力したから勝てるとは限らない。だからラッキーだったと思っている。ただチャンスがめぐって来た時に、それを確実につかむ為には日頃の努力が大切だと思ふ。

長い人生の中で何の制約も受けず自分の意志だけで過ごせる大学の4年間、それ以後の人生を生きて行く上での糧となるような経験、体験をする事が大切なのではないか。一つの事に集中し、一度だけ自分の可能性を思い切り一つのものにぶつけて、自己革新を計って見る。そして「これだけは自信がある」と云うものを持つ。そんな貪欲さを今の学生に求める事は無理なのだろうか? 後に続く後輩達にラッキーを生かせる為の努力を是非してほしいと希ってペンを置く。

悪夢……卒業試験



後藤 寅二郎(大9)

彦根の四年間今にして思えば誠に気儘な時を過ごさせて頂きました。只々親に感謝あるのみです。春爛漫の花の下、入学式、入寮式も終わりまっ先に気が付いたのは自転車を手に入ることでした。当時の彦根の街の自転車はガソリンの要らない乗用車いやそれ以上であったかもしれません。卒業したら家業を継ぐと云うことで就職を心配するわけじゃなし、高校時代は勉強で削減されたテニス进行を思う存分満喫すると云うことで入試の時下見をしておいたテニスコートへ一直線入部を願ひ、天気さえ良ければ一日中コートで過ごす日が始まりました。雨が降れば映画館四軒あった映画館を上映種目かまわずでハシゴしたものでした。食事はあのなつかしい食券購入の勝舎監の学食、飽きれば「魚仙」「ござれ」「鳥卵」「スター食堂」夜は「出口酒店のトリスバー」「オーシャンバー門」「森下のみろく」「トツペーの…」で一杯50円のハイボールを飲みながら過ごしたものでした。今でこそ女好の寅さんで通っていますが袋街へは冷やか

しに行くだけで登楼しないまま閉鎖になってしまいました。今にして思えば残念なことをしたものです。勇気がなかったのが災いしたのでしょうか。しかしこの遊び放題のツケは期末試験にそしてとどの詰まり卒業試験に廻つて来ました。テニスのお影で財政学の大畑学長には答案用紙一杯の学長さんとテニスと云う論文で優を頂きました。それと宗教学の秋山先生には12色の色鉛筆で丁寧に描いた彼岸の絵で優を頂いたラッキーな教科もありましたが、何んと云つても極め付けは教養科目の内自然科学が一教科残っていた事でした。生憎この年は地学しか受験する科目がなく高校でも習わなかった科目でした。勿論優秀な後輩のノートを借りて一晩勉強したのですが当日の試験に答えることが出来ず只ひたすら覚えていった事をぎっしり書き綴つてきました。テストが終わつてまっすぐ学生課に行き先生の自宅住所を尋ね「埋れ木」と一升瓶を手に京都の先生の家を訪ねました。おそるおそる玄関を開けて、出てこられた奥様に「斯く斯く然然」と用向を話し待つこと暫し、今主人は入浴中でそれに答案用紙も来ていないからと断りの言伝ででした。でも答案用紙をご覧になつても同じですので、そこを何とか厚顔しいお願いですが色よいご返事を頂きたいと持参の手土産を渡して奥様のお口添をお願いしますと頼みこみました。ややあつて便箋と鉛筆を手にこれに番号と名前を書いて帰りなさいとにこやかにおっしゃって下さいました。振るえる手でハッキリ番号・名前を書いて、上り框に額をすりつけてお礼を申し上げ喜び勇んで彦根に戻り駅より一直線で久佐の辻を目指したのは勿論で

す。このテストの事は六十歳を過ぎるまで度々夢に出て来ましたが不思議に前半のテストに苦しむ所迄で目を覚めますのです。まさに悪夢です。

人生を豊かにしてくれた「硬式野球部」と「彦球会」



小 柏 博 美(大10)

現在、と言うより今までの人生で一番長く付き合っている人間は滋賀大学「硬式野球部」卒の連中が圧倒的に多い。「彦球会」は滋賀大学経済学部硬式野球部後援会の正式名称であるが、会則にもあるようにOB相互の親睦を計る目的の活動も行っている。年一回の一泊ゴルフ大会は今年で三十回になる。その間、グアムへのゴルフ旅行やオーストラリアへ夫婦同伴の旅もした。又、彦球会ゴルフの後やたまに集まってお酒、時には野球部同期の連中との一泊旅行など五十年以上顔を合わせてる人が多い。個人的には、今でもしばしば夫婦でお宅へお邪魔してご迷惑をお懸けしている何人かの先輩を持っている。

野球部へは昭和三十三年四月、桜満開のキャンパスへ入学して少し大学の生活に慣れた頃、五月には入部していた。福井県の山奥で農家の長男として育ち、幼い頃から野球が大好きで竹や木の棒を振り回して遊んでいたが、中学や高校で野球部に入れる環境ではなかった。「百姓

の長男坊は誰よりも早く家に帰り山や畑に行つて働け」という信念の明治生まれの祖母が家を支配していた。又、高校の頃、地区青年団の野球チームの一員に選ばれ町の大会で優勝したことがあったが、もし技量が伴つていたらとしても高校へは十五キロもあり部活などとても無理であつた。それだけに時間はたつぷりあるし、誰にも束縛されない大学はまさに好機到来である。誰かに勧誘されたのではなく自分から率先してキャプテンの伊藤芳朗(大学七回卒)さんに入部を申し込んだのである。

野球の練習は、景観的には彦根城を見上げる真に環境の良いグラウンドでしていたが、ラグビー部、ハンドボール部、そして陸上部の連中と一緒に窮屈であつた。部員は三十人弱だが授業や個人都合が優先するので全員が揃うことはなかつた。それでもいつも十五人位は集まり、ランニングやキャッチボールなどの後守備や打撃の練習をしていた。私は、始めは内野手、後に外野手をしたが肩が弱く一流選手ではなかつた。それでも福井県人気質なのか生まれ育ちのせいも4年間練習を休むことなく続けたのが密かな誇りである。

野球部には監督がいなかつた。キャプテンが監督、コーチであり選手でもある。また、部員募集や運動具店へのお金の支払いなどマネージャーと共に苦勞が絶えなかつた、と思う。グローブなど自分専用の用具を持つ選手は少なく、チームでバットも数本しかない状態、ユニホームも揃えなければならない、連盟費支払い等々お金のいることは山ほどあつた。借金返済

のためチーム全員で、長浜曳山祭りの山車曳きや多賀大社の祭りのアルバイトなどをしたこともある。

それでもどうにもならないので自分達がチームの中心となった時にはマネージャーの辻 瑛(大学十回卒)さんの発案で先輩たちの名簿を作成・整備し手分けして寄付金集めも始めた。私も、東京の先輩達をお訪ねしてお世話になった経験がある。

紙数の関係で筆をおきますが、今の彦球会の原型を自分達の時代に作ったと自負すると同時に、あの野球部の4年間は多くの経験と出会いのきっかけとなり後々の人生を豊かにしてくれたと思っている。

(野球部や彦球会の発展に尽くした伊藤さんや辻さんの名前を出しましたがまだまだ書きたいことや人達がおられます。名前のでなかった先輩、後輩、同期の皆さんごめんなさい。)



平成 11 年 4 月 14 日～20 日 彦球会オーストラリア旅行
シドニーオペラハウスの前

恩師山本安次郎先生

先生の教えを心に留めて



一柳善郎(大11)

「つくられるものがつくるものをつくる」。

山本先生が静かに語られたこの言葉は、生涯忘れることのできない一言であった。西田幾多郎博士のこの言葉が、山本先生の経営哲学「行為的主体存在論」の原点であることを知る由もない学生に対して、優しく「彫刻家と彫像」との関係として解説され、学生達の理解を深めさせようとお努力されていたお姿を、今も鮮明に記憶している。

大学を卒業後、名古屋市に就職し配属されたのが水道局であった。水道事業は、地方公営企業として、独立採算制の下で水道事業経営を行っており、全ての費用を原則水道料金により賄うこととされている。既に高度成長期を迎えていた日本経済の下で、膨張する水需要に対処するため、全国の水道事業者は巨額の設備投資を行い、その結果、原価の高騰、水道財政の悪

化、そして水道料金の改定という悪循環に遭遇していた。一般に、水道料金を含む公共料金の改定は、「総論賛成、各論反対」が常態である。水道局在任の30年間に、10回の料金改定を経験し、敢えて火中の栗を拾わねばならない事態にも幾度となく遭遇してきた。難しい経営判断を求められたとき、あるいは二者択一を迫られたときには、常に基本に立ち返り、山本先生の著書を開いて解決策を模索すること、屢々であった。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故の原因究明が調査進展する過程で、一部の報道機関や研究者等においては、恰も電力会社が民間企業であるため発生した事故であるが如くに、論じられていた。本来、経営の客体としての「事業」と経営の主体としての「企業」とは、明確に区別されるべき概念である。電気・ガス・水道事業は、公益事業学会の規約に定める「日常不可欠な用役を提供する一連の事業」であり、それぞれの公益事業には官公庁・民間という経営主体が実存している。公営企業である水道事業に携わる一人として、経営客体と経営主体とを混同する議論は許されず、山本先生の主張された事業と企業との明確な区分に基づく理論展開の必要性を強く感じている。

東日本大震災の余波が残る平成24年の秋に、公益事業学会員で某銀行系シンクタンクの経営専門家と懇談する機会があった。この専門家によれば、長期にわたる公益事業研究にもかかわらず、未だ明確な理論構築には至っていないとき、山本先生の著書「経営学本質論」に出会

い、初めて公益事業の理論体系を確立することが可能となった、との話を聞くことができた。山本ゼミ出身者としてこれほどの喜びはなく、改めて50年間山本理論とともに生きてきたことの誇りを、心密かに味わうことができた。

古稀をすぎた現在も、某精密機械製造会社に籍を置く一方、公益事業学会にも参加して、常に新鮮な情報の収集と更新に努めている。今後とも、山本先生の教えを心の糧、そして判断基準の基本として、大切に守っていききたいと思っている。

仇敵彦根での五年間



黒澤 日出男(大11)

昭和三十三年四月彦根城の桜花爛漫の時、水戸の地から彦根の街に来了。

大正年間に建てられたキャンパス内の古ぼけた寮で学生生活が始まった。関西弁が飛び交う世界で水戸の田舎者にはカルチャーショックと同時に新鮮な驚きだった。

伝統ある寮誌に「仇敵彦根を批判す」という駄文を書いたのは若気の至りと云えよう。

水戸から彦根に学んだと云う稀有な例は、彦根の街の人や先輩からも良く話題となったし「何故水戸から？」と質問される事が多かった。

街の何処からでも城山に聳える彦根城の天守閣が眺められ、青空にはトンビが舞っていた光景が懐かしい。

彦根の街の人、特に高齢者に云わせれば桜田門で井伊大老を撃った水戸の人間は許せない。これが戦前だったら水戸の人間は袋叩きに遭っただろうと云われた。それでも、彦根の人々は

優しく接してくれ、私の第二の故郷となった。

最初の下宿は北村さん宅、歴史を感じさせる古い大きな家で母屋に三名と母屋に隣接して建て増した四部屋と離れ部屋に五名合計八名の学生がお世話になっていた。家主のおばさんは当時六十歳を超えていたようで、高校一年生の末娘と一緒に暮らしていた。七名のお子さん達は女性が多く、何人かの娘さんは我らが先輩の下宿学生と結婚していて、その先輩達は日本セメントや名古屋鉄道の部長をしているとの噂だった。末娘の洋子ちゃんは、聡明でヒマワリのように明るくテニスに熱中する無邪気な高校一年生で、絵を描く親友は肖像画を描かせてとアプローチしていた。

二回生となった九月、校医から慢性腎臓障害と診断され休学して療養に努めるべしと強く勧められ彦根を後にした。

北村さん宅と洋子ちゃんとは、復学した翌年四月吉田さん宅に下宿を移してしまい疎遠となったが不思議な縁が続くことになった。洋子ちゃんは京都の短大に進み「ミス琵琶湖」となり、更に当時憧れの職業、日本航空スチュアーデスとなり東京に出てきた。昭和三十八年四月から東京に勤務していた私が、どうして上京して来た洋子ちゃんの後見役となったかの経緯が思い出せない。北村さん宅では、私より多くの学生が洋子ちゃんとの接触が長かった筈であるのに・・。

昭和四十九年二月、岡山に赴任中に社員表彰としてグアム島への家族旅行の際には、彼女の忙しいスケジュールを縫って羽田空港で我が家一家を見送ってくれた。

彦根での二度目の下宿となった吉田さん宅は、日立製作所に勤務していたテニス部の先輩からの紹介だった。家主の吉田さんは関西電力彦根支店長を終えた七十歳を超えた好々爺で熊本出身・奥さんは鹿児島出身で息子さんご一家と暮らしていた。この奥さんは、茶道と華道の先生をしていた。たまたま日中、離れの部屋に居ると「黒ちゃん、可愛いお嬢さんが来ているから一緒にお茶を飲まへん？」と茶席に誘ってくれ「若い人は飲むお作法だけは覚えておきなさい」と優しく教えてくれた。吉田さん宅にお世話になった三年間、私は郷里の高校一年後輩の女性と婚約、そして破談に至る経緯をすべて奥さんに報告していた。四人姉妹の長女で家業の食品問屋を継ぐ宿命の彼女を守るべく、婚約を決断したのだった。その年の晩秋、親の許しを得て彼女が郷里から九時間の特急列車を乗り継いで彦根にやって来た。琵琶湖と伊吹山を一望できる彦根城展望台で、婚約を祝福してくれる仲間六人に彼女を紹介した後、吉田さん宅では一家を挙げて婚約を祝福する夕餉を用意してくれていた。然し、私の我侷で彼女との婚約は破談としてしまった。若気の至りとはいえ、人生の痛恨事だった。

私は傷心を慰めるべく、夕刻の湖畔に出てグリークのソルベージュの唄を口ずさんだものだった。

昭和四十一年十月、水戸で家内との結婚式を挙げ彦根城内の名庭を眺望出来る楽々園に宿泊し吉田さん宅に結婚の報告に伺い家内を紹介した。四年前の婚約破談を心配してくれていた吉田さん一家は、我々の結婚を喜び祝福してくれた。

親友石橋君の下宿先にも大変お世話になった。自動車学校理事長宅の離れに住んでいたので深夜を問わず我等仲間がお邪魔した。此処のおばさんにも「黒ちゃん・黒ちゃん」と大変親切にして頂いた。おばさんの末娘良子ちゃんは当時小学三年生で、遊び相手として接したのも楽しい思い出である。我々が卒業して二十数年後、彦根を懐かしむ仲間・特にこのおばさんにお世話になった七名が彦根に集い宴席に招待したら、「七人の侍の皆さん、全員立派になりました！」と大喜びしてくれ彦根名物の珍味「鮎寿司」を全員にプレゼントしてくれた。

卒業して四十数年経った五年前の五月、末娘の良子ちゃんから突然電話があり「旧姓澤良子と申します、彦根で母が大変お世話になりました。実家に帰り母の遺品を整理していたら、黒ちゃんとの交流文書が出て来て懐かしくなりました。九十四歳で亡くなるまで皆さんに優しくして頂いて」と感謝された。

家庭教師を頼まれた光吉さん宅での交流も楽しかった。昭和の初めから医院を開業し二代目の医師の一人息子（いわゆるボンボン）を預かった。この一家とは、ボンボンが東京の私大医学部を卒業し父親と共に三代目の医師として働くようになって何度もお邪魔し大変お世話に

なった。ボンボンからゴルフの挑戦を受け、何時かは決着をつけようとの約束を果たせないまま、彼は五十五歳の若さで急逝してしまった。

彦根市立病院の医師だった戸崎先生との交流も七十四歳で亡くなるまで続き、忘れられない思い出だ。京大を出てインターンとして勤務していた先生に、復学後に盲腸手術入院と眉毛上のニキビ手術でお世話になった。私とは六歳年上の先生は、偉ぶらず学生仲間のように対応してくれ先生の下宿に度々お邪魔しクラシックレコードを聴かせて貰いながら、青臭い議論を交わした。先生が独立開業した時には、東京から駆けつけ医院の庭に記念樹を植樹して来た。亡くなるまで交わした年賀状・暑中見舞いには几帳面な文面で私の健康状態を案じてくれていた。生前最後にお会い出来たのは、関西に出張し接待ゴルフで琵琶湖カントリーでのプレー後に落ち合い、久しぶりの再会を喜びながら酒を酌み交わした時だった。それから三年後、先生は突然亡くなられた。告別式には行けず後日、未亡人となられた奥様を訪ね、ご霊前で御冥福をお祈りした。それにしても、戸崎先生と光吉のボンという二人の医師が揃って急逝してしまふとは！ 学生時代、慢性腎臓・腎臓結石・盲腸炎など病気に取りつかれた私が健康体を回復し、斯くも元気で居られるのはどうした事か？

人生の不思議を思わずにはいられない。

古稀を過ぎ、七十四年の人生を振り返って思うのは、休学を含めた五年間の彦根時代は我が

人生の珠玉の五年間だったと思う。彦根は私にとっては決して仇敵の地ではなく恩義の地なのである。

生協運動に参加して



稲 邑 明 也 (大12)

私は家の事情で学資に乏しく、偲聖寮に入って生活費を押さえ、色々なバイトをやった。こんな私に耳寄りな話が入った。安保闘争の中で私が参加していたマル経勉強会の二、三回生の先輩達が生協を設立することになったのだ。参加を求められた時、生活費は安くなるし、うまく行けば手当が少し期待できるか…というお恥ずかしい発想であった。

私の入学一年前に先輩達は寮の食堂を学生経営に移すことに成功しており、次は業者経営の売店を先に生協化しようという準備を進めていた。期末試験直前の一月に生協設立総会に漕ぎつけ、私は理事の一員に選出された。三月に法人格を得て、喫茶店、理髪店を生協に移し、滋賀大学彦根地区生協が正式にスタートしたのは一九六一年四月であった。翌年には食堂を生協化した。

創業期は神谷守利さんはじめ先輩たちの大奮闘があった。主な物品は京大生協から仕入れた

が、食堂の食材などは地元業者から調達する点で苦勞もあつた。経営を軌道に乗せるには、出資する組合員の獲得、仕入れコストの引下げ、利用者・供給高拡大など課題は沢山あつた。大学裏門前にある業者食堂が旨い、という学生も多く、生協利用を促すため板前さんも交えて議論など重ねた。入学式前は組合員獲得のためにパンフレットをガリ版(当時はコピー機は無く、謄写版印刷)で作成したり、購買・供給の過不足回避、赤字圧縮の議論をしたり、理事は皆大忙しであつた。

初代理事長は山本勉さん、二代目は本田貞彦さんと、卒業毎に交代があつた。三代目を選ぶ時、私にやれと皆から言われて困惑した。私は二期目には専務理事に就いていたが、自身の性格や能力からも無理だと言つたものの皆に押し切られた。

私が理事長に就いてから同学年の春日、鎌田、潤田君や、短大から迎えた向井君など一年次後の理事諸君に支えられた。創業期独自の難題は残されていて、食堂や売店の設備が不十分で老朽化など改善を大学に要請すること、加入組合員を増やすこと、資金繰りを楽にさせること、など取組んだ。結成されたばかりの生協労働組合からは賃上げや人員増を要求される、算盤片手に団交をやる、米価引上げ反対運動では自転車に拡声器をつけ署名を集める、自治会と共同で大学管理法反対の運動をやるなど、理事は皆が忙しかつた。

実務も多々あり、土日も含め毎日大学の正門を通つたが生協の事務所に直行で、殆ど授業を

受けられなかった。能力のなさを時間で補うような状況であったが、理事の皆さんと頑張っ
卒業前には懸案の赤字を消し僅かながら黒字を出すことができ、心底ホッとした。

ゼミはマル経原論の松尾博教授に学んだが勉強時間を確保できないのが悩みであった。

中間・期末試験は難儀したが単位は揃え、銀行に内定を得た。銀行に入って労働実態の酷さ
に呆れ、労働組合運動に加わり定年まで代議員など務めたが松尾教授の薫陶のお蔭である。

『ちーちゃん』ちの一人パーティー



「ちーちゃん」(仮)は5人も入ればもう一杯の、小さなホルモン焼き屋さん。彦根銀座に隣接している市場の裏口に、まるで瘡蓋の様にへばり付いて立っていた。

ちーちゃんを取り仕切るのは、小さな体の朝鮮人のおばさん。いつもニコニコ顔を真っ赤にして、こま鼠のように働いていた。

1962年、ようやく戦後の混乱が終わり始めていた頃、日本全体が「所得倍増計画」に期待をし、がむしゃらに働き始めていた時代であった。裏日本にも近い、小ぢんまりとした彦根の街にも、吉永小百合とマヒナ・スターズ

戸田 一雄(大12)



南紀一周ゼミ旅行
石田先生、上田勝宏君と私 石田興平先生が若い!

の唄、「寒い朝」が流れ、みんなが切ない中にも明るく未来を探しているような時代であった。ファミリーストラップなど全くない時代。働く男の夕べの憩いと言ったら、おでん屋さん・ホルモン焼き屋さん・立飲み酒屋さん位なものか？いずれも学生の僕には縁の薄い存在であった。

僕は貧乏学生だった。いつもお腹をクークー鳴らし、学校と水流町の下宿の間を愛用のぼろ自転車で疾走していた。夕食も偲聖寮の食堂で世話になった。

刻んだキャベツの山の底に隠れ潜んでいるクジラのカツが馳走だった。お金も無いのに、山登りに憧れ山岳部に入り、山男たらんと密かに年間100夜の山中泊を目指していた。この部には素晴らしい先輩も沢山いた。

山登りは、お金がかかる。北アルプスの縦走は2週間近い山旅。下界の喧騒を忘れる天国だったが、僕は山に行くお金の工面に自分の悩みの80%を割っていた。お袋が一家の生活の中から絞り出した貴重な仕送りと、僅かな家庭教師のアルバイト、そして3か月に1回の奨学金



南紀一周ゼミ旅行
那智の滝をバックに大12・石田ゼミの仲間と

の合計が、全ての行動を決める。

ちーちゃんがへばり付いている市場には、いつも合宿に持って行く食料の調達に来た。軽くて、安くて、日持ちがして、馬力の出る食料を買ったが、予算が少なく、いつも乾パン・魚肉ソーセージ、玉ねぎ・人参・マーガリンなどを買い求めた。合宿最終日の前夜、標高3000mで飲む、缶詰みかんのトリスウイスキー割りだけは外せぬぜいたく品だった。

買い出しの度にちらつと見ていただけのちーちゃんのお店ののれんをくぐったのは、山岳部合宿の食糧調達時ではなく、ある日先輩に連れて来て頂いたのがきっかけだった。僕には初めてのホルモン焼き屋さん、新鮮な印象だった。何よりも一番安いミノ焼が上手かった。噛めば噛むほどジューシーな脂が口に広がり、貧乏学生の僕には、天にも昇るような美味しさであった。

2度目は、奨学金を頂いた日の夕方だった。大人ぶって、一人で暖簾をさつと振り払い、ちーちゃんのおばさんに、「ビールとミノ！」と大きな声で叫んだ。まるで一気に大人になったような気持ちになり、虎の子の奨学金の多くが消えて行った。



北アルプス三俣蓮華岳大沼乗越で橋本先輩(大11)と

ちーちゃんちには、それから一人でこっそり通うようになった。行く時は決まっていた。奨学金の出した日と、永い山の旅を終え、彦根に戻って来た日の夜だった。一人で、ミノばかりを食った。貧乏学生だから、ビールには手が出せなかった。

ちーちゃんのお母さんは、僕を大事にしてくれた。どんぶりにご飯を山盛り盛ってくれた。皿に一杯のネギのみじん切りを盛り、醤油を一杯かけ、ミノと一緒にご飯の上に乗せ、ご飯と一緒に頬張る。時々やって来る僕の至福の時だった。

自分だけの「元気づけパーティー」は、僕が彦根生活を終え、大阪に就職するまで続いた。自分一人だけのパーティーが進む間、ご飯を一杯盛ってくれたお母さんは今どうされているだろうか？僕は時々感謝をこめて振り返っている。「ネギ・ミノ・ごはん」を腹一杯食った僕、育ちざかりの僕は、こうして大きくなった。

有難う！ちーちゃんのおばさん！



下宿（彦根市水流町）のおばさんと
（下宿の裏の畑にて）
同下宿の吉末賢治君（大13）

安保騒動



守谷 貞夫(大12)

1960年4月滋賀大学経済学部に入學した。神戸からの都落ちでかなりのカルチャーショックを味わった。この年の入試倍率は48倍、実際の倍率は25倍であったと記憶している。

入学早々に自治会選挙があり、学生部の村重さんの勧めもあり軽い気持ちで立候補した。入学時の経歴に高校時代自治会の役員をしていたという事を書いたのが原因の様だった。役員に選ばれ厚生委員という役を担当した最初の仕事で、在校生がヨットの帆に巻かれて死亡し、学校を代表して葬儀に出席する事であった。

4月末頃から国会で日米安全保障条約の改訂の議案が上提され全国的に大論争と成った。学内でも大騒ぎと成り、一部、左翼系の学生の扇動に依り、抗議集会が繰り返された。私は安保条約をゆっくり読んだ事も無く、新聞情報しか知識が無い状況で、反対運動の矢面に立たされた。

ある集会で私が司会をする事と成り、講堂で集会を開いた。全く経験のない1年生が司会を担当したため、左翼系の学生に掻き回されて、無届デモを実施する様議決されてしまった。その会場で毎日新聞の記者が取材に来ており彼の情報に依ると、議決後直に大津から警察官が8台の車で彦根に向かっているとの事であった。

早速、寮に戻り逮捕に備えて、下着を替え運動靴に変えてデモの先頭に立った。参加者は無責任でシユプレヒコールを唱え銀座通りをジグザグデモを繰り返した。何と道の両側に警察官がずらりと並びデモする学生より数が多かった。翌日の毎日新聞の社会面に「滋賀大抗議集会で司会者の不備に依り無届デモ」と写真入りで掲載された。

5月に入って、反安保運動は活況を呈し、抗議集会の決議で国会へデモを掛ける決議が成され、自治会役員4名派遣という事に成った。自治会旗、旗竿を持って、一路東京へ夜汽車に乗った。翌朝列車は品川止まり、以後東京まで全列車ストップ、仕方無く品川駅から線路に降りて、東京駅に向かって歩行。

何処で街路に出たかは記憶に無いが、三原橋迄歩いて来ると、当時橋の袂にポリボックスがあり長い旗竿を持っていたので警察に呼び止められ色々調べられた。そこへ私服の男2名ポケットから何やら見せて、即解放となった。何を勘違いしたか我々4名「ヤバイ、付けられている。」と言って二手に別れ、落合い場所を地下鉄の駅という事で敵を巻いたつもりでいた。

後日気が付いた事ながら、学校が警察に依頼して我々の保護を託して呉れたものだと思われる。以後、何のトラブルも無く彦根に帰って来たのが何よりの証拠であろう。翌日、千駄ヶ谷公園に集合した我が反主流派全学連は、津田塾を我々4名で先導して国会へデモ行進、最後に南平台の岸私邸へ「岸を倒せ」やがて「岸を殺せ」と声張り上げて、実に勇ましいものでありましたか？

後日就職にどれほど悪影響するかも知らずに。それに止まらず、就職(神戸製鋼)してからも公安警察が毎年私の動向調査に来了。総務の担当に「あいつは昔は赤かったが、今はピンク一色に変わった」と言わせた。兎にも角にも警察には大変お世話に成ってしまった。特に日本の公安警察を侮ってはいけない。

禄なことをしなかつた学生生活で、1つだけ今も学生に貢献している事がある。生活協同組合を作った事だ。寮の食堂と校内の売店は私人に委託された事業であったが、生活協同組合に改組すること成り、厚生委員である私の仕事と成った。京都大学生協へ行って色々勉強し、資料も借出し参考とした。当時滋賀県には生協は東レ生協しか無く、県庁から書類一色借受けて提出する書類の作成を手掛けた。(大部分はプロに依頼した)61年度の自治会で生協が発足した。現在の生協の活況は喜ばしい限りだ。

一生ものの四年間



倉坪和久(大13)

昭和三十六年に入学した飛驒の田舎者にとって彦根はほどよい田舎度(?)で、おまけに「学生さん」と大事にされて、最初から私は滋賀大学と肌が合った。

そのせいもあつたらう、以後四年間の大学生活はずっと充実して満足だったし、卒業してすぐ陵水会にも関わるようになって四十八年、結局、七十才過ぎの今の生活すら滋賀大学のおかげで充実して幸せということになっている。

私にとって、イイ時にイイ所でイイ人たちに出あつた一生ものの四年間であつた。世話になつた下宿のおばさんには今も一年一度は会いにいつて歓談してくる。

クラブは軟庭部と謡曲部に入ったが、三年時に部長になつたのを機に謡曲部活動に本気になつた。

たまたま野ざらしになっていた能舞台を磨いて使えるようにしたのは時の縁として、清涼寺

の和尚に頼みに行つて合宿を坐禅こみでさせてもらえるようにしたり、他大学の女子部員と交流を始めた
り、京都学生連盟に入れてもらったのはいいがくやし
い思いをしたり、まさに自分でも「謡曲学部・経済学
科」生だと笑うほどの熱の入れようだった。

そして、何といつても中川清先生という本物の『芸
の師匠』と出あえたのが何よりで、師匠には生き方訓
までいろいろ教わつたし、個人的にも、四年生の夏休
みには本気でしごいてもらつて自分も本気で猛練習し
能のシテを本格衣裳で演じさせていただいたのは、一
世一代の得がたい経験であった。

この謡曲部の縁は今も名古屋で鶴森先輩を中心にし
て月一練習会の形で続いている。

ゼミは江頭ゼミに入った。

有名教授のお一人で血気の佐賀つぼだった由だが、
私の頃はかなり好々爺になつてみえて優しく、幹事



昭和40年卒業アルバムにの能「謡曲部」

の私はずいぶん可愛がってもらった。ご夫妻に仲人も頼みにいつてそれはかなわなかったが、教授お一人で出席していただいたのは幸せであった。私にとり本物の『学問の師匠』。ちなみに仲人は別の縁で西藤教授ご夫妻にやっていた。

就職先を決める段になって『鶏頭となるも牛後となる勿れ』志向の私は、学生課の村重さんに「もっと小さい面白そうな会社ない？」と頼んで奥から出してもらったのが名古屋の「丸一」(後の(株)浜乙女)という会社の求人票。行く気になったが、長男の私を心配したのが父親。その事情を知って当時OB会担当だった芳谷教授が紹介状を書いて下さりそれを持って会いにいったのが当時の初代「名古屋支部長」だった宮木利左衛門氏。全く初対面の私のために「丸一」を調べて下さり「小さいけれど面白そう」とのこと無事入社し…その縁で卒業と同時に「名古屋支部」を手伝うことになり…結局、歴代の全支部長のお手伝いをし続けて「生き字引」みたいになり…自然とたくさんの先輩後輩と縁が広がって、伊與先輩の俳句会に入れてもらったり、名古屋の同期生と交流を楽しんだり、滋賀大学はずーっと私の人生のタテ糸である。

私の実家



西 部 宏 道 (大13)

私の実家は、臨濟宗妙心寺派の寺で、経済学部先輩達が学習塾を開き、塾の名前を「大学塾」と名付けたので、学習塾が無くなった後も「大学塾」でとおっていました。

昭和三十年頃から運動部が泊るだけの合宿を行っていましたが、やがて食事付の合宿を行うようになりました。この合宿は本堂を建て替える昭和五十八年頃まで続いていました。合宿中は本堂から座敷にかけては、合宿生の蒲団で一杯でした。ヨット部とボート部の合宿は、朝食と夕食は自分達で作っていたので、マネージャーや食事当番は、食材の買出しに行き、練習が終わるまでに食事の支度を終えておかねばならないので大変だったと思います。朝食はご飯とみそ汁に卵、夕食はご飯と豚汁、揚げ物、カレーライス等が多かったようです。

その当時は、スーパーやコンビニ等の便利な店が無かったので、寺から四、五分で買い物に行ける市場街は食材を買い求める拠点だったと思います。

市場街は二メートル程の道巾の両側に色々な店が軒を連ねて、一大ショッピングセンターを形造っていました。この市場街から銀座街にかけては、ゑびす講を過ぎる頃から年末まで、近在の人達が正月用品を買い求めに来、身動きが出来ないほど賑わいました。野菜や魚を扱っていた「三田村」、肉屋の「はしもと」、豆腐の「おくい」等、合宿時に買物をした店は今はもうありません。「三田村」では野菜や魚を運んで来た木箱をもらい、食事を作る時の薪として大いに利用させてもらいました。今の大正ロマンの町四番町スクエアは観光客相手の店が多く、日常の買い物をする店が少なくなっているように思います。

次に、五番町には魚、干物、果物等の問屋があり、朝は商品を持ってきたトラックと、仕入れの車でごった返していました。当時の問屋は移転して今はありません。今、京橋から昭和大道にかけては、キャスルロードとなり、道路は拡張されて、歩道がつき、歩道は欒並木となり、両側の街並みは江戸時代を再現した建物となっています。洋菓子の「三中井」、本町通りの和菓子「いと重」は健在ですが、合宿時に利用した「楽々湯」は廃業、「高砂湯」は銭湯をやめて土産物屋となっています。

私が卒業して五十年近くになります。この間に、近江絹糸、鐘紡、東洋繊維、新内外綿等の紡績会社、彦根駅裏のセメント会社の工場閉鎖、旧市内地にあったバルブ工場等の郊外地への移転、郊外にできたスーパーマーケット等で旧市街地は昔のような賑わいが無くなり、更地が

我が青春の彦根

目立つようになった事は寂しい限りです。

彦根を想う



森本

正(大13)

昭和三十六年の春、滋賀大学の入学式に臨んだその日は、大学へ向かう道々に、ちょうど満開の桜が咲き誇っていた。特に、偲聖寮前の桜(現在にはもう無いが…)は見事であった。50余年経過した今も、昨日の事のように鮮明に覚えている。「一期校」受験に失敗した少し暗い思いを吹き飛ばす光景であった。

写真は、昭和三十六年の秋、一回生の頃、彦根城の石垣に登って写したものである。三段目の右上が小生である。当時は(現在も同様かもしれないが…)、空手の練習に入る前に、準備運動の一環として、素足で「城山」に登ることが日課であった。私が「空手道部」に入部したのは、

- ① 人生の土台となる丈夫な体を作ること
- ② 「商社」を将来の入社先として希望しており、政情不安の地においても「徒手空拳で身を

守れること

③全く偶然であったが、同郷の藤永君が入部していたこと 等々であった。

4年が経過し、母親の地元での強い就職希望を受け入れ、電力会社に職を得た。商社への入社は叶わなかったが、人に敗けない丈夫な「体」作りが出来たと同時に「胆力」が育ったと思う。

「学業」の方は、卒業後10年近く「単位不足で卒業出来ない」夢を時折見たこと等々：「空手」ほど身が入らなかつた。就職後、「継続は力なり」をモットーに、新しい知識（電力技術・通信・コンピュータ…）等々、を中心に、「人より半歩先」を行くように努めて来た。

「現役中」は、家内や子供と2・3度と数える程しか彦根を訪ねる機会がなかつた。60歳を過ぎ、「陵水会」の役員となつて度々彦根を訪れる機会が出来た。しかし、この時には、大変お世話になつた（下魚屋町）の下宿のおばさん（転居先



昭和36年秋 一回生の頃 彦根城の石垣に登って
三段目右上が小生 大13 森本 正

不明)、本町のハンコ屋のおばさん(鬼籍に入られた)のお二人から受けた数々の「情」に何のお返しも出来ず今さらながら悔やまれる。このことは、若くして亡くなった母親に対する思いと同じである。

クラブバイト・イン Hikone



大西久一(大14)

競技や練習に使用する艇は、老巧化に備えて毎年のように更新する必要がある、一方で国の予算で作ってもらえる艇数も限られていたので、調達のカネは僅かな寄付金の他、我々のクラブバイトに依った(一艇は20万円〜30万円。当時の物価状況は、受験料、入学金各1,000円、授業料年間9,000円、寮費1000円、日本育英会奨学金7,000円、下宿代2,000円位、大卒初任給25,000円前後、国鉄名古屋・大阪間準急比叡号乗車券1000円)。彦根という土地柄、格好の良い頭を使うバイトは希れて、ヨット部バイトは専ら体を駆使用する肉体労働に偏向していた。

二回生の折に、芹川のまだ先の河堤の改修工事を請け負った。堤防の内側のコンクリートを打つ土を固める仕事と500メートルほど先の資材置場から20kg入りのセメント袋を運んできて5メートルほどの高さのミキサの口に放りこむ仕事。ニコヨン(当時失業対策事業の日雇

いをこう呼んだ。日当240円が語源とか)のおばちゃん達との共同作業であった。おばちゃんの一人が土手堤の上で、見張り^シに立って、カントクが来たら合図を送り、その時だけ、懸命に働いているポーズをとるよう教えられた。昼飯後に空が曇ってくると、おばちゃんたちは、雨乞いを始めた。聞いてみると昼から雨が一滴でもあれば、仕事は打切り、賃金は一日分ももらえるとか。こんなことなら、ニコヨンよりも我ら学生を雇えば工事ももっと早く進むのに、と思った。朝が早いため食堂が開いてないので、24時間営業の正門近くのパン屋で食パンのミミを買ってきて朝飯にした。

部が引き受けてくるバイトは、肉体労働の土方(新撰組土方歳三の「ひじかた」とは読まず、「どかた」と読んだ。今日では懐かしい死語だろう)。県立短大(当時)や彦根駅周辺の給水設備は、我々の手による



カレッジライフ

ものであった。と言えば格好良いが、中身は技術不用の穴掘り。水道管敷設のための溝(幅30センチ、深さ50センチ)を作る仕事。鶴嘴とスコップを当てがわれ、メートル当たり、固いところ60円、柔らかい場所で50円の手当。固い、柔らかいはどこで決めたのか知らないが、超固いところに行くわけせば悲劇で、先に進めず上級生に睨まれた。それでも半日で10メートルは掘れた。終わってから、女子短大生などが無事に水が飲めるのは我々のお蔭、とひそかに満足した。

佐和山城址の近くの山だったか、斜面に植樹する仕事もあった。今でいえば、緑化と炭酸ガスの削減に貢献しているといったところだが、斜面での穴掘りは結構つらかった。現在とは違って山登りは山岳部以外は誰もやってない時代、重い苗木を担いで斜面に取りついたらたんにバテてしまふ、それからの穴掘りだから堪えた。

少々、プライドがくすぐられるヨット部オリジナルなバイトが、ヨット教室。名前はしゃれているが、大阪のデパートや企業の社員を船に乗せるだけの仕事。若い女性は殆ど上級生が連れて行き、我々新人はオッサンや兄ちゃんばかりを押し付けられた。一度だけ、しんどいからお前が乗せろと言われて、当時では珍しい高価そうなサンローラン(彦根にはサンローランやジバンシーなどのブランドはなかった。我々もそんな妙な名前すら知らなかった)の黒いメガネ(サングラスのこと)をかけた姐さんに乗せた。暫くしてメガネがない、落とされたといつて

騒がれ往生した。瞬間、「馬鹿者」と言つて体裁をつけて怒り狂う上級生の顔が脳裏に浮かんだ。何のことはない、カッコつけて初めて使つたメガネ、かけたままだっただけ。メガネをかけたければ、メガネそのものは見えない道理。

艇庫から北の竹生島や北比良の山々が霞んで見えたある日のヨット教室。デパートから来た姐さんに、上級生が「あれが北朝鮮の山々だ」といつてモテていた。へー、とお姐さん方は感動していた。騙されたことも知らずに、朝鮮半島に行くわした感動を今でも胸にしまつていゝのかな。

3 回生のころ、彦根で全国チンドン祭りがあつた(ちんどん屋さんも今では死語か)。国定忠治や清水次郎長、森の石松、大政・小政なんかと町中を練り歩き、最終は公園の舞台で芸をする祭り。袋町でかなり長い休憩があつた時、世慣れしているちんどん屋のおじさんが「ここ色町やな」といつて長々と詳しくその筋の講義を社会勉強として論じてくれた。

スポンサーの、今でも繁盛の菓子匠「いと重本舗」の看板を持つた(卒業アルバムにも載つてしまつた)。駅前通りに支店の店が出来ているので、彦根に来た折には機会があればオリジナルブランドの「埋れ木」を買つて帰る。

バイトの儲けは、無条件にマネージャーに吸い上げられた。従つて如何ほどを稼いだかは、今以て不知である。

陵水新聞会・自治会・生協組織部・大学祭



奥谷 弘 和(大14)

入学当日に新聞部を探した。滋賀大学では「陵水新聞会」といって、入学式当日に、生協への加入勸奨や自治会費の徴収と一緒に新聞代を集めていた。当時の新聞会は四回生に柏原さん、三回生に織田さん、二回生に岩崎さん、松元さんがいるだけだった。一回生で入ったのは私一人である。織田さんが原稿書きから印刷・発刊までほとんど全部を一人でやっていた。私は織田さんの下宿まで出かけていろいろ手伝った。

八月に広島で原水爆禁止世界大会があった。まだ新人だけれど編集長の織田さんが勉強になるからと、行かせてくれた。原水協も革マルも全学連も初めて見た。

一九六三年十二月、ポポロ座事件の判決が出た。愛知大学内のポポロ座という演劇集団を警察が大学構内に入って取り締まったという事件だった。これに最高裁判所が合憲の判断をした。陵水新聞は直ちに号外を出して「大学の自治に重大な危機」と伝えた。これに対するデモ

は裁判所に対しても行われた。裁判所の前で渦巻きデモをしたけれどどの反応もなかった。

その頃、自治会の役員をやるという人がいなくなつた。入学当時は四回生が神谷さん、稲邑さん、森下さん達、三回生が田中さん達、二回生が中村さん、西田さん、三家さん達だった。一回生では井口君が入つた。先輩達が卒業したり手を引いてきて自治会を担う人がいなくなつた。井口君は理論家であるが行動をするタイプではない。仕方がないので私が自治会委員長になることにした。その後、吉実君、漆崎君らも入つた。

ガリ切り・スッシングなど謄写版で印刷をする技術もうまくなつた。謄写版の左端をバネで引っかけゴムで引っ張つておいて右手でローラーを押してその後ゆるめるとシルク部分があがつて行き、左手の親指に指サックをはめていてわら半紙を送る、のである。六四年十月、佐世保にアメリカの原子力潜水艦が入港した。原潜に反対する集会もやつた。京都までみんなデモに行つた。原子力潜水艦反対のデモは彦根でも行つた。ベトナム戦争が始まつた、大学管理法



1963年12月 ポポロ座事件判決への抗議デモ

が提案された、など事件が起こるたびに自治会はデモを組織した。

我々は主要なポイントではジグザグデモをやったが民青系は静かなデモをやった。自治会内で意見が対立してもそれぞれ良いようにやる、と仲良くやっていた。

三回生になるとゼミを受けるのであるが希望のゼミに入れない問題が起きた。特定のゼミに希望者が集中したのである。「ゼミ問題」として取り上げた。結局希望を取り直し調整をしてこの問題は決着を見た。

生協組織部をやる人間がいなくなった。生協自体の意識的基礎を作らなくてはいけないのであるが、これもやり手がいなくて困り結局、私がやることにした。

大学祭がピンチだった。誰もやる人間がない。仕方がなく、フェスティバルでも何でも良いからやろうじゃないか、と腰を上げた。原君を実行委員長にした。奥村君ら新聞会のメンバーを誘い込んだ。ポスターには海野君のお兄さんの版画をもらった。

講演には小田 実氏を依頼した。映画会は大島渚監督の「日本の夜と霧」とした。時の自治



1964年大学祭用のポスター原紙

会（宮地君が委員長）は岩田弘氏を呼んだ。新聞会は同志社大学の和田洋一氏を招いて「現代の日本における新聞の役割」というシンポジウムを開いた。その他、いろいろの組織も協力をしてくれたので立派な大学祭になった。陵水新聞が「自悩する大学祭」と評した。

大学四回生になってからはデモにもあまり参加しないで写真を撮っていた。なじみ（？）の刑事が「今日は写真班か」なんて聞いてきた。ベトナム戦争に反対するデモで伊藤君が逮捕された。なぜか私がマイクを持って彦根警察署の前で「学友を帰せ」とがなり立て、三五〇人の学生が集まって座り込んだ（全学生の約半分）。寮から毛布、生協からにぎりめしが届き夜の十二時まで頑張った。初めての逮捕者であったのでどうして良いかわからなかった。小倉先生は警察といろいろ交渉してくれたようだ。何とか釈放になった。

大学の四年間は、教科書などの勉強もそれなりにしたが多くの経験を通して、紙に書いてあるもの以上の勉強ができたと思う。



1964年10月29日 原潜寄
港反対デモ 機動隊が初出動



1965年6月9日 ベトナム戦
争反対デモ。伊藤君の検挙で
抗議のフランスデモになった。



伊藤君の検挙に抗議して警察署前に350名が座り込む。寮から毛布、生協からにぎりめしが届き、夜中の12時まで頑張った。

加藤ゼミ第一期生の思い出



川崎

昊(大14)

「光陰矢の如し」と言われるように月日の経つのは本当に早いものです。今となつては半世紀も前の話になりますが、つい先日のように蘇ります。私は長浜出身だったので滋賀大学に入學しても大きな環境の変化はなく、父は戦死し母一人飯米百姓をしていたので学費を助けるためアルバイトばかりしていました。

三回生になるとゼミナールが始まり、興味のある経営学ゼミを探していると、加藤勝康先生が昭和三十九年四月より経営学ゼミを開講されることを知りました。ゼミ生の募集が始まったから加藤ゼミは一番の人気で三十人以上の応募があり選考されることになりました。確か、論文と面接があつて十七人に絞られました。幸い私はその夢が叶い加藤ゼミの一員に入れて頂くことができました。

先ず初めに加藤ゼミでは山本安次郎先生の「経営学本質論」の輪読から始まりました。毎週

一回のゼミナールには授業に出ない学生も必ず集まりました。加藤ゼミがスタートして二ヶ月目に入り、五月二十一日～二十四日(四日間)の美ヶ原ゼミ合宿は彦根の学び舎を飛び出して開放的な美ヶ原の環境の中、新鮮な気持ちで学習できたことは勿論ですが、勉強会以上にゼミ生間の連帯感・強い絆を築くことができた意義は大きかったと思います。そして強い絆で結ばれた加藤ゼミの合言葉は「Cool Head・But Warm Heart」の常々実践です。

山本先生の「経営学本質論」「経営管理論」や山本・加藤両先生が研究されていたC.I.バーナードの「The Functions of the Executive」、田杉競監訳『経営者の役割』などを加藤ゼミで読破しました。これらのバーナード理論の書籍は非常に難解な奥の深い書物であったことを記憶しています。私はこのバーナードの原著の冒頭にある言葉に深い感銘を受けました。それは次の言葉です。私はこ



美ヶ原ゼミ合宿(昭和39年5月21～24日)
於：美ヶ原ヒュッテ

「TO MY FATHER」

At a crisis in my youth . he taught me the wisdom of choice : 『To try and fail is at least to learn ; to fail to try is to suffer the inestimable loss of what might have been.』

「父に捧ぐ」

若い頃直面したある危機に、父は次のごとく
選択の知恵（決行の賢明さ）を教えてくださいました。

『やってみれば、失敗しても何か少しは得るところがあるが、試もしないのはうまくいったかもしれない測り知れない可能性（成果）をもみすみす逃すものだ』

私はこの言葉に深く感銘し、生涯の座右の銘として常に前向きに生きてきました。縁あって平成十八年から五年間母校滋賀大のキャリア教育に携わることになりました。その折には学生にバーナードのこ



加藤ゼミ同窓会（平成 25 年 4 月 7～8 日）
於：桜満開の彦根城バックにキャッスルホテル前

の言葉を紹介し、プラス思考の実践の重要性と夢の実現を教示してきました。今後も肝に銘じて生きていくつもりです。

加藤先生は彦根郊外の岡町にお住みでしたので、我々学生もよくお邪魔し、特に就職活動の時は先生のご自宅にゼミ生が押しかけ、奥様にも大変お世話になりました。先生は現在既に米寿を過ぎておられますが毎年開催される加藤ゼミ同窓会には出席され矍鑠としたお姿と明るいお話しぶりには感心させられます。何時もお会いすると「君たちは若いのだから頑張らねばダメだよ！」と発破をかけられている古稀の我々ゼミ生にとって、まだまだ人生半ばだと反省させられ、大いに元気とエネルギーを頂いている次第です。先生の益々のご活躍とご健康を心よりお祈りして筆を擱きたいと思えます。

寮と琵琶湖と彦根城



原 綱 宗(大14)

昭和37年(1962年)3月も終わりに近い日、偲聖寮に入った。当時の偲聖寮は、学内にあり、木造の3棟が廊下で連結されていて、別棟で食堂が用意されていた。東寮、中寮、西寮と称していた。私は、中寮1階2号室で同室は、中島得三君であった。中寮の建物は、2階建てで、各階10室あり、1室は、6畳の畳敷きで、2名収容であった。荷物を部屋に収めて、窓に腰かけ、タバコをくゆらしていると中島君が到着した。彼は、神戸で鍛えられた非常にダンディな青年で、早速彦根駅前のレストランに繰り出した。そこで来客の見知らぬ若い女性に声をかけて友達になろうとしたのには、びっくりした。新入寮生の歓迎会が寮に隣接していた食堂で開催され、それまであまり酒を飲んだことがなかったのに、ドンブリで日本酒を飲まされ二日酔いになった思い出がある。各クラブ等から入部の勧誘が来て、連日勧誘に悩まされた。自治会と剣道部から特に勧誘を受けた。剣道は経験がなかったが、面白そうと思い入部した。

剣道部の主将は、吉次庸祐先輩（大11）であった。長身、細身で上段の構えが得意な4段の剣士であった。

3回生からは、剣道部を退部し新聞部に移籍した。当時空手部の主将を務めていた山本重男先輩（大13回）から体育会設立の相談を受けたりした。学生運動にも参加し、彦根市内をデモ行進したり、彦根警察に逮捕された後輩の釈放を求めて警察署前で座り込みをしたりした思い出がある。京都にも遠征して、当時京都府学連の委員長だった塩見孝也氏（赤軍派議長）の演説を聞いた。確か立命館大学での総括集会で学生運動の武装化を叫び、その後の佐世保でのエンタープライズ入港反対運動から、学生がヘルメットに角棒スタイルになったと記憶している。

彦根は、お城と琵琶湖の町として思い出深い。寮の仲間たちと、また剣道部の稽古等でよく彦根城にのぼった。特に剣道部の寒稽古では、素足で雪を踏みしめ駆け足で彦根城に上ったのが印象深い。琵琶湖畔には、これまた剣道部の発声練習でよく行った。琵琶湖に向かって大音



愚聖寮の友人 後列左より 花井寿一、中島得三
前列左より 松本康孝、小早啓之、原綱宗

声で発声したつもりでも、まさしく蚊の泣き声にしか聞こえなかった。

娯楽と言えば、麻雀とパチンコぐらい。麻雀は、1回生の寮生活で覚え、卒業するまで頑張ったが、回数なりにうまくならなかった。パチンコも一時のめり込んだ時期があったが、いつも行くパチンコ店で親切にしてくれたのが、やくざの下っ端と忠告してくれる人がいて、足が遠のいてしまった。

3回生になってゼミの選択。マル経のゼミとして、松尾博ゼミ、有田正三ゼミがあった。社会統計学の有田ゼミに入った。全然勉強のできないゼミ生で、社会統計学もある程度しか理解せず、マルクス経済学もほとんど理解せず卒業してしまった。しかし有田ゼミ、松尾ゼミ、そして寮生活をとにした仲間達とは、今も親交を重ねている。有田ゼミ松尾ゼミの有志とは、毎年1泊旅行を楽しんでおり、寮を中心とした仲間とは、ウォーキングを毎月1回楽しんでいる。



彦根市内 デモ行進

大学留年



黒田悦司(大15)

大学に入学したのが昭和三十七年、卒業が昭和四十二年、在学五年、一年留年しました。留年の大きな理由は人文地理で落ちたのですが、私が生意気な生徒だったことが遠因でした。二年から三年への進級が遅れました。その結果生意気だった私の鼻が少しは折れて、留年したお蔭でその分いろいろな経過を積むことができました。

グリーククラブ

入学式の前日、大学を訪れ講堂で練習しているグリーククラブを訪ねて、入部をお願いしました。大学に入ったら必ずグリーククラブに入ろうと決めていたからです。私の大学生活の一つはグリーククラブが大きな比重を占めています。留年を知ったのも、実は大阪で宗教音楽の指揮者(外国人)の講習会に参加している最中だったと思います。友人からの電話で、急ぎ彦根に

帰った記憶があります。

私の五年にわたるグリーククラブ生活で一番の印象に残っていることは正指揮者の三年生とき「山に祈る」という組曲を演奏したことでした。夏休みに北大山岳部のキャプテンだった高校の友人を訪ね、その年の冬、大雪山の雪崩で遭難した北大山岳部の友人を彼が探索している間、彼の替わりに恵庭寮に居候したことがあります。私の頭の中では、北大山岳部の遭難と合唱組曲「山に祈る」（上智大学の遭難がテーマ）がオーバーラップしていました。演奏した合唱組曲は今でもCD化して聞いています。

ロシア文学・江竜先生

二つ目は、ロシア文学の江竜龍太郎先生との出逢いです。美術部立ち上げに関わって、以来美術部顧問の先生とのお付き合いが始まり、学生運動に割り切れない私が「ドストエフスキー」に傾倒しロシア文学をかじりはじめた時に出逢い、その後、先生の勧めもあって大学の学生論文募集に二度応募しましたが、いずれも二等賞でした。「ドストエフスキー研究」が縁で、卒業後日本ロシア文学会に入って、いろいろな先生とも知り合いになり、時に上京された先生行きつけの田端の飲み屋でご馳走になりました。この女将は文学に関心があり、詩人や美術の好きな人達が顔を出していました。今でも付き合いがあります。

先生に結婚の仲人もしていただきました。長男の名前に倫太郎、次男に竜とつけたのも先生に対しての尊崇の思いからです。彦根の妻の実家に帰ったときには、先生にお会いするのが楽しみでした。先生から軽井沢やモスクワから絵はがきをいただきました。私以外にも若い学生達を丁寧に応援し指導してくださった先生でした。

詩集出版

クラブで下宿も同じだった平本勝章君とは共に文学に親しみ、在学中私は「遺産の検証」彼は「土器の出る庭」という詩集を出版しました。これも江竜先生にお世話になり、互いの名字から一字ずつとって「黒平洞」という出版社を擬して出版しました。経費を捻出するのに京都のクラブでアルバイトをしてお金を稼ぎました。そして卒業するときにも共著で「訴人の戸惑い」という書名で出版、私はその後結婚するときに記念として「流水の女」という書名で都合三冊出版しました。

会社勤務と独立創業

卒業後音楽関係の日本コロムビアに入って五十歳まで勤務、その後企業理念を制定して、独立創業、今は一般社団法人・進化経営学院も主宰し、次世代の経営者を育てています。滋賀大

学の後輩に先輩達が提供する講座の「リーダーシップ」で「人生二度なし」「鶏口となるも牛後となる勿れ」というテーマで話をさせていただきました。

古稀を迎えてからの人生

二十年前から住んでいるところは、霞ヶ浦の近くの林の中です。学生時代は琵琶湖の傍。今は霞ヶ浦の傍で、若い世代の育成。緑に囲まれて自然の中で彦根時代と同じ様に、朝な夕なに湖を見ながら、畑も作り木を植え、森を作ろうと少しずつ進めています。今年が古稀の記念に富士登山を若い人たちを含めて七名で登りました。暮れには妻と共にヒマラヤ4000米級をトレッキングしようと、出張中も毎日アンクルウエイトをつけて歩いています。さて「これからどう死ぬか即ちどう生きるか」を探究しながら、大学創立九〇周年に見做って九〇歳まで生きますか。こうして振り返ると彦根で五年の大学生活をしたことが私の人生を豊かにしてくれました。彦根は私の生命の火を灯してくれたところですよ。

剣道そして我が青春の町彦根

人生ままならぬもよし



杉 本 佳 彦 (大15)

生まれながらにして、身体が小さく病弱にして内気な男が、高商剣道界最強豪とその名を轟かせ、大学になっても昭和31年、全日本学生剣道大会制覇を成し遂げた滋賀大学を志願入学即入部した。弱者の故、強くなりたい気持ちが一層強く、高一から剣道を始めたが暫くして結核と誤診され、已むなく剣道活動を中断。剣道への思いはいよいよ鮮烈になった。

新入部員は7人、その中にIQ180の男がいた。後の相棒名マナージャー青木靖武君である。入部早々彼の下宿に同輩全員呼ばれ、宮本武蔵の五輪書の講義を受けた。中々のものがあった。だが剣道は理法を学び実戦に生かすものだが、天は二物を与えず、故に名マナージャーとして見事に辣腕を振るう事になった。

入部早々、強くなりた一心で、毎日城山に駆け上がった。時には佐和山城址にも駆け上つ

た。

一年先輩から「酒と剣道の強いのは比例する」と言われ、紹介された居酒屋にその日に行った。

一回生では、稽古に励めど学内の試合で負け続け、更に稽古に励んだ。休みに帰郷すれば又、稽古に励んだ。二回生になり、当時滋賀県高校剣道界最強の近江八幡商業高校との対抗戦に初めて選手に。2戦2勝した。その後一年間、対外試合で負けなし。運よく全日本学生剣道大会団体の選手にも選ばれ負けなかった。だが、三回生になって勝てなくなった。必死さの欠如と気付いた。主将になり、剣道の鬼になった。部員の反発覚悟で、1時間半の稽古を2時間にした。昭和31年の全国制覇の立役者高木巖先輩が毎週日曜日に稽古に来てくれた。故に日



昭和42年1月 雪降る彦根城にて



昭和41年春 旧剣道場にて

曜日も稽古日に。奇跡的に25人の部員全員（経済学部）が付いて来てくれた。猛稽古に継ぐ猛稽古で皆々驚くほど強くなった。

自分も冬春夏休みは名古屋の剣道稽古会に、当時関西学生剣道界最強の関学の夏合宿に、又大阪府警の稽古にも単身参加した。

激烈極まる夏の武生合宿では、ぶっ倒れる部員続出する程の猛稽古に皆耐えた。信じ難いが福井県警との合同稽古や試合では互角に。福井県の高校連合軍との試合では蹴散らした。そのまま近畿国立大学大会では、三回生が大活躍。当時強かった大阪大、神戸大を撃破、決勝戦

京都大には、大激戦僅差で負けたが準優勝。近体スポーツに『滋賀大健闘す。滋賀大のねばりに見ごたえのある大会であった』との活字が躍った。今年の滋賀大は強いと囁かれ始めた。いよいよ関西学生剣道大会に。朝日新聞等が、試合予想で滋賀大有力ダークホースと書いた。全国大会出場は確実と勇躍臨んだ大会が、予想もなかった一回戦負け。茫然自失。調整する事なしに直前まで更なる猛稽古、故に疲れがピーク、完全に調子を落としてしまっていた。すべ



昭和39年9月 二回生の同級生
前列左から 末川、小田原、杉本
後列左から 安立、青木、山口

ての責任は主将の自分である。相棒の青木君と湖畔で、「出来ませんが、もう一年あったら最強チームに仕上げられたのに」と涙を流し合った。故に今も自分の中に関西大会はまだ終わっていないと思っっている。後に監督8年、剣友会々長を11年引き受けた所以である。

松下電工に入社し剣道部創設を要請された。3年後に目標に掲げた大阪実業団剣道大会制覇。その後、仕事で剣道部を離れたが、全日本実業団剣道大会に2度優勝の最強チームになった。その礎を築かれたのが、実に恩師滋賀大剣道部師範森弘先生である。松下電工師範を引き受けられ、即近畿実業団剣道大会制覇。当時の副社長と子供のように喜ばれた。関西学生剣道大会には負けたが、実業団で少しは恩師に恩返しが出来たかなと思った。

今も思う、この弱者が松下電工照明の斬り込み隊長で頑張れたのは正しく滋賀大剣道部師範・先輩・同輩のお陰であり、彦根の町のお陰である。森弘師範は品格溢れる剣道家、当時の上級生は兎に角厳しかった。



昭和41年剣道部追い出しコンパ(剣道部卒業式)

最前列右より2人目剣道部師範

森弘先生

最前列右より3人目剣道部長

森順次教授

日々の稽古では、熱があらうと身体が痛かろうと「ど根性だ」と休みは一切認めてくれなかった。稽古は稀だが試合には応援に来てくれる先輩方々も、負けたらほろくそ、勝っても勝ち方がどうのと辛辣の極み、褒めてくれた事はまずなかった。これも愛の鞭と鬼先輩方々にはいつもありがたく思った。今も心から思っている。逞しく育った後輩も嬉しい限りに思った。

市場街と袋町の居酒屋には、大変お世話になった。下宿で飲むより安くしてくれた。後に女将達曰く「儲からなかったが、学生らしい学生が沢山来てくれた。本当に楽しかった」と話してくれた。中には、卒業祝いが飲み代のツケの棒引きと云う剛毅な女将もいたようだ。学生を大事にする土地柄は、彦根高商からのものとも聞いた。

50年前、彦根に旅立つ時、進んだ叔母に「湖畔の乙女を射止めて来なさい」と言われた。無縁だった。剣道一筋の故か、唯持てなかっただけなのか。

剣道漬けの彦根の四年間悔しく思う事多々あれど、最高の充実した青春を過ごせた。「人生ままならぬもよし」と悟った。今も地元大学の教壇に立ち剣道文化論を説いている。地元高校剣道部の師範も務めている。青春真っ只中、剣道と彦根の町に、尊縁と心より感謝している。

今年も男女ともに強い、何とか全日本大会に出場してくれる事を心から期待している。素敵な伝統が末永く続く事、切に祈っている。

わが青春の彦根



棚橋

猛(大15)

1、入試合格と両親入学式参列

昭和38年4月4日頃入学式に出席するために父と母は東海道線岐阜駅から彦根駅に来てくれたので迎えに行った記憶があります。校門を入ると向かって右手に現在も風格を残して立っている講堂で新入生186名と多数の父兄出席の上で開催されました。私の入学式に両親が、出席してくれたこの時から「わが青春の彦根」が始まった。

入学時は、木造の偲聖寮は平屋東寮、2階建中寮、2階建西寮があり、私は東寮の押入れ付約6畳敷き部屋で吉田勇夫君と一緒に共同生活を始めました。

東寮にいた同期には土井能充、佐藤勝朗、藤田義晴、小原康彦、大南明博、平本勝章、吉田勇夫、棚橋猛、三好利秋、柘野茂樹、室殿智秀、関秀生、宮地敏光、服部憲昌の14名で1年先輩には黒田悦司、小早啓之、中村弘、野末武伸氏ら4名がいた。

1年先輩の黒田悦司、小早啓之氏らが歓迎コンパを開いてくれ学生生活のスタートの洗礼をしてくれました。最初の頃は、皆、真面目に授業を受けに行っていました。約1ヶ月過ぎてくると少し要領がわかり、出欠を取らない授業や興味のあまりない授業は、さぼるようになってと記憶している。卒業後も、元寮生は、仲良くやっている。

2、厳しい剣道部入部

私は、中学時代はプラスチック部に所属し、高校ではクラブに入っていなかったので大学は、自分を精神的に鍛えるために剣道部に入った。ヨット部もよいと思ったが、カナヅチなどで無理だった。剣道部は、かつて全国大会で優勝しているので土曜日などは先輩諸氏が剣道場にきて熱心に指導に来ていた。同年に、杉本佳彦、安立祥治、末川洋明、青木靖武、小田原弘和、山口正敏らがいた。当時の部長は、真田啓志氏で、次の部長は安藤攻氏、その次は澤田茂雄氏であった。

当時の大学剣道部師範は、大阪機動隊の剣道師範森弘先生でしたので春には大阪城公園内の修道館にて機動隊特練生と一緒に稽古させて頂いて宿泊所は近所の労働会館と決まっていた。夏休み期間は、名古屋市にある東レ愛知工場内の道場で稽古をさせてもらい、その直後には、大阪城公園内の修道館での合宿生活と続いた。

他大学の剣道部との定期戦には甲南大、立命大、中京大等に出かけた記憶がある。立命大では、我剣道部が約20名位に対して立命大は100名位で道場が一杯だった記憶があります。中京大で私と同じくらいの小柄な人と剣道練習をしたのですが、身のこなしが、きびきびして何度も打ち込まれましたが、後から、杉本君から聞くことには、その人は中京大の恵土師範で、学生時代には全国大学生個人剣道大会で2度優勝されていることを聞き、驚きこのような経験をしたことは光栄に思っている。

同期では、杉本君が、剣道部のキャプテンとなった。私は、3年の初めに痔になり、町にあった病院に手術で入院し、退院後、剣道部を二段取得しただけで残念ながら退部した。

3、美術部復活と江竜龍太郎先生との貴重な思い出

元来、私は、絵画が好きだったので入学当時から、同好会的なグループを作っており、学内の食堂で小さな展覧会を開催していた。昭和39年初夏には、美術部として銀座に有った元丸菱デパートのビル3階を借りて展覧会を開催したり商店街の七夕祭コンペにも参加した。

当時学内で、油絵を描いておられたのは江竜先生と小倉先生でした。美術部設立のため江竜先生には、経済的支援をいただき生徒会のボックスの隣を部室として作るため大工さんを雇い間仕切りの工事をした。美術部は、高商時代にはあり、宇野宗佑氏もいたようですが、私が、

入学した昭和38年には、廃部になっていた。

市民油絵愛好団体の活動で西小学校で裸婦を描く機会に誘われて部員3名位で参加したが、初めてのことであったし女性の裸体は美しかったが最初は、目のやり場に困った記憶があり、その絵は実家の岐阜に今でも残っている。

美術部の顧問には、江竜龍太郎先生(ロシア語)にお願いし、メンバーには、棚橋猛、黒田悦司、小原康彦、藤田義晴、前田憲治、杉山和夫、藤井聡、小野晶生、田中和夫らがいたと記憶している。昭和38年6月江竜先生は、滋賀大学経済短大講師になっておられ、私を含めて多くの学生に対していろいろ相談に乗って戴いていた。

江竜先生は、東京外語学校出身でロシア文学の米川正夫の弟子だったので、私らの学生に対して、ドストエフスキー、ツルゲーネフ等のロシア文学や青木繁、安井曾太郎、藤田嗣治、里見勝蔵等の絵画の世界の話をしていただき大変貴重な経験をしたことは、良き学生生活の思い出としては、誇らしく思っている。昭和51年5月腎癌の手術を長浜市民病院で受けられ、5年後、癌の転移で昭和56年10月12日彦根市民病院で亡くなられた。最愛の奥様清子さんは、昭和54年10月12日に亡くなっておられ、先生は、その2年後の同じ10月12日に死去されたことは偶然ではないと感じていた。私も、自宅の御葬儀に駆け付けた記憶がある。

4、「江竜龍太郎教授遺作集」の発行

その3年後、昭和59年には江竜先生にお世話になった元部員の諸氏や江竜美子氏（長女）、吉田修先生、小倉栄一郎先生、江竜喜代治氏（兄）、桑田幸三先生、水沢洋一氏、川崎武司氏、貢智明氏、高橋宮子氏（江竜先生の行きつけの東京の小料理店のママ）、米川丹佳子氏（米川正夫氏の奥様）らの多くの方々からの寄付と投稿を支援いただき、「江竜龍太郎教授遺作集」を出版できたことは、故江竜御夫妻へのせめての追悼になったと思っている。この画集の出版に尽力してくれたのは藤井聡君で大変感謝している。画の世界との関わりを求め、大学を3回生の秋には去り、卒業と同時に会社務めの道を嫌い、京都市で天然酵母による発酵パン屋を開業したので私の娘を連れてその店に行ったことがある。この年、12月14日私は、会社の忘年会の帰り関西線の奈良駅のホームで落下し大怪我をしたので藤井君とはその後、会っていない。彼の近況を知らないので会いたい。卒業後も、江竜先



滋賀大学旧本館（故・江竜龍太郎教授画）

生と深く交際していたのは、学内の懸賞論文に「ドストエーフスキー研究」で応募していた日本コロンビアに勤めた黒田悦司氏であった。江竜先生は、我々学生を袋町の呑み屋に連れていってくれたが、先生とは言わないで、「ペンキ屋のおやじ」として通すように言われた記憶があり懐かしい。

5、加藤勝康先生の経営学ゼミ

私は3回生になり、加藤ゼミ志望を出したのは先生が本学に来られて2年目のことでした。ゼミ生は駅忠雄、北村正和、中井啓二、河野東作、真田佳勲、棚橋猛、中村省三、服部憲昌、別役重孝、森下昭造、吉川睦男、人見寿旦、広岡功三、吉本正克がいた。先生も健在であり、卒業後も交流している。平成二十四年十一月十一日、加藤ゼミ生が、幹事となり大阪の住友クラブで卒業45周年同期総会を盛大に開催し全国及び海外からも50名集め、二年後、彦根での再開を約した。

入学した昭和38年頃は、学生の必読書としてマルクスの資本論がもてはやされた時代背景があり、生徒会を中心に学生運動が盛んで彦根警察署の前にもデモに動員され参加した記憶があります。その頃は、共産主義思想は、輝いて素晴らしいものとの私も洗脳されていたように思います。3回生の時はドラッカーの「顧客の創造」を講読し、4回生にはバーナードの「組織

論」を講読し、山本安治郎の「経営本質論」を学んだと思います。ある時、「広告」の費用は、経済的に無駄ではないかとマルクス経済学の立場で私が述べたら、加藤先生から「広告は需要を喚起し創造するもので経済的に極めて有用な手段である」と私の考えが誤りであると指摘されたことが強く思い出され、当時の先生のご指摘が正しかったことは、その後の共産主義国家の崩壊の歴史が証明している。

ゼミの活動では、3回生では彦根の寺での外書講読やゼミ旅行で長野県美ヶ原、三重県熊野の鬼ヶ城に行った。4回生では、加藤先生が体調悪くゼミ生だけで宮崎県日南海岸、青島に行ったが、現地解散して、私は一人で鹿児島に行き桜島を南洲墓地から眺め油絵を描いていたら、内之浦から日本最初のロケット打ち上げという歴史的瞬間に立ち会った。

6、寮生活から下宿生活へ

徳聖寮は1年間限定であるが、約半年で東寮を退出し芹橋にあった下宿に入った。

中寮、西寮の2階からの放尿をした噂を聞いていた。既に、同期の空手部の和田惇君が入っていて共に2階の部屋に住んでいた。大学の食堂のおばさんの家で家主は、日露戦争の退役陸軍大佐の人で、下宿の門限のことで二人は正座させられて戦争の話や規律について説教を受けた。この下宿も約半年で退出して水泳部の土井能充君と相談して芹橋を渡って平田町の農家の

2階に1年間下宿したが、大学から遠いのでその後出た。この頃、大半の学生は、町の自転車屋で買った中古自転車で行動していた。

友人水泳部の土井君が、鐘紡の水泳場でアルバイト時間も終わり夕方、彼が琵琶湖の沖へ遠泳にいくと言ったので私はボートを一人で漕いで後からついていくと岸から約300メートル辺りで突然、アベックの乗ったモーターボートが、私のボートに水飛沫をあげ2度、3度と接近してきたので転覆しそうになり「もう、だめだ」と観念しボートにしがみついていたあの恐怖は忘れられない。小原君と藤田君が下宿していた松原に行き、初めて塞風呂に入り鉄釜の底に板がありその上に乗り体を沈めて体を温める貴重体験をした。浮板から足が、少しずれると熱かった記憶がある。平田町の下宿から大学の近くのアパートに移ったが、隣室の音がうるさいので5番目の下宿は、栄町2丁目の野口宅で同期の三好君の紹介で入った。当時、同期の柘野茂樹、南橋正己、春名惇夫、福元省三郎、澤田茂雄、小野晶生、田中和夫らがいた。貸家持ちの野口家の奥様野口和子氏には、大変、面倒を見てもらっていた。この下宿の同期の者で時々コンパを開いたが、夜陰に紛れて近所の漬物屋さんが干していた大根を失敬したことは深くお詫びします。卒業後、私も含めて元下宿生は、今も出入りしており約3年前、奥様の傘寿のお祝いに私も行きました。何時迄も彼女がお元氣であることを最後に祈念しています。

私の中藪3丁目での下宿生活



村 瀬 英 己(大15)

私が、偲聖寮での思い出深い1年間を終えて、下宿生活に入ったのは、昭和39年の3月初めの事でした。先輩から紹介戴き、大学から真南に当たる芹川の少し手前、鐘紡の工場を琵琶湖との間に挟む中藪3丁目でした。滋賀大学生が、近所にワンさと居る下宿銀座と言っても良い処でした。もつとも当時の彦根は、どの地区へ行っても同じような状況で、それほど地域と学生が、共生していたような気がしません。

矢野さんと言い、ご主人が亡くなり、上の兄さんは、山科の郵便局に勤務、下の弟さんは、一浪をして、同じ学年で大阪市大の学生で市大近くの杉本町に下宿されており、二人生活で、自分以外に3名の滋賀大生が、お世話になっていました。私は、矢野いささんが、息子の幸雄さんが、お嫁さんを貰われた時住むべく納屋を改築された隠居部屋に入るようになりました。ほかの下宿生3人は、2階で、二人が一学年上の藤田さん、横関さん、もう一人が、同学年の

馬島さんでした。自分も父親が、終戦の翌年に病死しており、母親一人に育てられた境遇であったので、母親の様に感じ、大学の学食を終えて、よく昼の時間帯いささんとNHKのひよっこりひよようたん島を見たのが、昨日の様に思い出されます。時々、お昼もご馳走になったり、お祭りの時には、一緒に下宿生全員でちらし寿司を戴き、幸雄さんが、麻雀をされると言う事で馬島さんと一緒に卓をかこむこともありました。

麻雀で思い出すのは、近くのタバコやさん兼下宿やの野口家（ご主人は、幸雄さんと同じ、全通仲間で後に国会議員：野口家には、同期の福元、棚橋さんが、下宿）の新築なった離れの「こけら落とし麻雀」でつい勝負に夢中になり、タバコで真っ新の畳を焦がして、後からいささんもしっかり絞られた事です。

又、私の部屋が納屋にあり母屋と少し壁があると言う事で、同期の仲間たちと夜の遅くまでわいわいがやがやと騒いでいたら、隣の家のお祖母ちゃんが、うるさくて寝れないと苦情を戴



いたことも有りました。

芹川が、近くに流れ、川が琵琶湖にそそぐ手前と言う事で、水も豊富で生来、魚釣りが、好きだったのだ、ある日、糸を垂れ、面白い様に釣れ、これは豊漁だと喜んでいたところ、「コラー」と大きな声がする、なんと其処は、鮎の稚魚の養殖場であったという笑えない話もありました。

お陰様で、彦根の質素でたくましい生き方、温かい人情に触れ、無事、3年間の下宿生活で大学生生活を終える事が出来ました。

人の世というのは、不思議なもので時が過ぎて、私が、名古屋本社の豊田通商に入り11年間の大阪勤務を終え、名古屋に転勤、昭和56年の年末、岐阜県可児市に住まい構えたとき、その隣の夫婦共、興和㈱で矢野家の次男坊・洋さんと同じ職場であったという偶然です。その洋さんも先日、陵水亭で長谷川先輩（中藪の下宿の北に道路を挟んだ家が実家：つい最近識る）よりお聞きし数年前亡くなったとの事、当時の矢野家の全員が、他界されたと言う事を知り、初めて矢野家の皆さんとお会いしてから約半世紀の時の流れを今更ながらに感じております。感

謝！ 合掌！！

我が友ラグビー部同期吉本氏を偲んで



吉田 勇 夫(大15)

昭和38年4月の滋賀大学経済学部入学式は憶えていないが、偲聖寮の入寮歓迎会は鮮烈に憶えています。その当時は大学の敷地内にあり、東・中・西と三つに分かれ、私は東寮に棚橋猛君と同室になりました。入寮歓迎会は寮の大広場にて、二年生の寮長や諸先輩の指示のもと、最後に大型のお椀にお酒を満々と注がれ、回し飲みを強制され最後に「これから、彦根城の天守閣までマラソンをする、走れ」の号令。途中で潰れた者は、後ろから先輩の引いてきたリヤカーで寮へ運ばれるという今では訴えられる行事でした。

その入寮式が終わるとスポーツ部の勧誘が始まり、私は高校時代に剣道部でしたが、大学では青空の下でスポーツをやりたいと思っ



たので、ボート部の誘いを振り切り、高校の先輩が多かったラグビー部に入部しました。

同期として、背が高くガンバリ屋のフォワード吉本正克君、足が速く、名ウイングの室殿智秀君（彼とは高校も同じ東海高校）、いつも控えめなスクラムハーフの林善信君の4名がいました。

吉本君はロック、バックローと持ち前の運動神経と精悍な足さばきで活躍、頭も良く、練習・試合の戦術を良く室殿君と黒板を使って激論していたのを思い出します。彼はバイトで近畿日本ツーリストの添乗員をして、豊富な話術とイケ面で女子高校生から憧れの的だったと聞いています。又、家庭教師もしており、卒業後も家族ぐるみでのお付き合いが続いていたのは吉本氏の真面目な人柄を表しているエピソードでしょう。ただ、この頃の彼は酒は強い方でなく、部のコンパ等で酒を飲むとその黒い顔がすぐ赤くなり、口を尖らしタバコをくわえ、良く激論をかわしていました。

吉本氏は卒業後、急成長中であったスーパー業界に就職、全国を幹部として駆け巡り、将来を嘱望されていたと聞



いています。

その吉本氏が、平成4年3月にわかに、47才で逝かれるとは、同期の誰もがショックを受けました。彼とは卒業後はお互いに仕事に追われ、大学卒業後20周年(昭和62年)で4名が彦根で同期会をしたのが最後でした。

吉本氏との思い出をあと二つ述べてみます。

一つは三回生(昭和40年冬)の時、全国大学ラグビー選手権近畿予選決勝戦を花園ラグビー場第一グラウンドで大阪経済大学と戦いました。二回生でロックの近藤滋男君がハーフタイムで「これに勝つと正月なしですね(地区対抗選手権出場となり)」と呟いて、ひよっとしてとも思いましたが、残念ながら準優勝でした。夢の花園では吉本氏がバックロー、私がロックで戦い、正に醍醐味を満喫、いい正月となりました。

二つ目は、これも三回生の時です。初夏の暑い日、夕方から芹川で釣った鮎をてんぶらにしてお酒を飲んでいたとき急に、吉本氏が「これから、金沢にゆこう」と言い出し、それではと五名程で彦根駅に駆け付け真夜中の普通列車に乗り込みました。金沢駅に明け方に到着、金沢城・兼六園を見学して、トンボ帰りをして午後三時からの練習には何食わぬ顔で参加した事もありました。そしてその年の夏合宿前には、林君の地元、徳島に行き、阿波踊りを初めて見物、四人で四国を電車とバスで一周、足摺岬まで足を延ばす中、吉本君はバスの車内が魚の匂

いに満ちているのに気づき、やっぱりここはいいな〜と大声で喜んでいました。

このように、吉本氏からは行動力と真摯さを教えてもらいました。

今年、経済学部ラグビー部は大学と同じく九十周年を迎え、現役とOBを交えて総勢約百五十名の盛大な総会を開きました。また大学のご協力により、グラウンドが天然芝生化になることを付記して思い出をとじさせていただきます。



全国大学ラグビー大会近畿決勝 (1965.12.4)

彦根の思い出



谷尾 清隆(大16)

一期校の入学を許されず、悶々とした気持ちで彦根の町にやって来た。偲聖寮の入寮を希望したが、抽選に洩れ、芹橋十一丁目の間借りに落着いた。入学式後、運動部の勧誘が激しさを増していった。一学年百六十余名の新入生を二十以上の運動部が奪い合うのだ。兄が慶応で「日本拳法」をやっていた影響で「空手道部」の門をたたいた。時を同じくしてW君、F君、M君、K君が入部してきた。当時の「空手道部」には専用道場は無く、剣道場を借りていた。剣道部の終了を待って、六時から練習だ。月曜から土曜日まで毎日二時間の練習。練習前には必ず、城山(彦根城)の天守閣までの裸足でのダッシュ、磯神社までのランニング。空手の基本の前に、まづ身体づくりをしつかりやらされた。高校までこれといった運動をやっていなかった。お陰で四年間たいしたケガもなく過ごすごうができた。三回生までは「空手道部経済学科」に入学したようで、空手道中心の時を過ごした。休日にも道場へ行って、剣道部の練習用

の人形を相手に組手の練習をしたものだ。

当時の滋賀大には女性是一年下に一人在学していた。全く女つ気のない大学だった。四年間、硬派を望んだわけではなかったが、硬派にならざるを得なかったのが実状だ。

三回生になり、芳谷有道先生のゼミに入らさせていただいた。十名足らずのこじんまりしたゼミだったが、芳谷先生の朴訥とした愛情溢れる授業だった。我々十六期生が芳谷先生最後のゼミ生だった。そのせいか先生も我々を孫のように思われていたのではないか。芳谷先生退官後、「芳有会」（教え子の集まり）が中心となって、長岡京市にご自宅を贈呈した。芳谷先生の人徳の為せるわざか。

三回生の時、第四代体育会委員長を仰せつかった。ラグビー部のO君に副委員長をお願いし、「近国体」の当番校として大会を成功させた。

四回生になり、就職活動を遅まきながら開始。体育会活動をやっていたお陰と芳谷先生の推薦状で、その当時レコード、ステレオの大手メーカーC社に面接のみで入社が決まっ



空手演武大会 1965. 11 組手試合中

た。

卒論は「マーケティング論」を中心に選び、締切ぎりぎりに間に合った。

卒業式は入学式と違って、充実した気分で臨むことができた。昭和四十三年卒業後、二十二年から五年毎に同期生が彦根に集まり、旧交を温めている。今年は九月に六回目、卒業四十五周年記念同期会を開催し、六十有余名の同期が集まり、前日、ゴルフ大会等を行い、有意義な二日間を過ごした。それにしても十四名の仲間が故人となったのは残念だ。五年後、卒業五十周年を今から楽しみにしている。一人も欠けることなく集まりたいものだ。

わが青春の彦根 — 旅こそ、わが稼業 —



藤田 茂生(大16)

滋賀県で生まれ滋賀県で育った私にとって、滋賀大学は高校の延長のような存在だった。行き先が彦根に変わっただけで、高校時代と変わらない時刻に家を出て、同じ列車に乗った。下宿するには近すぎたし、敢えてそんな面倒なことをする気も起こらなかった。

しかし、大学の生活にも慣れてくると、単に通学するだけの毎日では変化もないし、面白くない。何か外へ出るような機会はないだろうか、と思うようになった。

私は、中学時代から列車の時刻表をめくりながら、行ったことのない地方や風景に思いを馳せるのが好きだった。実際の旅はできなかったが、空想の旅はいくらでもできた。

大学に入って時間と休みは与えられた。そこで、最初にアクションを起こしたのは、部活動として「ユースホステル部」に入部したことだった。ここでは、主にユースホステルという当
時人気の若者向きの宿泊施設を利用しての旅に出た。よく活動する部員は十名ほどだったが、

主に近畿から関東、東北の各地を巡り歩いた。海のない滋賀県人の私には海岸の景勝地が気に入った。特に半島の岬の先端にある灯台をよく訪れた。部員の中には「東大コンプレックス」の者も多かったからか、灯台をいくつも征服した。宿舎では夕食後に全国からの同宿者が集って、ミーティングという話合いや論争をしたり、ゲームに興じたこともあった。「来たときよりも美しく」という帰り際の清掃や後始末の実践は、いまだに忘れていない。

この部活は、私の趣味に合致していたし楽しかったが、旅に出るには軍資金がいる。

そのとき、旅と稼ぎが同時に進行するバイトがあるのを知った。それが近ツいの添乗員であった。採用が決まると早速修学旅行の添乗である。学校の規模にもよるが、正社員一名に滋賀大生のバイト二名というチーム編成が多かった。中学校の場合、当時は修学旅行専用列車「希望号」に乗って熱海で下車し、観光バスを連ねて箱根に向かう。ホテル小湧園での宿泊が多かった。二日目は箱根を下りて東京に入り都内見物のあと駿河台ホテルをよく使った。三日目も朝から都内を巡り、午後の列車で帰途に着くか、日光・中禅寺湖でもう一泊する学校もあった。高校の場合は、九州方面となって日数も多くなる。仕事はそれなりにきついが、観光とホテルに、三食付き(時にはお銚子も)で日当ありとなれば、まさに趣味と実益が完全に一致している。特に春と秋のシーズンは忙しかった。帰ってきた翌日にまた出発したこともあったし、遠方の学校の場合は前日に宿直室で先生方と前泊したこともあった。正社員にもいろん

な人がいて最後まで憂鬱な旅もあったが、滋賀大生のバイトだけで編成されたときなどは、夜に後樂園まで遊びに出たこともあった。

旅行には交通機関の故障もあれば、体調を崩した生徒たちへの対応など予期しないトラブルも多い。客商売としての応接の仕方、解決方法など、実社会での応用を学んだ。また、学校に帰着したとき、迎えの保護者に生徒が発する「楽しかった」という声に、無上の達成感を覚えたものだ。超多忙な日の連続であったが、この添乗員バイトはその後の貴重な人生経験となった。ずっとあとで取得の「旅行業務取扱主任者」資格は使うことのないまま埃を被っているが、時刻表だけはいまでも私の大切な友であることに変わりはない。

我が青春の彦根



山内善朗(大16)

1968年(昭和43年)の卒業からすでに45年たった今、青春の4年間を過ごした彦根の学生時代を改めて思い出すとき多くの感慨が次々と巡ってきました。

特に4年間の剣道部での稽古を通して礼儀・精神力・体力を磨き生涯の友を得たことは何物にも代えがたい宝物と今でも感謝しています。真夏の福井県武生での激しい稽古で体が動かなくなったこと、大阪府警機動隊との稽古で疲れ切り足を引きずりながら帰途についたこと、真冬の寒稽古などなど数えきれない思い出です。一方、合宿稽古の後のうれしい食事など楽しかったことも多くありました。

入学して最初の住居は大学構内の偲聖寮！西寮上でした。1年間だけでしたが6畳一間に2人暮らし、2人が布団を敷けば部屋は足の踏み場がないほどで何も置けないような状態だったと記憶しています。それでも2回生の先輩たちや同期の友人たちと毎晩酒を酌み交わしていま

した。腹が減れば夜中でも校門を出て右に回ればパン屋があり端^{ひだり}パンを買えた思い出です。

剣道の竹刀が竹なので、同じく竹でできた尺八を奏するのが好きで尺八部にも所属しておりました。夜になると、たまには和服に下駄ばき、木刀と尺八を携えて彦根城に上り素振りと尺八を奏でたこともいまでは懐かしい思い出になりました。

寮生活は1年だけでその後、正後寺、本町2か所と約1年ごとに下宿を移動しそれぞれの家での楽しい思い出の生活を過ごしました。

正後寺では彦根剣道連盟の高田先生のお宅で二人の息子さんの家庭教師を受け持つ代わりに下宿代、食事代フリーのこれまたうれしい生活でした。本町では下宿を管理されていた隣家の樋口さんには頻繁に食事に呼んでいただき二人の娘さんにも大変親切に接していただき感謝感謝の1年でした。最後の下宿ではすでに四回生になっており受ける授業もほとんどなく剣道に尺八に励んだ1年でした。

というわけで勉強をやった思い出は試験の時以外ほとんどなく、当時どうだったかなと真剣に思い出そうとしてもどうしても出てこないのはなぜかなと自問自答している次第です。

我々大学16回卒同期は卒業20年以降全体の同期会を5年毎に開催しており関東、名古屋、関西ではそれぞれ地区の同期会で集まり親睦を重ねていますが、彦根で学び暮らした4年間のおかげでいまだにこのような関係が持てる幸せを感謝している次第です。また、陵水会兵庫支部

に1982年以來所属し、幹事会と年一回の総会には欠かさず参加させていただいて諸先輩の皆さんにはいろいろとお世話になり、多くの後輩の皆さんたちとの交流を重ねることもやはり彦根で過ごしたおかげで時空を超えた縁・つながりを改めて実感している次第です。

以上思い出は尽きません。

彦根に感謝

松村 禧一（大17）

早朝の受験列車は満員で、あちこちに暗い顔の予備校で見た事のある受験生が見受けられた。一期校に落ち競争倍率―十四・五倍になる二期校に戦場は変わった処だ。受験会場は彦根東高で、ポットンポットンと空席が有りそれでもミスは許されない試験だった。

幸い合格の通知を受け、下宿を探し居を構えたものの、五月位までは「都落ち」の何とも云えない敗残感を持ったのも小生だけでは無かったはずだ。寮でまた受験勉強をしている人も居たし、何となく二期校特有の雰囲気は漂っていた。しかし住めば都とはよく云ったもので日本の各地から来た同級生と段々と親しくなり、酒も酌交わす様になると次第次第に彦根の街が馴染んで来て、まるで昔から住んでいる町に思えて来たものだ。

下宿に四・五人集まり、先輩が鶏を一羽盗んで来て見事に捌き近所の畑にネギを取りに走り、深夜のスキヤキパーティと相成ったり、ある時は友人の下宿に七・八人が集まり、一升瓶を何本も転がし、ビールは高いからサントリースレッド（当時五百円）をコークで割って、一人

日本酒で換算して一升五合位飲んだと思うが、悪酔は何時もの事で翌日の第一講の哲学の授業には皆が揃って出講したものだ。限りなき青春の思い出、今思い出しても一日中語り尽くせる程有ると思う。

今、卒業以来四十五年位になるが、あの時の仲間から一人は南京で客死し、病に倒れた者もおりますが、毎年十人位は京都に集まり三星の料亭や、当時から憧れであった八日市の招福楼に伺ったりして小さな贅沢を味わっていますし、また、ゴルフをする者はこれも八人程は京都から三重の方へ一泊2Rの愉しい遠征ゴルフを続けております。気の合った昔からの仲間達と束の間ではありますが贅沢な至福の時間を頂いております。感謝感謝・感謝しかありません。やはり精神的なインフラが彦根を通じてほぼ同じで有ると云うのは非常に楽な事だと思っております。人生九割は苦であると云いますが、考え方で九割の苦を楽にする事も出来ると思います。有難い友人、私の財産である友人達に本当に感謝しております。

これからも八十・九十になるまで頑張るつもりでおりますので何卒宜しくお願い申し上げます。

琵琶湖周遊徒歩の旅



昭和四十三年の三月二十七日から二十九日にかけて琵琶湖を歩いて周遊しました。

二回生の春休み。バスケットボール部の合宿が終わったあと、一回生の川村君(旭丘高)と藤原君(北野高)と三人で突然に決めて翌朝に出かけました。

米と飯盒と箸、サンマやマグロの缶詰、日清のチキンラーメンだったかこの年売出した明星の出前一丁だったか、兎に角、下着や洗面道具と一緒に、三人のナップサック一杯に荷物ねじ込んだので出発でした。

二十七日早朝、快晴。松原の湖岸を北上し、昼前には長浜



海津大崎の浜辺にて、飯盒で食事の私と川村君

伊藤

晃(大18)

を無事に通過。しかしその後は、湖岸に沿って歩こうということでは浜辺を歩き続けたら、水軍の砦のような石垣がある雑木林に迷い込み、やっとの思いで木ノ本の街に到着した時には夜八時を過ぎていました。

ユースホテルで宿泊を断られ、街はずれの鄙びた食堂兼旅館に頼み込んでようやく泊めてもらいました。

私のアルバムには、素泊り四百円だったと書いてありません。下宿代が月三千円だったと記憶していますから、決して安い宿泊代で無かったと思います。

とても美しい姉妹がいたとも書いてありますから、化かされたのかもしれませんが、姉妹のことは全く記憶に残っていないのです。

翌二十八日は歩いて残雪でぬかるむ賤ヶ岳に登った(ケールカーは四月一日から)あと、海津大崎で飯盒飯とラーメンで昼食を摂っている。その後は、今津・高島を抜け北饗庭まで歩いている。相当な脚力だったようです。しかし、その晩も色々あって、お寺の御堂か離れかで爆睡したのを覚えて



賤ヶ岳山頂より余呉湖を望む
(水上勉の小説「湖の琴」の舞台となった湖)

います。

翌二十九日も快晴。しかしこの日は近江舞子まで電車に乗っています。青柳浜というところでまた飯盒昼食をしたあとまた電車に乗っていますから、この日から徒歩はギブアップしたようです。

結局、琵琶湖大橋の傍にあった遊園地や浮御堂で騒いだ後、電車で、その日のうちに彦根に帰ってきました。

短い旅行でしたが、初めの二日はトラブル続きで大変でした。冬の間中着ていた汚れたジャンパーと古い靴とくたびれた作業帽の私や、無計画でリスクだらけでも大笑いする三人の写真のなかに、青春の無鉄砲さや充実感を感じます。一番印象深い彦根の青春の思い出です。

大学生活はバスケット部の活動がすべての毎日でしたが、人生や愛とかについて朝まで語り尽くしたことや一月と二月はテスト勉強に集中したことな



昭和 43 年 4 月 16 日
大学構内の満開の桜並木にて

ども思い出します。

優しいおじさんおばさんがいた池州町の下宿、芹川の鮎梁、晩飯に通った「花房」と「すずめ」、いつもの古着屋、長浜曳山まつりや彦根商店街チンドン屋のアルバイト、彦根城で出会った「夕笛」の撮影での船木一夫と松原千恵子、祇園平八での集団無銭飲食事件、等々すべてが私の社会への旅立ちの糧であったし、走馬灯のように駆け巡る大切な思い出です。

周遊の旅のあとはずぐ三回生。大学構内の桜並木が満開。学生生活の充実を実感し、滋賀経のプライドを持ち始めていました。

そして私の彦根の青春時代は、日本経済が世界を席卷した高度成長期にまさに入ろうとしていた時代でもありました。

陵水ボート戦後復興の秘話



北 居 和 夫(大18)

(陵水艇友会会長)

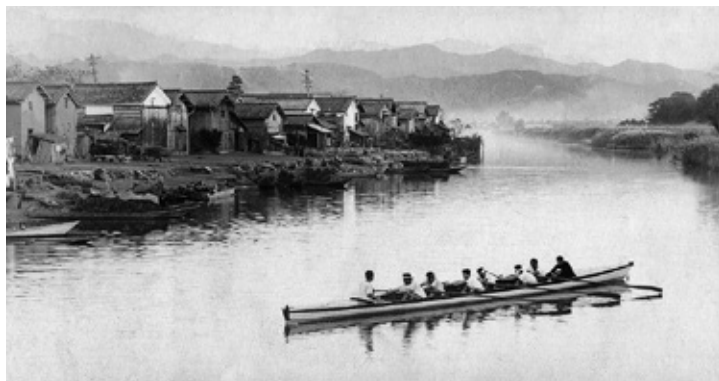
平成二五年四月、創立九〇周年を記念し陵水艇友会関東支部では「陵水ボートの九〇年を語り飲む会」を開催した。大学三十一回の卒業生までの十四名が集い、母校漕艇部への熱い思いを語り合った。その中で語られた、前田偉量(大学一回)名誉会長の回想を紹介する。

『戦後復興の立役者は、そりゃあ同期の伊藤彰二君やな。天性の名マネージャーやった。俺も彼にボート部に誘われた。当時は戦後すぐで、艇庫はポロポロ、ブレードの欠けたオールが五、六本、ストレッチャアの無いフィックスと割れて乗れないエイト、他に何もなかった。そんな中で人集め、金集めに奔走してくれた。彼は彦根高商ボート部の卒業生名簿を作り、支援を求めに一軒一軒卒業生廻りをした。高商五回高安規玖次先輩のお宅(高安毛織)に行つて五万円の支援を頼んだ。その金で、中古のボートを第八高等学校(名古屋大学)から買った。授業料が月百五十円、下宿賃が六畳六百円の時代や。オールは一本一万二千円もする。学

校に談判して買ってもらったが、体育の先生がボート部だけに大金を出すとは、けしからんと怒った。しかし彼は、本校の立地から考えると学校の為にもボート部が必要だと主張し、堂々と渡り合った。

昭和二五年、名古屋国体のフィックス種目で準優勝し、学長を始め、学校の職員が彦根駅に出迎えに来てくれた。その機会を捉え、早速、その日から学長室へ行き、「艇庫はガタガタ、艇も無い」と、五十万円の予算を勝ち取り、翌年、港湾の横に艇庫ができた。伊藤君が廻った多くの先輩方がお金や糧秣を持って合宿に来てくれた。皆が腹を空かせている時代で、ボート部に入ると飯が食えるという話が伝わり、部員も集まった。これも彼の策略や。自分は酒を飲めないのに、俺らが飲んだ酒瓶を数え、銭勘定をしていた。

高安先輩をはじめ、偉い先輩方がたくさんおられた。高商十一回の伊藤潔先輩は高商を出て、九大法学部



「1931年彦根城濠と松原漁港付近の彦根高商フィックス艇」山本嘉雄氏の漕艇部アルバムより

へ行かれ、学校の先生や、郵便局長をやられたが、人生哲学やいろんなことを教わった。スライディング艇のコーチとして、合宿全期間、共同生活をして頂いた。

高商十三回の片岡帰一先輩は、大阪で綿布問屋をやっておられたが、綿相場や火事やなにやらで商売の方は結構大変な時期があったはずなのに、本当によく面倒見て頂いた。長い間、ボート部監督やら関西漕艇協会のことをやっていた。あんな方は何十年に一人の人や。奥さんも偉かった。

縁とは不思議なもんや。今住んでいる施設で一緒に食事をしている九三歳のとても元気な方がおられるが、話を聞いたら何と彦根高商十六回の先輩や。住まいが芹橋十一丁目。俺の下宿先のすぐ近くや。この方は施設の中で一番の紳士や。彦根高商の人は歳がいつても立派や。』
『 陵水ボートの戦後復興に尽力いただいた多くの艇友への感謝の気持ちを、前田名誉会長独特の語り口で表現されていた。』

その前田偉量先輩には、私達もまた、現役時代も卒業後も随分ご指導いただいた。

「彦根・琵琶湖・ボート」という縦糸と「各年代での現役と卒業生の交流」という横糸が織りなす、模様こそが綿々たる漕艇部の伝統なのである。漕艇部百周年に向けて、新たな輝かしい色模様を織り込んでいきたい。そんな決意をした一日だった。

学生時代の思い出



中村 嘉 秀(大18)

彦根での生活は、芹橋の民家の八畳のお座敷に下宿することから始まりました。ちゃぶ台、ラジオ、柳行李に詰めた衣類、布団これが生活道具のすべてでした。

身体があまり丈夫でなく運動を何もやってなく、何とか人並みの体力がほしいと思っていました。高校の先輩が硬式テニス部において、私の入学と同時に入部の勧誘があったことから、硬式テニス部に入部しました。テニスコートへ通い、彦根城の城山やお堀の周囲、長曾根や松原の湖岸道路をひたすらランニングしていました。半年もやっている、自分なりに体力が付いてきて、友人と同じように生活ができると思えるようになりました。彦根という環境が私に与えてくれた自信の一つです。春秋の行楽時期の日祭日には、日本ユースホステル協会の手伝いで、中高生を相手に野外活動のリーダーをやり、夏は覚えたてのヨットの操縦に、冬はスキーに夢中になりました。

貧乏学生の私ではありませんが、奨学金と家庭教師のアルバイトなどで何とか生活できました。彦根の皆さんの「学生さん」という励ましの一言や、暖かい思いやりが今でもとてもうれしく思っています。

教養課程のときは、文学、哲学、思想、宗教といった分野の書物をよく読みました。専門課程に入り、経済、経営、会計といった経済学部の学生らしい部分に興味が移って行ったように思います。授業で学ぶというより勝手気ままに書物をあさっていたように思います。授業に出席するのは、期末に単位をとるための試験対策の意味合いが強かったようです。同級生との議論もずいぶんやりました。昼夜を問わず激論を戦わしたように思います。勝手に友人の下宿に転がり込んで議論をし、お互いにくたび果てた時が終了といった具合です。テーマは国家論、体制論、恋愛論、人生論など何でもありでした。時は学生運動の真つ盛りであり、滋賀大学のキャンパスも封鎖されている状況でした。教会の礼拝所やお寺の本堂などで授業を受けたことを覚えています。

ゼミは小倉ゼミにお世話になり、「原価計算論」を学びました。小倉先生が米国留学の時期とも重なり、レポートは奥様を経由してのAIR MAILであり、留守宅にお邪魔して奥様にも随分お世話になりました。AAAの「企業会計原則」を伊吹山の合宿所で翻訳したこと、利益計画について直接原価計算との関係で考察した卒論を仕上げたこと、これらを同期生で協

力してガリ版印刷ですり、表紙を付け製本したことで、何となく一人前になったような気がしました。小倉先生からは学問だけでなく、先生の人柄や多彩な趣味を通して人生を教えて頂いた気がします。

いま振り返ると、一番贅沢な時代を過ごしていたように思います。自分に与えられた時間は永遠にあると信じ、自由気ままに費やすことができる。これが当たり前と考え疑わなかったのだから。彦根では素晴らしい多くの人たちと出会いました。そしてこの人たちと自分との関係を彦根という環境があたたかくつつみ、育んでくれました。彦根はまさにわが青春の思い出、学生時代の思い出です。

酒と唄と人生



林 貞夫(大18)

昭和41年青少年期を終え社会人になる為の滑走期間を、第二の誕生として新しい自分に生まれ変わろうと降り立った彦根の地。過去を知る人間は一人もいない。入学式当初初めて踏み入る正面前庭には、見窄みすぼらしき露店の如き各部の小間。早くも新人生勧誘の呼声こゑが轟かまびすしい。ここで私はつかつかと二ヶ所に歩み寄り、バスケットと詩吟部に入部届けを出した。

下宿も治まり講議や練習も始まり、彦根の空気にも少し馴染んできたころ街で新入部員歓迎コンパがあった。バスケットでは紳士的ながら賑やかで新人にはどんだん酒を振る舞ってくれた。ここで生まれて初めて酒を飲んだ。はじめは猪口で、次に湯呑で、最後は井になった。新人が酔うほどに座が騒動しくなり、「頑張れよ!」「頑張ります!」の応酬となる。どうやら宴席はこの辺で切り上げ各各おのおの三々五々としけこもうという算段のようだ。二次会三次会とついで行き不覚とならず、俺はいける口かと思つた。

程なく詩吟部でも歓迎コンパあり。当時はビールが高かったせい、コンパの基本は安い日本酒だ。ここではすき焼をあらかた食い終わると直ちに高歌放吟の演芸会が始まった。彦根の人々は学生になんと寛容なことかと思ひ知る。「飛出す唄の数さえも百を下らぬ多才ぶり」と謳われた詩吟部甚句はこの時本当にそう思った。高商・大学の歌の全てから始まり、デカンシヨ節、滋賀大節、センター節、各小唄、歌謡曲、春歌、民謡止まるところを知らず。合唱あり独唱あり、数え唄などは一から始まり百千万億兆と限りなく続く。中でも圧巻は「そーらん節」、民謡に始まり春歌に流れ、先輩方が次々に立ち独唱、新作発表も毎回あり当時部員40有余名、半回りしても20番位まで終わらない。鍛えに鍛えたその喉の素晴らしきこと。憧れが男唄を歌わせる素地となった。

詩吟部同窓のなかには、卒業後幾十年も詩吟を続けるもの、師範となったもの^{あまた}数多あり。未だに年三回、関東・中部・関西にてOB会「吟城会」を開演、平成の新曲を披露するものもいるが、基本は昭和の歌・当時の歌を好むもの多数。^{それぞれ}夫々の人生に酒と唄が横串となり多数参集して友誼を交わすことが出来るのは有難く嬉しい限りなり。その様子は昨年まで3回連続して陵水会報に掲載いただいている。

私の同期に「滋賀大学詩吟部経済学科」在学中と自己紹介するものあり、不断の努力と精進を重ね不世出の人と謳る。今や詩吟は言うに及ばず、江州音頭の櫓歌や尺八も能くする。一つ

後輩に我らが愛唱歌「蒙古放浪歌」に魅せられ万里波濤を渡り、シベリアを横断し世界百五十有餘ヶ国を巡り、三冊目の自分史を出版した男がいる。二つ先輩に今隷書を習い東京陵水詩吟会にも参加、「満州里小唄」をこよなく愛する人がいる。娯^{たの}しむべし酒と唄と人生。

わが青春滋賀大生



平田

修(大18)

滋賀大学に於けるわが青春を語れとなれば所属した体育会ヨット部と西川ゼミです。

ヨット部のことは未だに滋賀大学経済学部ヨット部卒業という私です。当然そこには輝かしい戦績があるとお思いでしょうが、ヨットレースでは最後まで悔しい成績でした。でも良き先輩や仲間恵まれ、今尚陵水帆人会としての人脈が続いていることを誇りに思います。現在いろんな事情で部員が減っていることを考えると、滋賀大学あつてのヨット部、ヨット部あつてのOB会と当たり前に思う私には将来を危惧し寂しく思う次第です。陵水会も同じ国立の小樽商大に結末力で劣ると知り残念です。で、そのヨット部の青春は帆人会百名突破記念号の機関誌に三回生のわがエッセイが掲載されていて、卒後四十年以上になります。今読み直して、恥ずかしくもわが人生をかくまでに思っていたのかと、まさに大学とは人格形成の場なのだと思つて実感致します。その一部を再掲すると「青春とは実に不安定なものだ。だから彼は自己の

存在を確認しつつ、一步一步前進しなければならぬ。」とし、人間を具体的志向の上向型と抽象的志向の下向型に分け、それを強なる者と弱なる者につなげて説明。そして「人生に於いて窮極は人間が人間として生き切ることにあるならば、ぼくはこの弱なる者の心情を愛し傷を舐めるが如くしていたわっていききたい。…しかし既に強なる者として位置づけられた上向型はこんなことを考える必要はない。彼にとつて唯一の関心とする問題は実社会がいかなる人間を要求しているのかを知ることだ。」最後に「これは下向型の自己弁護ではない。自己顕示欲がないから自己弁護をする必要を感じない。自己の存在を確認しているだけなのだ。」と結ぶ。

なんとも面映いがこのつぶやきも青春時代の一コマなのでしようか。ヨット部で月月火水木金金と練習に明け暮れ、学校の授業は出席の厳しいものだけに出るといふ中で卒業し総合商社に入れたことを思うと、現在就活に苦勞している学生達が可哀想で余りの時代の変わり様にしたただだ驚いています。

もう一つの青春西川ゼミのこと。当時は全共闘対民青の学生騒動の真只中であつた。こんな小さな地方大学でもゲバ棒を持ってバリケードで学園封鎖をしようとする学生達とは相容れず、ナンセンスのワンフレーズで、対話もない者にノンポリと言われようともわれには「絜矩之道」ありと矜持を崩さなかつた。鬼籍に入られた恩師西川達雄先生には、そういう状況の中で常に現実を見る目を熱く教えられたことを覚えている。少ないゼミ生だったが先輩に国政

の現状を聞き勉強不足を痛感、向上心に燃えたのも先日のように思われる。今日リベラルに立って考えようとするのもこの時の養分があつたからかもしれない。

わが心の故郷 彦根



駒井久夫(大19)

本校に入学するまで彦根といえは中学時代に彦根球場のマウンドに立ち、優勝チームに悔しい逆転負けを喫したほろ苦い思い出が少なかつた。競争厳しき団塊世代、運を天に任せでの入学試験に運よくパスしたのを機に彦根は特別な街になった。わずか4年の学生生活だったのに今では永年暮らしたA市や、40年超えた会社生活の大半を過ごしたB市よりも郷愁その彦根となっております。かといって学問に勤しんだ訳でもなく、彦根城に代表される名所旧跡にはまった訳でもない。一言でいえば恩師、仲間と濃密に過ごした時間、場所、出来事が何にも代えがたい郷愁を呼び起こす街ということだろう。

バドミントン部に入部、この事が今日に至るまで何かと大学、そして彦根との接点として連綿と繋がっていくとは夢想だにできなかった。クラブの顧問が榎本彦次先生、山内隆先生であった事がラッキーとしかいいようがない。少人数で自主練習をしていた時に、お二人にはよく声

をかけられた。「おい、ちよつとコーヒーでも飲むか!」と体育教官室に通された。お二人とも熱かった。榎本先生は三河なまり、山内先生は熊本なまり、齒に衣着せず能弁だった。滋賀大学体育教育の将来、今は立派に完成しているトレーニングセンターの構想、また退官後のスポーツ少年団やママさんスポーツ育成などなど尽きることがなかった。結果として榎本先生がリードしたバドミントンにおいて滋賀県は有数の強豪県に育ち先のロンドン五輪では県出身の垣岩令佳選手が同競技日本人初の銀メダル。山内先生の体操競技では中瀬卓也選手(先生と同じく日体大)が北京五輪団体銀メダル。種目は違えども中瀬、垣岩両選手とも大津市立日吉中学出身というのも縁を感じる。

クラブの仲間、先輩、後輩との交友も幅広く



榎本先生、山内先生が並んで写る最後のもの
(平成2年9月9日 バドミントン部OB会)

長く続いている。毎年のOB会では18歳の学生から70代後半の大先輩まで80〜100人が集う様は壮観である。私も過去2度OB会長を務めさせて頂き、創部40周年、及び50周年記念大会実行委員長を経験できたのも感謝である。年に一度のOB会では飽き足らずシニア層を中心に年に数度集まってるし、その内30人とはメールでつながり毎週一斉受信される。

陵水会関係では平成10年2月21日(土)第19回陵水懇話会当番幹事に指名されてからの付き合いです。当時の就職担当が恩師、山内先生ということで二重のプレッシャーがかかりました。大恩ある先生の顔をつぶすようなことは絶対許されないとこの思いでした。

前年の学生参加者が20名余り、とりあえず2倍以上、最低50名は集めなきゃと陵水会館に何度も相談に行きゼミ先生への働きかけを懇願した。また開催時期の天候も気になった。自分が学生時代ならどう行動するだろうか。ずばり「悪天候なら無理に参加しない」

どこまでも不安はつきまとう。体育会所属の全クラブの主将宛に手紙を書き「今回は3回生が対象だが将来の就職に備えるのに早過ぎることはない。立派な講師、先輩に大勢来て貰うので1、2回生にも是非参加するよう貴兄から呼びかけてほしい」

当日おかげで天候は快晴、定刻が近づくにつれ鈴なりの参加者を見るにつけ安堵した。結果、事務局の見込みを大幅に上回り何度も資料の追加コピーに追われた。

学生約160名、OB25名、大学、陵水会関係者含めるとざっと200名の大盛況。

頑張つてよかつたと思つたのは、この日全国から集まつた19回卒25名がその後同期再結集の起爆剤になり東京、名古屋、大阪で各々同期会を毎年開催、そして卒業以来初めての全体同窓会を平成20年5月に開催したところ案内状出した半数以上の86名がさつと参加してくれた事である。陵水懇話会は学生の為だけでなく私達19回卒の結束に大きな架け橋となり感謝している。

以来5年が経過し第2回全体同窓会が本年平成25年5月25日～26日開催予定され今から楽しみである。学生時代は思い通り行かない事が多く「わが青春の彦根」とは程遠かつた。リタイア後こうして集える今が青春ど真ん中！

私と滋賀大学そして彦根

一、受験

高校入試で公立高校の受験に失敗した私は私立高校で三年間暗い高校生活を送った。

滋賀大学入試の日、校門には後輩の受験生を応援する在校生が母校の校名を書いた「のほり」をもつて立っていた。「のほり」には全国的にも進学校といわれている名前がずらりと並んでいるのを見て、絶対合格して同じ仲間になりたいと思った。

私の卒業した高校からは、詳しくはわからないが、それまで滋賀大学に入学した者はいなかったのではないかと思



入学して間もない頃 正門前にて(昭和42年)

小山久照(大19)

う。袋町の旅館に二泊し受験に臨んだ。受験場所は彦根東高校であった。試験の数日前に三月下旬にもかかわらず雪が降り、昼休みにはその雪景色を見ながら石垣の上で旅館が作ってくれた弁当を一人で食べた。こんな町で大学生活を送ることができたらどんなに素晴らしいものかと思わずにはおられなかった。四月に「サクラサク」の合格電報を受け取った時、三年間の受験生活から解放され一期校には入れなかったものの私の胸は国立大学に入学できた喜びで満ち溢れていた。

二、授業

①晴れて入学した大学は期待に十分応えてくれるものであった。まわりの同級生たちも「粒ぞろい」という思いを感じさせた。授業の内容も高校までとは違いレベルの高さをみせつけられた。理数系がやや苦手な私にとって梶田公先生の「経済数学」・小倉栄一郎先生の「簿記」には苦しめられ、ついには単位を取得することなく卒業することになった。私の能力のなさかもしれないが、四年間の私は高校三年間の受験生活の反動から勉強には最後まで身が入らなかつた。忸怩たる思いである。最近でこそ見なくなったが、卒業してからも「留年」しそうな夢を何回も見た。

②クラブ活動は硬式野球部に属していた。顧問の先生は「大橋先生」（食品学の先生だった）

という定年間近の方で、練習を見にくることはなかったが、春・秋のシーズンが終わった打上げのコンパだけは必ずお見えになり最初に挨拶をされた。その挨拶で言われること毎回きまってしまう言われるのであった。「私は諸君の顔は勿論、名前も覚えておりません。ですから試験の時は必ず名前の上に野球部と書いておいて下さい。」それだけ言うのと乾杯もそこそこに会場をあとにされるのであった。試験結果は野球部全員優だった。飄々としたお姿が今も儼に焼き付いている。私もその当時の先生と同年齢になってしまった。

③立川先生（膳所高でも教えておられたと思う）の地学の授業で河内風穴に行ったことがあった。当時私は下宿をしていたが、集合時間が朝早いこともあり、その頃は今と違いコンビニもない時代のこと現地に行けば売店でもあり何か買うことができるだろうと思っていた。ところが現地に行けば何もなかった。先生がいろいろと説明をしてくれていたが、空腹の為、まったく上の空であった。当時の年齢で朝から飲まず食わずで夕方までいるのはかなり苦しいものであり学校に戻ってくるやいなや食堂に駆け込んだ。

三、横浜と井伊直弼

横浜に住んで三十年になり、ここで一生を終わりそうな感じがする。

ここ横浜の桜木町の近く紅葉坂もみじざかに井伊直弼の銅像が横浜港を見下ろす場所に訪れる人も少な

くひっそりと建っている。日本を開国に導いた直弼であるが、私には彦根の方を見ているように思えてならない。激動の世に生きながら、あの「埋木舎」の生活に戻りたかったのではないだろうか。

四、司馬遼太郎と滋賀大学

あの司馬遼太郎が「歴史を紀行する」という本の中の「近江商人をつくった血の秘密」の一節でこう書いている。・・・旧彦根高商はいまや滋賀大学経済学部になっているが、「どうしてもあの学校の卒業生を」といつて採用したがる会社が依然として多いという・・・このくだりを読むと大学を取り巻く環境も、時代環境も我々が在学した時と隔世の感があるのいがめない。

この十年位の間、折にふれ彦根を訪れ陵水会館にも三回宿泊させていただいた。彦根銀座も当時と比べるとさびれた感があり、学内も彦根駅からのバス路線があり、ほとんどいなかった



偲聖寮の開寮祭(昭和42年)

女子学生もかなり見受けられ、うらやましい思いと少し寂しい思いが交錯した。

ただいつも下宿の部屋から見えていた彦根城だけは変わらない。

歴史に「もしも」はないが、関ヶ原の戦いで石田三成が勝利していたら井伊直弼が世に出ることもなく「佐和山城」が残っていただろうか。

青春の街 彦根



西村 孝 一 (大19)

昭和四十二年二月の雪の降る日、今は営業していない楽々園に宿泊して受験しました。合格しても、大阪から遠い田舎へはあまり行きたくない気持ちでいたので、旅行気分でした。しかし、今になれば田舎暮らしは良かったと思っています。

半年程は、自宅から通学していましたが、家と学校の往復だけでは、つまらないと思っていました。ところが、「全員素人の同好会みたいなクラブ」と言うハンドボール部からの勧誘に引っ掛かり、入部しました。入ってみれば、成程高校からの経験者は数少なく、これなら気軽に楽しめそうだと実感しました。体力的に劣っていたので、殆ど脇役で終始しましたが、同期の十人あまりとは仲良く過ごすことができて、いい思い出となっています。

入部して暫く経った頃、誰が言い出したか定かではありませんが、部誌を出そうということになり、原稿を鉄ペンで書き、ガリ版刷りした創刊号が完成しました。今から見ると粗末なも

のですが、青春の一ページとなりました。卒業までに確か五号まで出しました。

ハンドボール部の顧問が進藤勝美先生であった関係で、ゼミはすんなり進藤ゼミとなりましたが、二年間の内、出席したのは最初の一回目の挨拶(先生の自宅)と卒業旅行(鳥取砂丘)のみで、一体どういう内容でゼミが行われていたのか、わからずじまいで卒業しました。卒論は出せと言われたので、仕方なく、当時流行っていたドラッカーの本の中から一番薄そうな本を選んで、一週間かけタイトルだけ変えて中身はほぼ丸写しして提出しました。後から何も言われなかったもので、これで無事単位は取れたと思います。したが、先生の温情に感謝です。

卒業後、香川県の高松市で勤務していた時に、突然先生から電話があり、今、経済学部長会議で高松に来ているので、夕食を一緒にしようというお誘いでした。ワシントンホテルで楽しく懇談させていただいたのが、忘れられない思い出となりました。



現在、大阪陵水会の副幹事長を拝命していますが、支部長の大西久一先輩が進藤ゼミの第二回生でもありますので、今後進藤ゼミのOB会を復活させようと考えています。第三回生の吉田稔先輩もご賛同を得ていますので、名簿整理の上、年内に声かけができればと思っております。その節はご協力のほど、よろしくお願いいたします。

一緒に学び遊ぼうや



山田

督(大19)

昭和四十二年三月某日。私は沈んだ心で彦根駅前に立っていた。気持ちと同じ肌寒さがまだ残っていた。

「滋賀大の受験生？ 今から下見に行こうと思うけど一緒に行かへんか？」細身ではあるが人懐こい爽やかな笑顔だった。私が彼と初めて出会った瞬間だった。

二人は歩いて大学に向かった。「出身校は？ 今晩はどこ泊まるの？」「いろは旅館？ 一緒や。まさに奇遇やなー。」会話は完全に彼のペースだった。しかし、私の気持ちは少しずつ明るくなっていった。

「俺は一浪だから今回がラストチャンス。合格したら生産管理を勉強したい。これからの日本はメーカーの現場が引張る時代。だから生産管理が不可欠。クラブは軟式テニス。できればカワイイ彼女も作りたいなー。」

翌日の試験終了後。「合格したら必ず彦根へ来いよ。浪人はしない方がいい。」「一緒に遊び遊ぼうや。」彼は手を伸ばしてきた。私は思わず握り返した。

数日後の合格発表を受けて浪人すべきかどうか私は悩んだ。だが何故か「一緒に遊び遊ぼうや。」が脳裏から離れなかった。

翌月の入学式当日。私は彼を探し回った。彼も私を探していた様で「おー。お互い約束を守ったなー。」二度目の握手であった。それから、下宿も同じ、クラブも同じ、友人も同じ。下宿は彼を慕って集まってくる仲間達の溜り場となった。しかし、彼はなれ合うのを好まなかった。切磋琢磨を望んだ。濃密な4年間となった。

平成十九年一月。彼は忽然と天に召された。時には天も非情なことをするものだ。だが、彼のことだから我々が追いつける位の高みで待っていてくれるに違いない。そちらでも一緒に遊び遊べるように。

彼とは武田 斉君。

彦根城は、私の、心のランドマークだった



大熊

博(大20)

私は、九州熊本の高校の出身である。当時、関西との間には山陽新幹線は開通しておらず、十時間余りかけて夜行列車で行き来する時代であった。私の高校の進学主任の先生が、担当の古典の授業で、滋賀大学を「悪くはない」と紹介してくれた。その頃、NHK大河ドラマが始まったが、その第1回目が、井伊直弼の生涯を描いた『花の生涯』（舟橋聖一作）であった。そこで私は、大学受験の第1候補はK大学に、第2候補は滋賀大学に決めた。

運よく滋賀大学には入学できたが、彦根での生活は悲嘆と戸惑いの生活であった。なぜなら、まず第1候補のK大学に落ちたことの落胆。そのため彦根でどのような大学生活を送ろうかということを考える余裕もなく、悶々としていた。それに彦根駅前のバスターミナルは木造の小屋で、人口40万人の賑やかな熊本のバスセンターとは雲泥の差であった。更に、4月でも冷たい風が吹いていて、温暖な九州で育った私にはその寒さは応えた。私は5月初めまでセー

ターを着ていた。彦根での生活が不安で、私は軟式庭球部と吟詠部の2つのクラブに入っ
た。

そのようななかで、先輩の下宿宅からの帰りのある夜、暗い空をふと見上げると、かなたに彦根城がそびえていた。その華麗な美しさと気品の高さ、長い歴史を生き抜いてきた姿に、私は感動した。そうだ、苦しい時も寂しい時も、これからは彦根城が私を見てくれて、励ましてくれる。それに昼間、彦根城を見上げれば、彦根の地理がわからない私に、今、東に居るのか、西に居るのかを教えてください。彦根城がこれからの大学生活を導いてくれると思った。『第一希望の大学に落ちたことは一歩後退だが、二歩前進の精神で生活しよう』と、やっと少し前向きに考え始めた。



軟式庭球部 OB 交流会では、いつも彦根城（西の丸）を背景に記念撮影であった（移転前の大学構内にあったテニスコート場にて。筆者4回生時）。

5月になると、先輩10人余りが九州出身新入生の歓迎会を開いてくれた。当時、焼酎は全国的には普及していなかったためか、冷やの日本酒で、湯呑み茶碗での乾杯。九州男児らしい豪快な歓迎会であった。

軟式庭球部の合宿では、早朝、隊列を組んで彦根城内をよくランニングした。いくつかコースがあつたが、われわれが「いろは松コース」と呼んでいたコースは、最も距離が長くてきつく、部員に恐れられていた。一方「京橋コース」は最短のコースであり、主将から「今日は京橋コース」と告げられると、何となく安堵の雰囲気があったものだった。なかでも彦根城の南側から入って左回りで一周して梅林を通り、滋賀大に戻るコースを掛け声をかけながらみんまでよく走った。また合宿最終日の打ち上げで



移転前のテニスコート場で、後輩とツーショット(背景の大学の建物が長い歴史を物語る)



移転前のテニスコート場にて(バックには、軟庭部の象徴、プラタナスの木)

は、夜中に天守閣広場まで登って、彦根の市街地を見下ろしながら、騒ぎ、将来のことを話し合い、青春を謳歌した。

3 回生になると、緒方、中島、大石の3名が九州から入学してきた。緒方、中島氏は、半ば強制的に軟式庭球部に入部させた。高校の後輩の大石氏は、私同様に進学主任の先生から滋賀大学についての説明を受けて受験、合格した。残念ながら彼はすでに水泳部に入部していた。

4 回生にもなると、彦根での生活も慣れてきた。私のノンビリした性格は、彦根に合っているようであった。入学時は彦根で4年間も生活出来るだろうか、不安いっぱいだったが、1日でも長く彦根にいたいという気持ちが変わってしまった。これも私を見守ってくれた彦根城はもちろん、主将を努めた北川氏をはじめ軟庭部の同級生や、諸先輩、下宿のお婆さんなど地元彦根の方々のおかげだと感謝している。

現在、私は生まれ故郷の九州福岡に戻り、今年65歳を迎えた。テレビや雑誌等で彦根城を時々見かけるが、年を重ねるにつれて、ますます華麗に見えて、その感動も大きい。彦根への思いは、遠く離れているからこそ強くなるのだろうか。

わが青春の彦根



大谷

潔(大20)

昭和四十三年から、第一次ベビーブームの頂点の中で、彦根という小さな町で二四〇人ほどの同期とともに過ごした四年間が私の人生の方向を決定付けてくれた。そこで培ったのは交友関係である。それは主に、寮・下宿生活、クラブ活動、ゼミ活動であった。

そんな中で一番濃密に過ごした仲間の一人は、寮の同室で1年間一緒に暮らした淡君である。今回は彼とのかたちを書いてみたい。

彼は大阪住吉高校出身の現役組。ジャズを聴き、ギターを奏でる「のんびり坊ちゃん」という感じであった。

当時は二人一部屋で、同じ並びに市川、田中といった仲間ができ、自分の部屋も他人の部屋もなく、毎日が合宿状態。一年で寮を出て下宿に代わったが、お互いの下宿を歩き来し、雰囲気は寮のままだった。

一番の思い出は、二回生夏に淡と市川との三人で淡路島と、大台ヶ原のキャンプ旅行だった。一週間のその旅行はお互いの家族とか、それまでの経験や思想の壁を取り払って、遠慮なく踏み込みあえる関係を作ったと思う。

彼と大阪で飲んで、彼の自宅に夜中に泊まり込んだり、まさに学生の特権を存分に発揮させてもらった時期だった。

卒業後、彼は竹中工務店に入社し、早々に社内結婚。その後、市川、田中両君に竹中の美女を紹介し、めでたくゴールインさせるといふキューピットにもなった。

そんな世話好きの彼の新居には、われわれ同級生だけでなく、会社の友達まで同道させて泊まっていくものまで現れ、まさに友達の輪が広がっていった。

小生はメーカーの営業、彼はゼネコンの営業でほとんど仕事の接点はなかったが、卒業後二十年ほどして彼の担当のホテル物件で一緒に仕事をする機会が訪れる。



S. 44. 夏 淡信一君と大台ヶ原にて

お互いの立場を理解しつつオーナーの希望に沿ったホテルを完成させたのは、私が担当を離れた後だったが、まさに二人の因縁を再認識する仕事だった。

その後彼は竹中の営業部長として私の奉職していた会社を担当し、公私ともに肝胆相照らす関係が続くのである。

彦根での四年の交友はその多くが経済人として活動することもあり、その四年に留まらず、終生の友として続いている仲間がたくさんいる。公も私もなく心の底から共に悩み、共に気遣い、共に苦しみ、共に学び、共に遊ぶ。それが彦根の仲間である。

これは夫婦以上の金の糸で繋がっているような因縁を感じる。

今回は寮の因縁を綴ったが、クラブ、ゼミにおいても先生、同期生、先輩、後輩と金の糸、銀の糸などさまざまな縁によって繋がりにここまできた。

「彦根の友よ、ばんざい！」と叫ぶ。

芹川河岸にて——屋台「かえで」のおばちゃん

佐藤 孝 一（大20）

「おいしいなあ、おいしいなあ」と、私と同期の中田二郎（仮名・大20）は、深酒したあとの「お茶漬け」を食べ始めていました。

昭和44年2月、小雪の散らつく寒いある日、某体育会クラブのコンパでした。1回生から4回生まで部員全員が集う1年間を締めくくる大コンパでした。上級生は、下級生に御馳走するために、せつせとアルバイトをして軍資金を稼ぎ当日に備えるのです。場所は、彦根で唯一の艶町である「袋町」の居酒屋でした。二次会は、袋町のあまり高くないバーや袋町界隈のスナックで飲んで騒いで、ほとんど酒だけしか入っていないお腹の空腹感を癒すために、おでんとお茶漬けを食べて帰り、下宿で飲み明かしました。

金もないのに、学生の方で酒を飲むことが楽しみの一つだった私は、実家からの、けっして多くはない、充分ではない仕送りとアルバイトで稼いだ僅かばかりの金をたよりに、月に2

「3回程度仲間とともに安い酒を飲みに出かけていました。そして仕上げは決まって屋台『かえで』のお茶漬けでした。」

屋台『かえで』は、袋町の裏手の芹川の堤防に店を構えていました。店主は、口数の少ない切れ長の大きい目をした、年の頃は50歳くらいの上品な「おばちゃん」でした。

私と中田二郎が、お茶漬けを食べていると、地元の中小企業の社長風の男性が入って来ました。顔は、飲んだ酒で真っ赤であり、小太りの中年の男性です。

「おばちゃん、お茶漬けしてくれるか？ 待ってる間、ビール1本おくれ。」

「はい。少々お待ちを。」

男性は、注文したビールをコップに注ぎ、水を飲むように飲み始め、あっという間にビール1本飲み干しました。お茶漬けが出てくると、忙しなさそうに、お茶漬けをいっきに、胃袋に流し込むように食べてしまいました。

「おばちゃん、お勘定して。」

「はい。720円いただきます。」

「釣は、ええで。」と言って、その男性は、10,000円を差し出しました。

すると、「かえで」のおばちゃんは、キツとした顔をして、

「お代は、十分いただいております。結構です。」と言って、お釣をポンと返しました。

男性は、首を捻りながら釣銭をもらって、キョトンとした顔をして出ていきました。

私と中田二郎は、顔を見合わせてニコツと微笑みました。

目先の金銭に媚びを売る人間は多いけれど、自分の仕事に誇りを持ち、応分の報酬以上のものを決して求めない「かえで」のおばちゃんの毅然とした態度に、その時の私の若い心が、震える思いがしたことを、はつきりと覚えております。もとより、愚かな私ではありますが、目先の損得に拘泥することなく、愚直に生きることの大切さを教えていただいたような気がしました。そして今、私は愚直に生きてこれたかどうか、まだ分かりません。しかし、その気持ちは、今も大事にしております。

思えば、昼下がりの芹川の清流と緑は美しいです。そして芹川河岸から眺める夜空の星も美しいです。しかしそれだけでなく、芹川は、その他にも数多くの、彦根における「わが青春」の素晴らしさを教えてくれました。「芹川」は、「わが青春」の思い出です。

彦根



長谷川 力 雄(大20)

ずっと40年余り昔の話になる。一年浪人の果てに、私は、滋賀大学経済学部へ入学すべく、彦根駅に、降りたった。

駅には、一生を通じて深い董陶を、うけることになる、岡本文夫先輩が、自転車で、待ちうけていた。「お前が畝傍の長谷川か」「ハイ」「まあ、うしろへのれや」自転車の二人乗りで、私の彦根生活は、はじまった。

合格の発表後、奈良の大和高田まで、柔道部の勧誘に來られたのは、岡本先輩と、もう一人井島光信先輩であった。私はその時、不在であったので、実際に、顔を合わせたのはその時が、はじめてであった。

ござれ食堂という一膳めし屋へ連れて行かれて、何でも好きなものを喰えといわれた。大盛のメシと、サバの煮付けと、納豆を、御馳走になった。納豆は生まれて、はじめて食べ

た。一年浪人をしたものの、高校で二段をとっていたし、86kgの体重が、目当てで奈良まで行ったのだという話しも聞かされた。東京生まれの、東京育ちにもかかわらず、バンカラで、詰めエリの学生服を着ておられた。坊ちゃんの山嵐のような感じで、設定が真逆であった。とにかく大人に見えた。

当時すでに珍しかった、角帽をかぶって、旗をたてて、自転車旅行に行かれた話など話題豊富な御仁だ。岡本先輩は、卒業後アラビア石油の社員として、サウジアラビアに8年間赴任中、柔道の普及につとめられて、アラビア人の門弟249人を数える師範として、大いに尊敬を集められた。湾岸戦争の時には、最後まで現地に踏みとどまって活躍された。

その時、アラビア人弟子達も最後まで行動を共にしてくれたそうである。今年の四月には、当時に題材に作家デビューされた。

奈良までスカウトに来てくださった、もう一人の先輩は、井島光信先輩で四回生だったが、卒業年次は当時三回生だった、岡本先輩と、どういう訳か同期になっておられる。

井島先輩も、これまた学生服のよく似合う人で、彦根にもよく似合う人だった。高宮かどこかで、学習塾をしておられて、滋賀大学生としては、裕福な方の人であった。お好み焼屋の「すずめ」でよく、御馳走になった。

しかし、同級生の池田善吾君と、袋町の、お寿司屋で、おごってもらった時には、前もつ

て、タコイカマグロ以外は決して注文しては、ならぬと固く言われていたので、カウンターでは、タコイカマグロタコイカマグロの繰り返して通した。おたがい元気なうちに、井島先輩と、一度寿司屋で一杯などお手合せ願いたく思っている次第であるが、井島先輩とは卒業以来お会いする機会がないのが残念である。その時には、こう申し上げたい。「先輩、タコとイカとマグロが一番、本当はおいしいですねえ」

自転車の二人乗りに、まつわるもう一つの彦根の想い出は、四回生の時である。たしか四回生の必修科目で「経済英語」とかがありその大事な試験の朝、前夜の猛勉強？のおかげか、寝過ごしてしまった。9時からの試験のはずが、フトンで起きて時計を見ると、9時をまわっていた「アー一年留年や」と潔く、またフトンをかぶって、寝たのはいいが、表で声がする。「長谷川君、長谷川君、はやく起きろ。いまならまだ試験に、まにあうから」呼びに来たのは、大学の事務の村重課長だった。私が試験場にいないので、あわてて、自転車でもかえに来てくれた。

自転車で二人乗りをして何とか、すべり込みで間にあった。私が無事に、四年間で卒業できたのは、私の不在に気がついてくれた、同級生と、それを聞いて、自転車で下宿まで、わざわざむかえに来てくださった村重課長のおかげである。

我々の学生時代の雰囲気は、おおかたこのようなものだった。高下駄を履いて、自転車に

のつて、酒を呑んで、放歌し、放尿し、マヨネーズをごはんにかけてたべたりした。

あれは一体なにやったんやと思う。就活というコトバもなしに、三回生の春休みには、就職先のOBが下宿まわりをして、会社の勧誘にきた。それをあえて断って、中小の企業へ行く者もいた。私もその一人だったが、いろんなタイプの学生が、それぞれの青春を必死で生きていたように思う。

柔道と尺八はいまだに続いている。体育会の役員つながりもある。最近茶道部のOBとしての、お茶会の案内も来る。学生時代、北野寺の野路井先生に裏千家のお茶を習っていたのだが、先生が最近滋賀大経済学部の茶道部の顧問になられたので茶道部のOBとして処遇してもらっている。これも女子学生が増えた影響か、尺八部も邦楽部と名を変えて、お琴や三味線もがんばっている。可愛い女学生達の先輩になれてしあわせなことである。

彦根で学生時代を過ごせたことは、幸運であったと、今つくづく思う。感謝している。

私の住む奈良の吉野から彦根までの約2時間半の道のりは、



キラリと光る町、大淀をめざして!
Only one town!
OHYODO!
大淀町議会議員
長谷川 力雄
〒638-0801 吉野郡大淀町芦原88
TEL 0747-52-9581
FAX 0747-54-2130

タイムスリップするには、適当な距離と時間だ。年間通じて四回は必ず彦根に来る。柔道と尺八と、体育会と、最近では茶道部の会合。しかし、それは彦根に来る表向きの口実にすぎない。私が彦根に来る一番の目的は、あの頃の自分に会いに来ることである。何事にも一生懸命生きていた、仲間との痕跡をたしかめるためである。

Youth! Do or die! 青春タオレテノチャム!

嗚呼、彦根



水野 久仁昭(大20)

「彦根」！ここから連想するのは、やはり琵琶湖、伊吹山、西に霞む湖西連山といった悠久なる大自然、井伊家城下町の歴史的趣、そこに住む人達の顔、顔です。

入学当時は、一期校をおちて都落ちのような気分で来た者と、片田舎から京に近い地へ来た大学生としての高揚感一杯の者と渾然としていたものです。自分は「こんな俺でも拾ってくれた」と当然後者の方でしたが、旧学制のバンカラ風に憧れていたのが新制の自由というか妙に明るい雰囲気には拍子抜けした気分でした。尤も、大学にきたと実感したのは全国から集まった同期で、文学や安保、革命云々に口角泡を飛ばす連中との出会いでした。田舎でノホホンとしていた自分は随分焦ったものです。さりながら、都会の喧騒？世相的刺激？のないあたかも別天地のような風土は、こういうところでの学生生活こそ社会へ出るまでの大いなる肥やしであると思わせる素晴らしいものでした。自然と歴史環境に加え、学生さんと呼んでくれる町の人

達との親しみは、多感な学生にとってまことに居心地のいいもので、都会に行った連中には随分羨ましがられたものです。

卒業して40有余年になるのに未だに当時と変わらぬ関係が続く、体育の山内先生、お茶を習った北野寺野路井先生、家庭教師先ですでにその教え子が後を継いだ能登川の富江さん、よく合宿した江国寺のおばちゃん等々目に浮かぶのはさんざん甘えたそこに住む人達、彦根はまさに第2の故郷です。卒業した後も、彦根に行くと「帰ってきた」気になるのはOB皆に共通する感慨でしょう。

ただ、彦根にも襲来した1970年代前後の世界的な学生紛争の波は、心情左翼だった自分も時にヘルメットをかぶってデモにも出ましたが、こうした彦根の良さを随分壊したわけ、その後の後輩諸君には誠に申し訳ないと思います。一方自分は、大学に入ったらボートをやろうと決めていました。筋肉を鍛えるのは比較的簡単だが、心肺機能を高めるのは一筋縄ではないかと、中学で水泳、高校で柔道をやってきた自分は肺活量6000cc強に憧れたわけでした。結果的に彦根に来た、彦根⇨琵琶湖⇨水⇨ボートと一直線です。

我ながら最高の選択でした。合宿ばかりで授業、バイト、彼女など無関係な大学4年間でしたが、手当たり次第本を乱読し未知の世界に遊びつつも、近江彦根の人情と男ばかりの無彩色の世界を堪能したといえます。夜中「友加里」から高下駄千鳥足で琵琶湖周航歌や哀歌をうな

りながら下宿に帰る、良きかな「彦根」！

こうした風土環境とボート競技の他では味わえない最高度のチームワークと連帯感に基づき自分なりのヒューマニズムはその後の社会生活の礎となり今日に至っています。

我がボート部に代々語り継がれてきた、「一艇ありて一人無し」「オアズマンは素朴であれ、ロマンティストであれ」至言です。

彦根よ、琵琶湖よ、毒々しい文明と無縁の質朴さよ！いつまでも変わらずに。有難う。

わが青春の彦根



太田 修 一 (大21)

1969年3月末なんとなく虚脱感で覆われていた。一応、偲聖寮に入ることを決めた。寮では歓迎会が行われ、その席で日本酒をどんぶりで飲まされた。ここに至った自分のふがいなさに向き合い、どんぶり酒を目一杯生まれて初めて飲んだ。次の日は入学式だったがひどい2日酔いで全く動けず、入学式には出られなかった。その時の苦しさは今でも覚えている。その後、日本酒は全く飲めなくなった。初めは都落ちという感情が大きかったが、段々彦根になじんでいった。ただ、雪の降らない温かい浜松市から来ると、冬は寒い。

先ず中古自転車を三千円ぐらいで買った。寮から大学の往復に使うだけなので動けば良いというつもりだった。授業のことは、先生達には誠に申し訳ないがあまり記憶にない。

しかし、ゼミ(仙田ゼミ)は財政学仙田先生の穏やかなお人柄、ゼミ生の人間関係が良かったせいで、良い思い出が残る。クラブはESSに入り、夜ウオルシユ先生のご自宅に英会話に

通った記憶がある。ESS活動は現在の貿易業務にも生かされており、有意義だった。2回生の時、文サ連の校内マラソン大会でトップに入った為、陸上部に勧誘され、兼任クラブ生活がスタート。当時の陸上部は、専用グラウンドがなく人数も少人数で、長距離は自分だけ。テニスコートの横で着替えをしてそのままマイペースで練習。陸上部では一応キャプテンもしたが、ほとんどマネ

ジャーに依存していた。一番の思い出は京都学生駅伝で「ほんの一瞬」同志社を抜いたこと、ESS活動では、三波春夫の歌でも有名な大阪万博で、英会話練習のため、外人ハントをしたことなどだ。学生運動の影響も受けた。全共関係ではなかったので、寮で殴られそうになったり、途中で寮を追い出されそうになったが、何とか居残り、3回生の初めまで寮生活継続。全共闘のやり方には賛成出来ず、非全共関係で安保破棄統一候補の一員として自治委員に立候補し、当選したこともあった。一度、京大熊野寮に泊まったことがある。当時、熊野寮には全共闘系と民青系・共産党系が同居。京大日本共産党委員会?の皆さんが毎日赤旗の記事を寮内に掲示するが、その都度全共闘系の人が壊す。それにめげず、必ずまた赤旗記事を掲示するとの



陸上部練習風景

ことで、共産党系の皆さんの根性に何故か感服した記憶がある。学生時代の活動は全て「今」に影響を与えている。ESS、陸上、反戦平和志向、音楽（フォークソング同好会にも所属していた。大学祭の実行委員長もやり、当時の生協で演奏をしたことが懐かしく思い出される。また、県立短大の方とも、短い間お付き合いをした。もうひとつ青春の思い出がある。それは無銭旅行である。当時、作家小田実の「何でも見てやろう」を読んで大きな影響を受けた。2回生の時、後輩とギターを持って北海道をヒッチハイク旅行し、北大の寮にも泊めてもらった。そのままヒッチハイクを続けて、岐阜県中津川市に到着、中津川フォークジャンボリーに参加。当時ジャンボリーには、高田渡、岡林信康、五つの赤い風船、吉田拓郎などカリスマ歌手が参加。サブ舞台で拓郎の前に演奏をさせてもらった記憶がある。夕焼けともに流れてきた五つの赤い風船の「遠い世界」のメロディーに感動したことを今でも懐かしく思い出す。その後、欧州へ無銭旅行したい気持ち



英語弁論大会

が非常に強くなった。幸い3回生で(成績は別として)卒論以外のほとんどの単位は取得し、第一希望日本楽器(現在のヤマハ)への就職も内定済みだった。就職は今より楽で、複数の会社を選択出来る時代だった。銀行・証券会社に入る仲間が多かったが、自分は楽器メーカーを選んだ。さて、旅行の件に話を戻そう。当時は、まだ海外旅行は珍しい時代。4回生の6月、当時の最も安い旅行方法でリュックとギターで旅に出る。横浜港より当時のソ連ナホトカ港まで船で行き、ナホトカからハバロフスクまでシベリア鉄道を利用、その後は、一番安く一番危険なアエロフロート機でモスクワへ。横浜港へは友人達が見送りに来てくれ、テープでお別れ。「帰ってくるなよ!」と言われたような気がする。バイカル号での3泊4日の船旅だったが、船酔いで苦しみ、やっとナホトカ港着。公害で汚れた横浜港の海が、ナホトカについたら海は青くみんな釣りをしていたのが印象に残っている。当時のソ連はまだ個人旅行が認められておらず、グループ旅行の形だった。初めて泊まったホテルでバスタブからお湯をかいだしてしまい、流れなくて大騒ぎした。モスクワには3日程度滞在したが、とにかく



友人と四国旅行

く暑かった。ソ連を脱出して欧州へ入り、いよいよヒッチハイク旅行の開始。欧州入りして最初はアメリカ女性2人と共に3人でヒッチハイク開始し、最初の目的地オーストリアザルツブルグ着。夕空を背景にしたドナウの流れと教会の鐘の音に感動した。その後、アウトバーンでさかのぼり北欧を目指す。基本は寝袋で野宿。アウトバーンでは道路横の芝生で野宿したりして、コペンハーゲンにたどりつく。久しぶりに屋根の下で寝ようとヒッピーが寝泊まりしているホステルに宿泊したが、サウナを浴びている間に現金を盗まれてしまった。有り金が無くなったので中国料理店で皿洗いのバイトを開始し、しばらくコペンハーゲン滞在。仕事の合間に夜の歩行者通りでギターの演奏をして小遣い稼ぎも開始。当時、日本人でこの様な稼ぎはおらず、1時間三千円程稼げて助けになった。ギター演奏はパリ地下道でもやり、ある程度金に目処がついたのでヒッチハイク再スタート。英国では、グリーンパークの芝生で寝ていたらホモにアパートへ誘われたり、スペインでは、野犬に襲われそうになったり、大変な時もあった。良い思い出もある。フランスのシャモニーに夜到着し、体育館の



様な所に寝たが、朝起きたらモンブラウンが真っ青な空を背景にそびえ立っていて感動したこと。パリはヒッチハイクが極めて困難で郊外に続く道路にはヒッチハイカーが何十人も等間隔で待っていた。フランスの田舎町も1日待っても車は止まらない。そんな時、信じられないほど親切な人がいて、家に泊めてくれて、また同じ場所に運んでくれたことなど。2日目はこれで駄目だったら日本人の恥だと思いい、根性で車を捕まえた。

波風を乗り越えて、次の目的地スペインアルハンブラ宮殿にやっとたどりついた。その後ヒッチを続け、最終地フィンランドヘルシンキから日本へ無事帰国。この無銭旅行も就職後、貿易の仕事についたため、とても役立った。帰国後、ひさしぶりに彦根の生活に戻る。琵琶湖の夕焼け、朝の散歩時の芹川の稚鮎など、素晴らしい自然に囲まれた生活は貴重な思い出である。欧州から戻ってからは下宿も転々とした。松原の下宿は当時月約三千円だった。ここで最後の卒論作業に入り、最終日メ切時間の30分前に完成。同じ下宿のマージャン狂い友人もほぼ同じ時間帯に完成し、一緒に自転車スタート。松原から大学までの距離を考えれば余裕を



大学祭仮装行列

持って間に合うはずだったが、信じられないことに自分の自転車のチェーンが外れてしまい、何とか5分前に届けた記憶がある。卒業式にも何故か出席しなかった。最後までドタバタの連続だったが、中身の濃い学生生活だった。先生達に、そして青春の1ページを与えてくれた彦根に感謝している。

オールに托した青春

片岡監督と一杯のビール



阿部吉博(大22)

早いもので、私が滋賀大学から巣立って、もう四十年近くの歳月が流れようとしている。そして、わが母校も今年、創立九十周年と記念すべき年を迎えた。

私も還暦から二年経ったが、おかげさまで心身ともに健康で、公私とも充実した日々を過ごさせてもらっている。そして、現在の自分の原点は何かと言えば、それは彦根での四年間のボート部活動であり、片岡監督との出会いにあると思う。

あの頃は、一年の大半はボート部の仲間と彦根の江国寺および大津の御殿ヶ浜の合宿所で、合宿生活を送っていた。特に、春から夏にかけてのシーズン中は毎日が合宿生活であり、まさに寝食を共にし「同じ釜の飯」を食べた先輩、同期、後輩たちとの懐かしい日々が思い出さ

れ、それこそが「わが青春」といえるものである。

その中でも、私の記憶の中で強烈に残っているいくつかの思い出がある。それは、私が四回生となりキャップテンとなったときのこと。その頃の戦績は残念ながら思うに任せず、低迷といった状況であった。

そこで、部の大先輩である片岡帰一氏（高商第十三回卒）が監督に就任され、その指導を受けることになった。監督は大阪在住であったが、度々彦根に来られ、あらゆることをわれわれに指導され、また改革された。

監督がまず最初に言われたのが「今までの常識を打ち破れ！」ということであった。それまで乗艇練習は早朝と夕方の夏場などは比較的涼しいときにやっていたが、監督からは「試合は昼でもある。だから、練習

もど・日・中・にやれ！」の一言。それからは真夏の昼間にも乗艇練習を行った。まさに汗が体から噴き出す、地獄の猛練習であった。また、練習内容もロングパドル（全力で長い距離を漕ぐこと）中心で持久力、心肺能力アップを目指したハードなものであった。



昭和49年2月頃 追出しコンパ（卒業記念）
（右から3人目が片岡監督、二人目が筆者）

その頃は「練習中は水を飲むな！」が常識であったが監督は「紅茶を飲め！」と言って乗艇練習中のわれわれに紅茶を飲ましてくれた。今では運動中に水分をとるのが当たり前となっているが、今思えば、監督は随分合理的な考えを持っておられたように思う。

そして、七月の終わりに瀬田川で行われる関西選手権出漕のため、艇を持っていくのに従来はトラックで輸送していたものを監督からは「練習や！漕いでいったらええ！」との指示であった。

そこで、彦根から大津の御殿ヶ浜の合宿所まで約五十キロをフォア（舵手付四人乗り）二杯で早朝に彦根を出発した。そして、二艇で競争しながら漕ぎ切った。幸い琵琶湖は波もなく天候もよく、湖上に浮かんだ愛艇から日の出を拝んだが、あの美しさは生涯忘れられない。

また、監督は、それ以外にも、合宿の食事の改革もされた。曰く、「もっと、ごっつお（ごちそう）を食わなあかん！」。それまでは、合宿の食事は、ご飯もおかずもそれぞれ、どんぶ



昭和46年関西選手権瀬田川杯レガッタ
エイト準優勝の記念写真

りに入っており(シチュウや豚汁など)、生野菜などは何もありませんでした。それから、程なくして、野菜サラダがつき、おかずも肉や魚もつくこともあり、食欲をそそるようなものになった。これは、食事を作ってくれていたマネージャーがメニューをいろいろ工夫してくれたおかげでもあった。

そして、一番鮮明に記憶に残っていることは、練習後の夕食にビールがついたことであつた。それまでは、ボート部の合宿といえば、「禁酒、禁煙」が鉄則で、それが監督の一言で、夕食にビールが付いたので、部員みんなびつくり仰天で、その日はわいわいやがやとにぎやかな夕食となった。監督からは「一杯のビールは食欲増進と血のめぐりがよくなるから飲んでええ。でも、何杯も飲んだらあかん」とのこと。昼間の猛練習の後のその、たった一杯のビールは生涯で一番美味しく、今でもその味は忘れられない。

こうして、片岡監督には「今までと同じことをしては、人には勝てない」ということ



昭和46年夏頃 大津御殿ヶ浜の合宿所の朝食風景
(奥で右手を挙げているのが筆者)

を、様々な改革で身をもって教えていただいた。

残念ながら、私の代では戦績で監督の期待には応えることは出来なかったが、翌年春の朝日レガッタでは、後輩たちがエイト準優勝を成し遂げてくれた。これは片岡監督の改革の大きな成果だったと思う。

このような片岡監督の教えが四十年経った今でも私の中に息づき、これまでの私の人生の中で、苦しいときや困難な状況のときにも私を支えてくれたように思う。

毎年夏になると、あの片岡監督の下での真夏の猛練習が今でも懐かしく思い出され、そして、あのときのたった一杯のビールの味が、オールに託した私の青春時代を呼び起こしてくれる。

拙稿を亡き片岡監督に捧げます。監督、本当にありがとうございました。



昭和48年4月28日、29日 第26回朝日レガッタ
於：県立琵琶湖漕艇場
(手前の艇、右から3番目が筆者)

青春の一ページ／学びを知る／



須田 邦 雄（大22・院2）

昭和四十五年に入学後、昭和五十一年三月に大学院修士課程を修了するまでの六年間は、まさに青春の彦根でありました。その間で得られたものが、今日までの人生に大きな礎えとなりました。人間としての生き方を教えていただいた恩師の思い出をつづります。

一、柔道部師範 堀部正一先生

入学と同時に三回生の長谷川力雄先輩（現在大淀町議会議員）から、「柔道部に入らんかね」と勧誘をいただきました。「大学へ入ったら何かのクラブ活動をしないと楽しくないな。」と思っていた矢先のことです。入部しました。友達関係を築くことや体力作りと入りました。それが、それ以上の大きな学びを得ることになりました。それは、柔道部師範・堀部正一先生との出会いでした。当時としても珍しく、先生は紋付き羽織袴姿で、毎週土曜日に指導に來られて

いました。先生からは、人間学を教えてくださいました。先生の教育信念として、「弟子は師を踏み台にして師以上の人間に成長することが師の願いである」と常々おっしゃられていました。また、「文を得て武に磨きをかけ武を体得し、文を机上の空論だけのものにしなさい。文武とは両脚のようなものだ。」ということも心に残る言葉でした。堀部先生が主催する柔道場練心会での大会の時「有教無類」という言葉を染め抜いた手ぬぐいをいただきました。中々意味が解らない時でしたが、社会人となり、会社で部下を持つようになって初めてその意味が理解できるようになりました。今日の私の生き方の基になっています。

二、進藤勝美教授

一年生の簿記原理は進藤先生の授業でありました。講義の中で先生に質問され回答できませんでした。「君ダメだね！」の一言でした。その年の試験結果は「不可」でした。その時、勉強の必要性をまさに感じ、経営学をもっと学ばねばならないことを自覚しました。

二年生の後半、ゼミの募集があった時、進藤ゼミに入りたいと思い、先生の自宅まで伺いお願いしました。その時は、現職の神山教授が柔道部の先輩であったことから、先生のお宅に同行していただきました。ゼミに入ることができ、学部ゼミの二年間、そして大学院の指導教授として二年間の計四年間にわたり先生のご指導をいただくことになりました。

私のテーマは、「リーダーシップ論」であり、アメリカ経営学の原書を読みながら、その文献を基にして論文作成が大学院時代二年間の勉強でした。論文指導では、月に二回程先生のお宅ではぼ一日中、先生と座卓をはさんでの勉強でした。夕方には先生の奥様の手料理でお酒もいただき、師弟の縁を結んでいただきました。その時の学びの楽しさ、課題への挑戦の難しさも感じました。しかしその時の時間、体験が私の今を作ってくれました。

思い起こせば多くの先生、先輩のお陰で人間を創っていただき感謝の念で一杯です。彦根の地、まさに第二の故郷です。

創立九十周年に思う



堀 義 廣(大22)

卒業以来四十年近くの歳月が経過したが、まずは彦根での学生時代を振り返り、記憶に残っていることを幾つか思い出してみたい。

彦根では、入学当初から卒業に到るまで、ずっと下宿で過ごしたが、最初のころは生活資金にも余裕が無く、今から思えば相当の貧乏暮らしであった。

ちなみに、最初の下宿は学校の斡旋により松原にある古い一軒家の畳の部屋であったが家賃は月二千五百円、一か月の生活費は節約を重ねた結果、家賃を含めても月二万円以下であったと記憶するが、これは現在とは隔世の感がある。ただ、下宿の家主さんをはじめ地元彦根の人は、学生に対して非常に寛容で、多くの制約に縛られる人生の中で、この時期だけは一種のモラトリアムを体験できたことは、学生冥利に尽きると今でも感謝している。

また、精神的にもまだまだ未熟で不安定な二十歳前後では、気楽な学生生活という楽しい一

面だけでなく、他人にうまく説明できないような不安を抱え、また一人暮らしの孤独にも耐えかねて、先輩方の下宿に押しかけ、ご迷惑をかけたことも多かった。このような未熟な後輩でも温かく受け入れていただいた当時の先輩方には、今でも感謝の念に堪えないが、青春の多感なこの時期に周囲の人達との全人的な人間関係を通じて、本音の話しなど、学んだことは多く、大学生として様々な知識を身につけたのとは別に、より広い意味での人間的な成長には、この種の体験が寄与しているものと思われる。

話しは変わるが、今年には滋賀大学経済学部の創立九十周年という記念すべき年である。私が在学中の昭和四八年は、創立五十周年に当り、当時の大学にも多くの先輩方が参集され、今は無き旧校舎を懐かしそうに眺められていた光景が目には浮かぶ。

残念ながら当時の建物は、講堂と陵水会館を残すのみとなってしまったが、この両建物は経済学部のシンボルであり、今後とも長く残してほしいと切に祈る次第である。また、目に見える建物だけでなく、後世に引継ぐべき建学の精神である「士魂商才」については、私は今現在大学で取組まれている「環境とリスク」に関する本格的な研究と教育によって発展的に継承できると考える。

その理由として、まず環境に関しては、人類の生存に関わる環境問題の解決は、まさに最優先の公的な課題であり、公を最も重視する士魂に通底すると考えられる。次に、リスクに関し

ては、現代のビジネスにおいてリスクとチャンスは表裏一体であり、ビジネスチャンスをもものにするには、適切なリスクマネジメントが必要不可欠となることから、これは商才に直結すると考えられるからである。そして、この取組みが次の創立百周年に結実するよう、私も微力ながら応援して行きたいと思う。

思い出のひとつ

― 農村調査に参加したこと ―



富田

修(大23)

私の机の前の窓枠に、有田先生の写真が立ててある。ゼミの指導教官で、社会統計学の有田正三先生である。

比較的最近まで、彦根や有田先生が登場する夢を見たものである。彦根や有田先生の思い出はもう限りなくあるが、ここでは三、四回生のときに、農村調査に参加したことを記しておきたい。

私の日記帳のほんのわずかな記事をもとに、私自身の記憶をたどってみる。

この調査は、労働経済学を担当しておられた美崎皓助教授が主導して行われたもので、農林省が全国五か所で実施した調査の一環をなすものであった。

一回目の調査は、一九七三年一〇月、滋賀県野洲郡中主町五条で、二回目は同年一二月、守

山市水保町中野で行われた。そして三回目は、一九七四年二月、兵庫県氷上郡氷上町稲継へ出かけていった。滋賀大生数人と、京大生数人が参加した。

仕事は、調査票と記念品のせっけんを一個持って、個別に農家を回り、お話を伺うのである。農協などの施設に、農家の方が集まってくれて、そこで聞き取りが行われたこともあった。質問は、所有する農地の広さ、作物の内容、収穫高、所有する農機具、働き手、農繁期の共同作業、休耕地の現況、広さ、作物の販売方法、最近農地を購入したり売ったりしたか、農地の貸借はどうか、などなど。

調査の前や、農家訪問を終えて帰ってきた旅館などで、美崎先生が日本の農村の状況、抱える問題点、政府の政策とその狙いなどについて概要を説明してくれた。しかしその内容はまったく覚えていない。それに対して、私が直接お話を伺った数軒の内容は覚えている。

特に印象に残っていることは、農作業の担い手はほとんど高齢者で、後継者がいないこと、所有農地は一か所にまとまっておらず、合計して五、六反程度で、一町を超える農家はなかったこと、コンバインなどの大型農機具を農協から融資を受けて購入している農家が多かったこと、農協が、減反や資金貸付、作物の販売など農家と密接につながっていること、などである。農業経営についても質問項目にあったと思うが、これはあまり記憶に残っていない。

旅館ではよくお酒を飲んだ。家内が持たせてくれたのだといって、先生が大根の桜漬をカバ

ンから取り出されたのをよく覚えている。うらやましいと思ったのだ。

調査が終わって彦根に戻ってから、集計作業もお手伝いした。しかし残念ながら、この調査の全体や、どんな意義があったのかわからない。そのことよりもこの調査は、ほんの一瞬垣間見ただけではあるが、『生産』の現場をこの目で見た、生きた経済学を勉強したという実感を与えてくれたのであった。

こうして思い出を手繰ってゆくと、美崎先生の面影や、金亀町の先生のお宅の様子がよみがえってくるが、残念ながら一九九七年、六二歳で急逝された。

彦根駅



児玉正治(大25)

滋賀大生と切っても切れない関係に有るもの一つとして、彦根駅を挙げる事が出来よう。岐阜県の大垣辺りの出身で、今なら間違いなく通学する様な距離であるが、当時は米原駅の接続時間が長く、それを口実に偲聖寮に四年間住んでいた。土曜日の講義が終わると帰宅し、日曜日の夜、または月曜日の朝に彦根へ戻って来るといふ学生生活を送った事から、何度も彦根駅の改札を通った。その彦根駅との最初の出会いは、昭和34年の夏のことである。両親と姉、そして生まれて間もない妹の五人で浜大津からの琵琶湖周航の旅に出た。当時、牛(農耕用)を飼っていた農家にとつて、日帰りとは言え、琵琶湖周航というのは大変な旅行だった。大垣駅を出てすぐに上り特急「こだま」とすれ違った。すれ違ったのだから余計に速く感じたのだろう。今のように新幹線が何往復も走る時代とは違う。「こだま」に乗るといふのは、あこがれというか、夢そのものだった。蛍光灯に照らされてキラキラ輝く後部愛称板を今

でもはつきりと覚えている。浜大津からは今は無き「玻璃丸」に乗り、竹生島へと向かった。竹生島で乗り換え、彦根へ向かった。乗り換えた船が古く、やけに寒かった事と竹生島の石段だけは、記憶している。そうして彦根駅から大垣に戻ったはずであるが、あいにく彦根駅の記憶は全く無い。後に彦根の地に住むことになり、「はてさて、彦根港から駅まで歩いたのだろうか。」と疑問に思い、寮母さんに聞いたところ、旧彦根港の時代は、松原橋が中央を軸として旋回し、船を通したという事であった。旧港湾からなら子供の足でも歩ける。

二度目は、高校三年の春の遠足だった。彦根城、埋木舎、玄宮園を巡った。高校三年生ともなれば当然に受験生である。しかしその時は、彦根に滋賀大があることも知らなかったし、ましてや後にそこへ入るなど思いもしなかった。もつとも入学後「滋賀大が何処にあるか知らなかった。何も知らずに、その前を通っていた。」とい



1974.6.26 大学玄関

彦根東高出身者に出くわしたのだから、その頃の受験情報は推して知るべしである。大学と同様に木造のおんぼろ駅舎だったけれど今となっては懐かしい。4回生になって大学生活も終わ리と思ひ、彦根の思ひ出の一つとして彦根駅の写真を撮った。

あれから三十数年の月日が流れた。彦根駅も新しい橋上駅に建て替わり、駅前も再開発ですっかり変わってしまった。昨年(2012年)開いた25期同窓会の折、何か無いかと考え、おみやげ代わりに配ったのが、この写真である。すっかり色あせ、変色してしまっているが、「まさか彦根駅の写真が出てくるとは、思わなかった。」と喜んでもらった。まさしく青春の一頁である。

改札を抜ければそこが上り線ホームであり、下り線へは、跨線橋を渡った。下りる場合は、西の方の改札から出る。そこを出るとクラブ勧誘の先輩連が手ぐすねを引いて待ちかまえていたというのも、もう遠い過去の話に



1976.5.26 彦根駅

なってしまった。それと今でも覚えているのが「河内の風穴」の石膏模型が有った事である。あの模型、おそらく駅舎改築のおりに処分されてしまった事だろう。

今では彦根へ行くのは、ほとんど車になってしまった。しかし同窓会の時などは、電車で彦根駅に降り立つ事になっている。「いろは松」からお堀端を通り、大学まで歩くのを常としている。同様な行動をとる卒業生も多々居られる事と思う。そうすると懐かしいあの時代がよみがえってくるのである。



1973.5.5 彦根駅 下り快速「近江路」

やさしき彦根



小西 了 介 (大26)

彦根での最初の1年間は、偲聖寮の一室でI君と同室だった。いつのまにかたまり場になり、楽しい日々はあつという間に過ぎていった。談話室での徹夜マージャンや琵琶湖へ飛び込んで楽しんだこと、そして、映画などの企画があつた寮祭など。窓外に広がる琵琶湖の風景も格別だった。

2年目から市役所横の下宿に移った。今では考えられないが現場プレハブ小屋をそのまま使つたような所で、9畳ぐらいと広々していたがベニヤ板で仕切られていた。1階は電気設備会社の事務所で2階の3室の内の1室だった。この事務所の方にも電話の取次ぎなどで大変お世話になった。

下宿ではステレオを買い、聴き始めたジャズを毎日のようにレコードをかけて楽しんだ。ベニヤ板で仕切られただけで、今思えば夜遅くまでさぞうるさかつたであろうに、文句も言われ

ずむしろあの曲が良かったと後日言ってくれるおおらかさであった。ファンクやチャップリンといったジャズ喫茶も彦根にあつて音楽も楽しめた。

一緒に下宿にいたのは滋賀大学の昼間部学生と夜間部短期大学の学生だったが、自由に色々なことを語り合える雰囲気でも飲み交わすことも多かった。その一風変わった雰囲気に関係したのか、後で考えると滋賀大学では珍しい公務員になった者が偶然多かった。3年間で5人が暮らした内結果的に4人が公務員になった。しかも同郷の先輩で、冬休み中に私の下宿を使っていたFさんも公務員になった。不思議なものだ。

クラブ活動も盛んで私みたいな者でも勧誘してもらい、ハンドボール部と尺八部に籍を置いた。当時は出欠を取らない講義も多く、講義よりもクラブ活動に精を出す日々だった。ハンドボール部は先輩のKさんやIさんといった優れた人もいて、東海リーグの一部リーグにも籍を置いた。神社の石段でのうさぎ跳びなど厳しいこともあったが、現在健康でいられるのもそのお陰と思っている。尺八部は昼休みには練習に行き、楽器にうかつた自分が音楽に親しみ現在趣味で音楽鑑賞を楽しんでいるきかけになった。畑先生にも大変お世話いただいた。いずれの部でも先輩方やクラブ員には非常にお世話になり、Iさんには家庭教師の口もご紹介いただき感謝している。

ゼミは西洋経済史の熊野先生に熱心にご指導いただいた。6人の少人数ならではの親しみの

ある、でも手抜きのできないゼミでドイツ語の原書を読むなど充実したものだ。ゼミ合宿やスキー合宿など楽しい思い出もあり熊野先生には大変感謝している。

こうして思い起せば、先生方や大学事務局、先輩方、友人、下宿の方々、そして家庭教師で雇ってくださった方など多くの人間関係に恵まれた日々だったと思う。せめてもの感謝の気持ちを込めてこの原稿を終えたい。

故伊達誠司君お母様からのお便り

太田 昌 伸(大29)

(お便り)

記録破りの猛暑が続いておりますが、お変わりなくお過ごしでしょうか。昨日は懐かしい彦根のお菓子をお届け下さいまして本当に有難うございました。剣道部OB有志の皆様のお心が伝わって参りまして嬉しく感謝の気持ちでいっぱいでした。茨木の方へも送って頂きましたのに私にまでお心遣い賜わり申しわけなく思っています。

滋賀大の時に写して頂いた剣道着姿の大きい写真を亡くなりました後で見つけましてずっと居間に飾っています。夢と希望に満ちて皆様と青春を謳歌していた頃でしょうか。いい先輩や同輩に囲まれて感謝していたことと思います。旅立ちまして一年四カ月未だに信じられない日々ですが、息子は幸せな家庭を築き、職場に恵まれ、精いっぱい頑張ってくれたことを思う時、皆様方との交流が一番支えになっていたと思います。写真を眺めながらよく「頑張った

ね」と親バカを發揮して今はいいことばかり思い出して会話しています。佳代子も孫も表面では明るく暮らしておりますが、心中は辛いことが一杯だと思えますので少しでも支えられたらと思っております。

皆様方の温かい友情を息子にかわり心から御礼申し上げます。皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。かしこ

八月十七日

伊達鈴子

太田昌伸様

同期の伊達君は五十四才で亡くなりました。悲しみを越えられ、周りの方々を思い遣るお母様のお気持ちが窺われます。実際に彦根で過ごした我々以上に深く彦根に思いを寄せておられるのではないかと思います。

昭和五十二年我々は入学しました。戦前は全国高商大会で二度優勝、戦後も昭和三十一年に全国制覇、国立大学では東京教育大学と滋賀大学のみでした。そんなことも知らずお互い剣道でもしながらのんびり学生生活を過せたらと入部しました。間違いなく少数、精鋭とは云えない実力、優勝当時の森師範ご健在、現師範の清水先生若かりし頃、物心両面を支えて頂いた〇

Bの方々、稽古量だけは強豪大学以上でありました。入学したその年、正岡主将のもと十三年振りに全日本出場を果たします。益々稽古が厳しくなったのを覚えております。先輩方から、我々が四回生になれば非常に弱体化すると心配されましたが、伊達君が二回生秋から上段の構えになり躍進、滋賀県大会準々決勝で滋賀県警と対戦、本割で二対二の同点、代表決定戦に私が出て負けてしまいます。この時伊達君が出ていたらと本当に悔やんでいます。みんなで頑張ったなど益を傾けゆくり語りたかったのに残念です。ご冥福をお祈りします。



後列 左より 3人目が故伊達君 2人目が太田
前列 左より 3人目が現師範清水先生

私の人生を変えた滋賀大学



松尾 洋一 (大31)

在学4年間は彦根で下宿し、ラグビーに明け暮れていました。

京都府立洛北高校3年体育の授業でラグビーがありクラス対抗でセンターとして出場し優勝！、面白くて大学でもやろうと決意。1979年4月入学式後の講堂出口で「ラグビー部に入ります！！」と叫んだのが人生を変える1回目のできごとでした。最初は180cm 64kgのモヤシでしたのでケガばかり。未経験者であった私を顧問であった三神憲一先生や山田康博、中島貢、中村敦則、山田浩一、金澤誠司、野村浩平、田中良幸の同期生や先輩後輩に叱咤激励いただきリーグ戦に出場できるまで育てていただきました。卒業でき、OBとして現在も彦根に戻る機会があることに大変感謝しています。私の財産です。

One for all, All for one を心と身体に刻んだ青春時代。ラグビーはトライにつながるまでのプロセスを尊重し、タックルやイーブンボールを果敢に取りに行く勇氣、仲間を信じて前へ進み

ボールを生かし続ける技術、時間内に主将一任されてチーム一丸となつて戦い、終了後はノーサイドで互いを称えるかつこいいます。彦根城で吐きながら走り負けない走力を、体育館横のトレセンではケガに負けない筋肉を、八坂グラウンドでは雨・風・雪の悪天候でも基本プレーやスクラム技術、チームとしてコンビプレーを繰り返し暗くなるまで練習していました。

夏の菅平合宿は人生最大の試練であり挑戦でした。早朝からの走りこみと基本練習、昼食を無理やり食べて午後は強豪との試合、夜は先輩のいびきと一週間とても厳しかったです。よく逃げずに最終日まで頑張れたのは同期のおかげです。新入生のやらされるから、準備してやる、目標を持って挑戦するに年々意識が変わっていました。

ラグビーからものはものごととはやってみないとわからない、やるかには勝つ。大きな壁に直面しても体力と精神力、自信と前向きさで乗り越えられると。

彦根ではほかにも新歓合宿で酒の飲み方を、下宿では麻雀の面

大学1 回生同期一同
S54.10.21
八坂グラウンド 部室前

金澤 中村 中島 野村 山田(康)
山田(浩) 松尾 田中



白さを、アラビカではチーズインドッグの美味しさを教えられました。

4 回生最後のリーグ最終戦。1982年11月21日全勝同士で京都教育大学と京都府立大学グランドで戦いました。私はリザーブでベンチ入りし、いつでも出れる状態でいました。互角の勝負でしたが惜敗!! 負けた瞬間試合に出場できなかった悔しさ、東大阪花園グランドへ最高の仲間たちと入れ替え戦をできない寂しさと、4年間やりきった達成感、三神先生とラグビー部と陵水ラグークラブへの感謝の気持ちが入り混じって植物園の夕陽をいつまでも見ていたことを思い出します。

4 年間滋賀大学体育会ラグビー部に所属したご褒美に卒業式では同じ講堂出口で後輩が生れてはじめて胴上げをしてくれました。人生を変えた2回目のできごとです。

就職活動で小倉教授にご紹介いただいた石田衡器製作所(現イシダ)へ会社訪問しました。人事面接から数日後に最終面接があり石田隆一社長(現会長)と初めてお会いしました。国立大学でラグビー経験者というのですぐに名前と顔を覚えていただき、訪問3回目で内定をいただきました。同志社大学OBでラグビー



大学1回生 夏合宿終了日 S54. 8.13. 長野県菅平

ファン。当時林、大八木、平尾の最強チームを応援されていました。石田衡器製作所では卒業生の先輩谷川泰正さん(大学30回卒)、後に宮本寿一さん(大学32回卒)、福田弘和さん(大学33回卒)と出会いました、人生を変えた3回目のできごとです。

1983年に新人社員として配属されたハカリ営業部の上司田中哲男係長も滋賀大学の先輩(大学18回卒)でした。システム営業の基本と世の中を変える新規システム企画開発のおもしろさを教えていただきました。

1984年膳所高校でラグビー部をされていた池田哲雄部長の部下として東京勤務に。「物流を3本目の柱に」を合言葉に新分野への挑戦を奨励いただきました。

1989年セブンイレブンのメーカー共同配送センター店舗のロジステイクスと中食(弁当惣菜パン麺)工場のシステムを核とした「物流部門」を社内で立上りました。計量器製造販売が主であった先輩方が築かれた営業部門を2から3にする新規事業領域への挑戦を託されました。人生を変えた4回目のできごとでした。

大学3回生 リーグ戦 対龍谷大
S54.11.8 京都薬科大G
リーグ戦初出場 ロック4番

入江 松尾 土田
2回生 3回生 先輩
4回生



試行錯誤の連続で失敗もたくさんあり、負けた悔しさ、孤独との戦いに挑む毎日でした。滋賀大学ラグビー部で培った 与えられた環境下で、知恵を使い時代を先読みし、弱みと強みを分析して、自分と仲間を信じて前向きに努力を惜しまず歩んできた結果、客先や会社との信用、信頼関係を築きました。

創部当時より一緒に頑張ってきた仲間たちは成長し皆幹部として活躍。ラグビー部の後輩村田智史さん(大学54回卒)も仲間に加わりました。

1999年から2008年物流営業部田中部長と松尾次長の滋賀大コンビ(石田隆一社長から当時このように呼ばれていました)で物流事業計画(シェア拡大、売上利益増、人材育成、新製品企画などの立案)を託され、会社の経営計画発表会に出席し、部員を代表して方針発表をさせていただきました。

2003年には海外市場への挑戦として中国湖北省、山東省の物流センターを稼働。中国国内でも初導入ということで国や省のモデルに指定されました。

2011年からは上海に単身赴任で駐在。北京・成都・青島のセブンイレブンと上海のファミリーマート共同配送センターを稼働させました。中国で物流事業領域の拡大と後進の育成をしています。

大学卒業後30年が経過しましたが、滋賀大学で学んだことをこのように振り返れることはとても幸せです。現役の皆さんへは、大学4年間を通じて社会人の基礎となる考え方や人生を変えるもの、社会人として強い自信になる何かをつかんでもらいたいと思います。私がつかんだ「信は力なり!!」は生涯を通じて座右の銘にしています。

良き先輩・同輩・後輩との出会い



山下 勝 義(大31)

私にとって、大学生活の4年間はバドミントン部での部活が常に中心にあった。(何をしに大学へ行ったのか?)

高校時代に、バドミントンをしてきた(それほど強くはなかったが)ので、気軽な気持ちで大学でもやろうと思って入部した。しかしそれが大きな勘違いであった。大学のクラブは体育会組織がしっかりとしており、練習も厳しく、これは大変なところに入部してしまったな、と後悔したものだ。練習が終わっていつも同輩と話をするのは、いつ辞めようかというものばかりだった。けれど誰も自分から辞めるとは言い出せず、結局そのまま部活を続けることになってしまったのだが。一方で確かに練習はしんどかったが、練習後は先輩達に晩飯を奢ってもらったりして結構楽しいこともあった。

部活を通じて身についたことは、先輩達への礼儀であった。日常の挨拶は勿論のこと、いろ

んな面で上下関係を覚えた。結果そのことが社会人になって大いに役立つことになるのだが、その時はそんなこと考えたことはなかった。

そうした私達同輩も2回生、3回生となり、後輩ができて、今まで先輩達に奢ってもらっていたのが、奢る立場になっていった。なぜか後輩たちに奢ることが、当たり前で何の違和感もなかった。上級生になってみて、先輩達の苦勞が少しわかってきた。後輩達への指導や、練習方法など、今のやり方が正しいのかどうか悩んだこともあった。

大学の4年間は結果的にあつという間に過ぎ去り、社会人になってからも部活で養った上下関係や体力のおかげで、五月病になることもなく学生気分が抜けていった。その点では、途中で辞めることもなく最後まで部活をやりきったことが今振り返って良かったと思っている。

今でもバドミントン部のOB会が毎年開催されており、都合のつく限り参加している。現役の学生や、大学時代に一緒に汗を流した先輩・同輩・後輩、あるいは学生時代には面識のなかった先輩方と会って当時を懐かしんだり自分の日常生活に刺激を与えてくれたりしている。これからでもできる限り参加したいと考えている。

何か取り留めもない話となってしまうましたが、滋賀大学経済学部に入學し、4年間彦根で生活したことが本当に良かったなど、今この原稿を書きながら、感じている。

陵水フィルハーモニー管弦楽団



横井 隆 幸(大33)

今年の9月15日にある演奏会が開催されました。陵水フィルハーモニー管弦楽団(以下、陵水フィル)の第6回演奏会です。台風18号が迫るあいにくの天候でしたが、無事に終演を迎えることができました。この陵水フィルは、滋賀大学オーケストラ(以下、滋賀大オケ)のOB・OGが実行委員会形式で企画運営しています。この演奏会を成立させているのは、昔の仲間やお世話になった方、懐かしい街並み、そんな音楽を通しての彦根での結びつきかもしれません。私が彦根を訪問する動機も、やはり彦根での音楽活動にあります。

滋賀大オケは、私が入学した1981年(昭56)に発足しましたが、きっかけは「オーケストラをつくりませんか?」という吉田修教授の呼びかけでした。「君たちが4回生の時に、第1回の定期演奏会を開きましょう」という力強い目標。「弦楽器をやってください。近くに面倒を見てくれる人がいるから大丈夫」。紹介されたのは、大学近所にお住まいの加納明男先

生。褒め上手なご指導と限りないご好意に甘えながら、地味な練習に明け暮れました。更に、加納先生が主宰する彦根室内合奏団（以下、合奏団）にも通い詰め、頼りになる社会人に見守られながらただひたすら力を蓄えることに専念できた、幸せな学生時代を過ごしました。そして、第1回定演ではベートーヴェンの交響曲第7番を演奏しました。会場は大学講堂で、1984年（昭55）秋の学園祭の出し物のひとつとしての開催でした。

それからが大変でした。卒業後は、ヴァイオリンを練習する環境に恵まれず、自分の気持ちにも負けるような社会人時代が長く続き、加納先生からの「ヴァイオリンはいつ再開するんだね？」という毎年のご連絡にも言葉を濁すばかり。しかも、気後れのため学生さんとの交流もほとんどできず、学生さんと加納先生の関係が変わってしまったことを知っても、自分の無力さ故に何も考えられませんでした。吉田先生が滋賀大を退官されると伝え聞いた時は、その最後の演奏会となる第15回定演に駆けつけたものの、過去にOB会設立に失敗した経緯もあり若いOB・OGまで一緒にという流れ



には至りませんでした。

そして、2004年(平16)のある日、『滋賀大オケのOB・OGで演奏会をするので、参加しませんか?』という突然の連絡。最初は躊躇するものの、何か期することがあったのか翌2005年5月のある日に彦根を訪問したことが幸いし、『またやってみよう』とようやく自分の中の歯車が動き出しました。しかし、問題は2つありました。ひとつは、無謀な再出発であるので、一曲だけの出演にすらもらって猛練習。もうひとつは、滋賀大オケのOB・OGの演奏会を開催することを、私から加納先生に直接お伝えして御礼を申し上げたい。何より、伝え聞いていた滋賀大オケと先生の関係が変わっていたことに知らないふりをしてきたことを、どうしてもお詫びしたかったということ。それもどうにか済ませることができました。

いよいよ、その陵水フィルの演奏会が開催されました。2005年9月でした。加納先生の姿を会場にお見かけしたので、演奏後の打ち上げ会場から電話をかけました。電話は、私



から団長、コンマスへと替わりそれぞれ御礼申し上げました。あとから考えれば、この電話でお話できたことが如何に幸運であつたか……。後日、先生が脳梗塞で再入院されていることを知ったのも束の間、訃報に接しました。茫然自失……。真つ白な頭の中に浮かんだ言葉は『間に合つて良かった。』。自分が演奏する姿をもう一度見ていただけたことは、悲しみの中の安堵感でした。お手伝いに駆けつけた通夜でも告別式でも人の列が絶えることはなく、私も彦根での時間の積み重ねを改めて実感しました。滋賀大オケの古いOB世代や、この葬儀時のほとんど交流のない学生さんが訪ねてくれた時は涙に暮れ、告別式では先生を偲ぶ演奏にも参加でき、『思い残すことはもうない、というのとはこんな気分なのだろう』とまで思えました。

その翌年のことです。かつての合奏団のメンバーで、加納先生の追悼演奏会を開催しました。その時初めて、かつて私たちが毎日のように先生のレッスン室に押しかけていた頃が、実はヴァイオリンの生徒さんも一番多いご多忙な時期であつたことを知りました。そして、心筋梗塞に再度襲われた最後の時まで、先生は愛用のヴァイオリンを手放さなかつたのだそうです。あまりにもカッコ良すぎて、改めて痺れてしまいました。それから、いつか加納先生に報告する自分の姿を念頭に置くようになりました。

「ヴァイオリンはいつ再開するんだね？」という問いに、さてどれだけのことをお答えできるのか？彦根には練習でよく通いますが、自分に負けていた期間が余りにも長いので、やっても

やっでもまだまだ足りないという気分。滋賀大オケの定演は、今年2013年に第30回を迎えます。あとに続いてくれた後輩のみなさんのご尽力に感謝しながら、自分の中でどんな新しい答えが浮かぶのか？とても楽しみます。

わが青春の彦根



高井 マサ代(大38)

生まれて66歳になる今日まで、前だけを向いて走って来たように思います。そういう意味では彦根時代だけではなく、今でも青春を謳歌しています。青春の特権とは、失敗を恐れないこと、無知であること、柔軟であること、未来があること、そして時に無謀であることだと思っています。

私は昭和45年京都薬科大学を卒業後、16年たって共通一次試験を受け滋賀大に入学しました。入学してみると社会人入学制度があつて、それで入学した人が数人いましたが、そんな制度があることすら知りませんでした。

政治に関心を持ち、政治家になるためには法学部に行かなければと考え、前年に京大の法学部を受けて落ちました。政治家といえば衆議院・参議院しか頭になく、そのためにはしかるべき大学を卒業しておかねばならないと考えた結果の事でした。今は、政治は法律でなく経済だ

と思ひ、経済学部を卒業したことを誇りに思っています。そして今は三好市の市議員をしています。市会を牛耳っているのは、中学・高校の落ちこぼれで、私は浮いていることもお伝えしなければなりません。

毎年夏休みの終わりに50枚の論文に応募しました。2回生と3回生のとき入賞しました。その時の論文が一生を左右するような結果となりました。3回生の時、知らない先生から呼ばれました。教授の部屋に入ると、私の論文を読んだと言われました。そしてこのような論文を書く人はどんな人会ってみたいとだけ言われました。感想は何も言わず、ただ会っただけ。地味なタイプの先生でした。

当時山科に住んでいて1時間の汽車通学でした。列車の中で予習復習をしたものです。ドイツ語ならば、少しかじっていたので楽なのに、フランス語を選択して、汽車通で一緒になったフランス語の女性教師に40歳でフランス語は大変ですね、などと言われたものです。

社会人学生だけでコンパもしたし、スキーにも1週間くらい行きました。その間当時中学生だった一人息子はどうしていたのだろう。全く記憶にございません。社会人学生の一人とは今でも年賀状のやり取りをしています。学生時代の財産といえは友達ですが、滋賀大で得た友達はその一人だけです。

中国人の女子学生がいて、私の家に来てひっこしの手伝いをしてくれたことがありました。

2日くらい泊ってくれて、手伝いのお礼に石鹸を送ったけれども、それきりでした。

大雪の日、彦根駅で大勢タクシーを待っていました。私が呼びかけて乗り合わせてタクシーに乗ったこともあるし、呼びかけても答えず私一人でタクシーに乗ったこともありました。いつもは自転車に通っていました。社会人学生の中には新幹線で大阪から通っていると聞かれました。

わが青春の彦根とは、自転車だったかもしれません。雨の日も晴の日も自転車で通いました。堀端にカメラを構えている男性がいました。不審と不安で、風を切って通り過ぎました。彦根での4年間の写真は1枚もありません。

かけがえのない、私の「彦根」



岡 雅 之(大4)

あなたは「彦根」から何を思い浮かべるだろうか？周囲のかたに伺ってみると、すっかり有名になったひこにゃんを始め、歴史にゆかりのある多彩な回答を得ることができた。そんな私の心からは、いくつになってもやはり、古城に添うように並び立つ学び舎、そして湖岸からの遠景美しい偲聖寮の姿がありありと広がり、まるで昨日までそこで生活していたかのように思われる。

生来、高校時代までを地元、親元で過ごした私にとって、それまで訪れたことのなかった彦根での大学生活は、文字通り期待と不安で入り混じったものだった。ひとり黙々と受験勉強していたそれまでの生活を一転させ、先輩や同級生の友人との交わりを大切にしよう、相部屋での寮生活を選択。威圧的な印象漂う諸先輩にかこまれ、当初はおっかなびつくりな毎日であったのも、今ではとても懐かしく思える。ゼミを始めとするなかなか難しい学業、昼間や放

課後に行われた華やかなクラブ活動、そして深夜まで仲間と他愛ない対話を楽しむ寮生活の「トライアングル」を満喫する四年間には、喜怒哀楽をとり混ぜた、軽く語りつくせない思い出がいくつも生まれ、そして私の心に残ることとなった。

古めかしくも愛着あるわが寮から、四季折々美しくも穏やかに波打つ琵琶湖を横手に、自転車で颯爽と緑色の校舎まで通学し、そして帰宅を繰り返す毎日。あの折にはどんなことを考えていたのかな、と何年も経てふと思ひ返すことがある。すっかり社会人となった今となっては取るに足らないようなことながら、学業や人間関係、そして将来の進路について、自分なりに懸命に悩んだり、気持ち膨らませたりしていた。「彦根」とは、私にとってのかけがえのない青春そのものであったと、そのつど感じさせられる。

徳聖寮には、いまでは女子寮となつているところに、かつて寮生みなが相並んで夕食をとる大食堂があつた。その大食堂から望む、空を赤く染めながら遠く比良山系に沈む夕陽、それをきらきらと浮かべる穏やかな湖面、このたとえようもない夕景に、私は食事をとりながら、よく心を奪われていた。彦根を離れてから、もう一度その景色を楽しみたいと思いつつ、今日までできてしまった。このたびの執筆をよい機会として、新しくできた家族を連れて賑やかに「彦根」を味わい、懐かしの青春時代にひたろうとひそかに計画している。

彦根での輝かしき青春時代



尾 中 治 幸(大58)

寒露の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。木々の梢も色づいて参りました。皆様には、御一同様お元気のことと存じます。日頃の疎遠をお詫びいたします。

初めまして。2010年度卒業生、地域経済学専攻の尾中と申します。専攻内容を活かし、現在は地元の行政官を務めております。拙い文章で大変恐縮いたしますが、我が母校の想いを綴りたく、今回のエッセイ集に応募しました。

大学で一番の思い出はサークル活動です。実は1回生の時、陵水会館で行われた現役公務員のOBOG会からお誘いを頂き、お話をさせて頂く機会がございました。お酒の席の中で、「うちの大学の講義で十分に公務員試験を突破できる。ほとんどの公務員の一次試験を網羅している。なのに、大学が公務員養成に力入れていないのはおかしい。ベースがあるのに何も支援ないとはどういうことだ」「公務員受験組は民間就活組と違って、大学のサポートもないゆえに、

孤独に戦うことになる。民間就活組の仲間が内定を次々勝ち取ってる中、自分は受験さえできなくて本当に焦るし、なにより官庁の情報など分かち合う、受験仲間がいなくて苦しかった。「公務員試験へ孤独で戦うのが嫌だったから、京都にある公務員専門予備校へダブルスクールで通っていた。学費が痛かったし、なにより大学と両立して通学するのはかなり苦しかった。」と、苦勞話がたくさんあり、厳しい現状を知ることになりました。

そこで決意しました。「この現状、なんとかしなければ……そうだ。サークルを作ろう。」

若気の至りです。先輩方に「俺がやります。サークル作って、公務員受験者を支援する活動をやっていきたいです。」と何も考えもまとまってるのに、お酒の力もあつたのか、その場の勢いでこのように言ってしまったものですから、相当喜ばれてしまい、なにがなんでも応援するぞと大先輩方から十二分の期待を込められてしまいました。

それからが本当に大変でした。メンバー集め、活動内容、実績の積み上げ方、大学との連携方法、顧問の先生探し、メンバーのモチベーションの維持、引き継ぎ、役割分担等々：問題山積のスタートでした。幾度もトラブルはありましたが、メンバー全員で協力し運営を頑張ったおかげで、現在、サークル出身の行政官が30名を超える実績を残し、後輩が引き続き頑張ってるサークルを運営してくれています。設立当初は辛かったですし、今思えば1回生という分際になにやってんだと思いますが、強い自信を得れる経験を味わえました。

こんな所で要望するのは間違いかも知れませんが、同じ彦根にある県立大学などでは、大学が公務員養成講座を開催し、民間就活と同じように、公務員養成にも大学が全力で取り組んでおります。個人的な思いで誠に申し訳ないのですが、滋賀大はせっかくコア科目という厳しくて得れるものが大きい基礎学問があり、昨今の不景気で公務員受験者が多数増加しているにも関わらず、現在も大学側で公務員受験者へのサポートがない状態は如何なものかと思います。もったいないと思いますので、ぜひ支援を求めます。

最後に、彦根での思い出としては、きざわで飲んだあとのスイスのオムライスが本当においしかったです。飲んで、遊んで、勉強して、バイトして、ボランティアして、恋愛して、ゼミで現場に行つて実情を知つて、寮で麻雀して：輝かしい思い出は、数えだしたらキリがありません。本当に楽しい思い出を滋賀大学で体験することができました。今の自分は、滋賀大学を卒業したからこそ、いるのだと思います。

本当に有難うございました。雑文ではありますが、感謝の思いの丈を述べさせてもらいました。



遅れてきた大学生



谷口

廣(大59)

「35才の高校生」というテレビドラマが在ります。私の場合はそれどころか40才の年齢差を無茶振りしたい老いの手習いでありました。滋賀大学経済学部創立90周年記念エッセイ集発刊にあたり、創られたドラマ脚本ではなく、私が遅ればせながら経験した青春の一端を知って頂きたく寄稿を決意致した次第であります。

春は桜に彦根城内・堀端が薄紅色に染まり、秋には紅葉が天守閣を鮮やかに囲むがごとく彩る。そのような四季折々の豊かな自然の中で、滋賀大学経済学部キャンパスに迎えられてから早6年を超える時の流れを見ます。

当時の私といえは、取り戻せるはずもない過去を何とかしたいという「あせり」と、周りの人たちとどう接していいのかという「困惑」ばかりの毎日で、このような環境の急激な変化はそれまでの「経験則」が完全否定されたようでいきなり5月病に陥ってしまい、入学したこと

をひどく後悔するようになっていました。学業以外にも問題を抱え行き詰っていたところを若い六波羅蜜学友に励まされ、どうにか卒業論文にたどり着くことが出来た事、今なお感謝の念は尽きません。

仏教用語にある『六波羅蜜』とは、「布施」声をかけ励ます。「持戒」心安らかに日々を送る。「忍辱」相手を許す。「精進」努力を惜しまない。「禪定」心落ち着いて物事を行う。「智慧」物事の本質を見極め対処すると在ります。

ゼミでお世話になった先生方や仲間たちもまた六波羅蜜の人達で本当に恵まれたなと実感しています。テレビドラマは視聴率を気に懸ける余り、面白可笑しく自分勝手な考えや利他的な感情で悲惨な事件を前面に表現しますが、私の周りの先生・友人すべてが「有り難い」存在でありました。人々は日々様々な人と関わり合って生きています。感謝の心を忘れず、日々の触れ合いの中にあつた小さな感動の積み重ねこそ、人として本当の幸せを感じた私でありました。そのことはゼミの課外授業でも大変心に沁む事となりました。原村健二先生、鈴木康晴先生は学者ではなく財務省からの出向で、私個人が到底立ち入ることを許されない場所にも数多くお供させて頂きました。これは、就活はじめ卒論作成に追われる若い学友達にとつても得るところ大であつたと思います。つまりは先人の中に身を置き、その言葉を素直に聞くそれは自身と対峙する場でもありました。

たとえば、自然を見るととき、木だから花だから石だからという固定観念は除外しなければなりません。石は四季の中でその表情を変えるし、草木も昼夜でその趣も変わります。その生ける様を私たちは無心に感ずべきなのです。しかも森羅万象日々変化し、再度同じ道を辿るとき、また異なる表情に囲まれます。その繰り返しの中にこそ若人は自らを発見していきます。この自分発見の素晴らしさと、そこで得る歓喜体得を両先生は教えて下さいました。言葉に尽くせぬ思いは終生変わるものではありません。いつの日にか経済学部キャンパスへの道を訪ねてみたいと思う今日この頃であります。合掌



2010年(平成22年)11月 大阪読売新聞本社訪問時のひとコマです。
皆の表情が堅く「何かやって下さい」と言われて……
前列 右が先生 左が私です。

彦根から世界へ



山脇

薫(大60)

私は、大学生活の大半をSIFE(サイフ)というサークル活動に費やしました。活動の内容は主に、観光産業を通じて地域活性化に取り組みというものでした。あまり知られていませんが、彦根には国宝彦根城だけでなく、その他にも多くの文化遺産があります。彦根を訪れた観光客に、よりまちの魅力を知ってもらい、更には商店街へ呼び込んでいかにしてお金を使ってもらうか、といった仕組みを考え取り組んでいました。

それらの取り組みは、私たち学生だけでは成し得ないものでした。大学の教授からアドバイスを頂くと同時に、活動協力をお願いをしに商店街へ足を運ぶ毎日でした。初めは、学生である私たちとまちの人との距離を感じていましたが、やり取りを重ねるうちに、まちの人たちの温かさを知ると同時に、様々な協力をして頂けるようになりました。また、商店街の方からイベントの誘いを受けたり、私たちの取り組みに対する提案を頂くこともありました。商店街の

イベントへ参加して一緒に盛り上げたり、ゆるきゃらまつりでは着ぐるみに入ったりと、彦根のまちや商店街の人々との想い出がたくさんあります。

また、SHEEのメンバーひとりひとりが全く違う性格で、このサークルに入らなければ、接点すら持たず出会う事もないような者が集まっていました。それがまた、よかったのかもしれない。異なるもの同士、互いの長所短所を補いながら、様々な意見を出し合うことによって活動を発展させることができました。何度もぶつかり合い、ときには激しい言い合いとなったこともあります。今では懐かしい思い出です。

SHEE(サイフ)では、年に一度、日本中の大学の学生が集まり、各々取り組んできたプロジェクトの内容や成果をプレゼンして競い合う大会があります。いわゆるビジネスコンテストのようなものです。私が代表を務めた年には、その国内大会で優勝し、米国防サウンゼルスで行われた世界大会へ日本代表として出場することができました。プレゼンは全て英語で行うため、ネイティブの先生に付きつきりでご指導頂き、世界大会へ向け猛特訓しました。また、各国の文化の違いを乗り越えるようなプレゼンに仕上げるために多くの方々にご指導いただきました。その結果、世界大会ではベスト十六入りを果たすことができました。世界大会には一〇〇ヶ国以上の大学が参加しており、各国の同世代の方と交流した際には、彼らの意識の高さに大変刺激を受けました。

SIFEでの経験は、私の世界を広げました。大学を卒業し、結婚もして今では子どももいますが、それでもなお、多くの人と出会い多様な価値観に触れもつとつと学びたいと感じます。SIFEでの活動を通し、常々アドバイスをしてくださった先生方や協力してくださった商店街の人々には、本当に感謝しています。SIFEでの経験と寝食を忘れ共に活動に励んだ仲間は、私の生涯の財産です。

封印された青春の日



外村 元 三(短上)

私は昭和31年3月に滋賀大学経済短期大学部を無事に卒業することができた。母子家庭に育った私は、銀行員の姉の収入が頼りで大学進学は諦めていた。ところが夜間の短大が創設されるとのことで急に受験を思い立った。

色々と手続きの遅れもあつてのことだろうが開学は9月の始めだったように記憶している。私は昼間は愛知川町にある刺繍工場で下絵書きの仕事をしていて、一枚いくらという能率給で、時間的な制約はゆるやかだった。

二回生になって、私は授業料免除の申請をして受理された。

私は近江鉄道で通学していたが、授業が終わると急いで帰宅する毎日だった。他府県から来て彦根で下宿している人達もいた。彼等は昼間部を受験して失敗した者達のようにだった。公務員として勤務している人達も多くいた。彼等はやはり短大卒という資格を求めていたのだら

う。私も地方公務員三級職の試験に合格していたが、なかなか就職難の時代で職場に空席はなかった。

ある時、近江学園の事務職の面接に行った時のこと、一人の採用に対して50名ほどの人が呼ばれていた。私は啞然として言葉もなかった。行政のやり方に疑問を持った。

県立愛知高校からは高橋嘉代子さんも一緒に入学した。彼女は高校時代新聞部に所属していた。私達は文芸部を立ちあげ、機関誌「ともしび」を発刊した。三回生になった時には部員も10名くらいになっていた。高橋さんの自宅で食事を開いたこともあった。

英語の杉本長夫先生は詩人としても活躍しておられた。私が三回生の時、一回生の八木裕彦さんが滋賀文学祭の詩の部で知事賞を受賞されたことは刺激的であった。その後、近江詩人会でご一緒した時期もあったが、特に親しい間柄ではなかった。

三回生になって私は、同じ愛知川町にある平岡経理事務所に移ることになった。帖簿の記帖の仕事だった。こちらの方が将来就職した時に役立つと思われた。

就職については芳谷先生にお世話になった。初めての卒業生なので先生方のご苦勞も大変だったと思われた。私は商社は苦手なのでメーカーを希望した。

綾羽紡績株式会社は彦根高商の卒業生河本嘉久蔵氏が社長の会社で創業は昭和21年10月、戦

争から復員して来た若い経営者で元気にあふれていた。

短大からは6名が受験し、幸い私一人が合格した。本社は大阪の本町にあり、工場は京都と膳所にあった。

綾羽紡績株式会社は多角経営を進めて大きく飛躍した。後に社長は政界にも進出して、参議院議員となられた。私の入社から経済学部の卒業生も採用されるようになって今日に至っている。

短大一回生から



廣瀬 喜一（短一）

年々、花が咲き、四月に新学期がくる。

六十年前、昭和二十八年は吉田首相の「馬鹿野郎」発言で、開校が六月にずれ込んだ。当時、経済学部には、小・中・高校の友が十一人。

三年遅れての就学に、内心一入のものが、一方生活は竜王町、勤めは県庁、近江八幡から、夜の彦根駅は八時半が最終だった。開学が遅れたため暑い夏も授業を、帰れない夜は護国神社や堀端を徘徊した。

幸い九月から彦根県事務所産業課に勤務、校舎近くの石ヶ崎町で下宿を始めた。

家族が祖父・母の三人、安い月給で、食べるだけの野良仕事を続けた。

学校では奨学金を、年の瀬には、二人の軍人恩給、遺族年金が復活になった。

新しい職場には、妹背を契る人が居て、翌年四月から、税務に席を移して、手当も増えた。

三十年一月から、住処を上瓦焼町に移して、新婚生活を、日曜祭日は帰宅し供に田畑で汗を流した。暮には長女が誕生。

晴れて、翌三十一年三月、卒業証書を手に。

同時に成績証明書を二部とり、一部は人事課に、一部は子供達の通信簿と共に、筆筒に残している。

勤めも加齢に伴って職責が加わった。昭和四十七年議会事務局で、森順次先生の指導の下、県議会史を、総選挙時には「明るい選挙推進委員会」会長をして居られて、選挙管理委員会との関係をお願いする次第だった。

小倉栄一郎先生には、昭和五十二年食品流通担当、先生は「卸売市場整備」座長を、五十五年から、流域

下水道実施に当っては、「都市計画審議会」会長をされ、その都度お宅に伺い、ご意見を拝聴した。

一方、県行政に政治力が必要、国政に、宇野宗佑先生、河本嘉久蔵先生、ご兩人には公私に



亘ってのご配慮を賜わった。

県下の首長には、西田大津市長（4）をはじめ、奥野近江八幡市長（9）、松宮長浜市長（22）、山川米原町長（16）、中川多賀町長（23）、横田愛東町長（15）が居られて忠告と激励を、ご支援も戴けた。以上の経過は本校を卒業後に「県庁職員陵水会」で牧之段会長（別7）、西岡先輩（東5）のあとを汚すことになっての事、在学中石田武夫先生の中国語履修が、友好都市湖南省からの来県に、退職直後の北京、瀋陽、長沙九日間一人旅に大変役立った。

第二の勤めが、商工会連合会で、越後和典先生、北川弘先生に親しくして戴けた。

経済界も多くの先輩方にお世話になれた。

古希を向えて、皆様のお陰で、叙勲を、我家では祖父父三代の栄誉となった。

八十路の今、鬼籍を告げられても追憶は、世帯盛りの東京勤務、銀座、赤坂、新宿と夜の公用族、中でも人形町京



樽のあの人は、多忙な彦根時代に始めた尺八、県三曲協会設立から係って、宮城道雄直門の先生ご姉妹は、下水道事業でご迷惑をお掛けした。

井伊市長様からの白扇に「一期一会」と、夜のお城を験に、偲聖寮を唄って、母校と陵水会に栄光を祈じます。謝々

我が青春の彦根



大島 一彦(短7)

昭和34年春陵水会館へ続く校舎の道には桜が満開だった。私は大学受験に失敗し浪人を決め込んでいたが、父(彦根高商3回卒)の勧めもあって、経済短期大学部3年間と経済学部聴講生としての1年、通算4年間を滋賀大生として過ごした。彦根での生活は私には二度目である。昭和18年、私が三歳の時激化する戦争を案じた父が母と私を彦根に疎開をさせてくれたのが最初であった。お陰で名古屋の大空襲で家を焼かれはしたが難を免れた。当時の琵琶湖は澄み切った美しい湖で、シジミを掬えばすぐにバケツ一杯になった思い出がある。疎開生活は厳しく、食べるものも衣類も何もない中を間借りしながら、小学校二年生まで彦根で生活した。再び名古屋から彦根に来た私は、短大生ではあったが経済学部の卓球部員として入部させてもらい関西学生連盟リーグ戦に参加した。一回生の秋には彦根市民卓球大会において、少年の部で初優勝した。成人の部では櫻井清一先輩(大9)が共に優勝した。その後四年間の市民大会

では四連覇した。二回生の夏に滋賀県卓球大会において個人戦第三位となり、熊本県で開催された第15回国民体育大会に、滋賀県代表選手として出場した。勢いづいたその年の秋には滋賀県第二位となって、念願の全日本卓球選手権大会の個人戦に出場、その翌年も連続出場を果たした。チームとしても滋賀県卓球大会団体の部において経済学部卓球部が優勝をした。今振り返ると、当時の学生は彦根城へ無料で入場できた事もあって、毎日お城の坂道、階段をランニングしながら上り下りした事が、身体の貯金となって実力向上に役立っていたように思う。

経済学部入学を目指していたにもかかわらず、結局卓球に明け暮れた四年間であった。経済学部と同じ先生の授業を受け、ゼミでは大谷孝太郎先生の国際経済学を専攻し当時の貿易黒字時代を学んだ。乏しい知識ではあるがケインズの経済成長理論を学んだ事が私の経済理論の原点になっている。六十年安保の学生運動盛んな頃には、学生委員長を引き受けた。米国の援助無くして日本の経済や防衛は成り立たないと考えていた私は、アメリカ



熊本国体・荻村氏とともに

カとの日米安全保障条約は十年毎に見直すという事を考慮し、ひとまず十年間は様子を見ればよいと思ひ安保反対運動一色の中、安保賛成論を学生総会演壇で述べて委員長を辞した。自己主張の強さは今も残っているようだ。

私への親の仕送りは、月謝、下宿代を含めて七千円であった。当時東京の私学へ通っていた友人は二万五千円の仕送りをして貰ったと聞いて驚いた。私の昭和三十八年卒初任給一万七千六百円を考えると、国立大学であり、彦根という地方で良かった。地方色豊かに、懐かしいアルバイトの思い出がある。家庭教師を主としながら、彦根名物「ゑびす講」の日には銀座の呉服屋さんで大声を出して呼び込みをしながら楽しく働いた事や、昭和三十五年に始まった彦根まつりの行列に彦根ばやしを踊りながら練り歩いた事、長浜のこども歌舞伎の山車を卓球部仲間で曳いた事等もあった。現在も続いている行事に懐かしさを感じる。

体育教官の榎本先生は、バトミントンが得意で、彦根西高の生徒にも教えておられた。体育授業がヨット、スキーといった恵まれた体験をさせてもらったのも先生のお陰と思っている。私が子供の頃から盆踊り好きな事を認めて頂いて、経済学部の体育授業の時間に、ペギー葉山のヒット曲「南国土佐をあとにして」の盆踊りを皆さんに指導した事もあった。特筆すべきは、世界卓球選手権女子シングルス覇者大川とみ選手と、女子ダブルス優勝の山泉和子選手（現、伊藤和子・全日本百勝の偉業達成選手）を彦根に招き滋賀大体育館において世界のプレー

を拜見させてもらった。当日市民大会優勝者の私は光栄なことに、大川選手と模範試合をさせて頂いた。

若い体育助手として日体大出身の山内先生が着任されたのもこの頃であった。それまでに見たこともない軽やかで華麗な演技をされる先生の姿は今でも鮮明に覚えている。

受験失敗を乗り越えながら、卓球部の先輩後輩の皆さんには部活のみならず、練習後には食事や雀荘に足を運ぶ時も常に行動を共にしてもらった。七十二歳を過ぎた今日でも当時のメンバーが集い、毎年古い思い出話を語り、懐かしい歌をうたい青春を思い出している。波瀾万丈の人生を、自然に恵まれた彦根で過ごした幼少時の思い出と、多感な学生時代を共に過ごした友人との絆が私を支えてくれた。さらに今でも陵水会の先輩諸氏と新たなネットワークが生まれている事にも、大いに感謝している。滋賀大学陵水会活動の益々の発展を祈ると共に、後輩諸氏にも積極的な参加をお奨めしたい。



世界選手権女子代表を迎えて

わが青春の街 彦根



福山昌男(短八)

最近、陵水会の名古屋支部長と人を介してお近づきになり、いろいろとお世話になってお
り、今回のエッセイ集への投稿をさせて頂くこ
とになりました。

私は、一九六〇年入学の六十三年経済短期大
学部卒業の(短八)生であります。

その当時の短期大学の学生は、所謂、勤労
学生と志望校へ入学出来なかった為に止むを得
ず入学した、言わば落ちこぼれの学生が混在し
て居たかと記憶しております。私は、後者に分
類される学生でした。もともとの志望がまちま



楽々園を訪れた弟を案内する筆者(左)

ちで、全国各地からいろんなキャラクターの持ち主が集まってきたと思います。北海道・滝川市から鹿兒島・種子島、沖縄までの友人ができました。いわば、多士済済の集まりだともいえると感じていました。事実、卒業後に自ら起業した仲間も多くあり、県庁の部長になったり、銀行の支店長になられた友人もありました。

当時の彦根での彼らとの学生生活は、充実度が高く毎日がとても楽しいものでした。例えば、日中は好みの学部の授業へ出たり、滋賀大レガッタへ出場の為に猛練習をし、フィックス部門で見事優勝したり、仲間と軟式野球のチームを創り、彦根理容組合のチームなどと対戦したりもしました。

又、ロケーションがとても素敵で彦根城周辺での散策は、いつも仲間たちとの団欒の場となり、語らいの中味は、学生生活の過ごし方であったり、時には自分たちのこれからの進路についてなどの話題が多かったと記憶しております。残念ながら、学業についての話題は少なく、難解な哲学の単位をどの様にして取得



滋賀大レガッタ フィックスの部
優勝の仲間たち (四番筆者)

したら良いのかというぐらいしか記憶にありません。

二ヶ所の下宿生活では、いずれの大家さんも面倒見が良く、更には実家から送られた食糧品でコンパをするなど学生同士のいろんな付き合いもあり、とても充実しておりました。今からみれば、下宿生活の設備面では決して満たされたものではありませんでした。例えば、隣室との仕切りは襖一枚というようにプライバシーは全くありませんでしたが、当時はその不便さを感じたことは全くありませんでした。それだけ、学生生活そのものが充実していたとの証しだと思っております。

これらの仲間たちとの思い出話が、隔年に開催される同窓会でいつも話を咲かせております。



下宿でのコンパのひとつ

「青春の彦根」の輝きをいつまでも



岩 根 順 子(短14)

「我が青春の城下町」という青春歌謡曲があり、梶光夫さんという、さわやかな方が歌ってました。高校生のころ応援歌で歌っていた記憶があるので、舟木一夫さんの「高校3年生」と同時期だったはずですよ。

「高校3年生」は、ちょうど東京オリンピック開催の頃、私は高校生でした。今も同級会には定番と言っていていくらいに、参加者で大合唱しています。一方、「青春の城下町」は、「高校3年生」ほどヒットしなかったものの、最後のフレーズに「ああ、青春の 思い出は わがふるさとの城下町」と締めています。まさしく本書のテーマのごとく、梶さんは淡い恋心を歌われたのでした。

滋賀大学卒業生の中には、彦根で過ごされた何年間に、淡い恋心を抱きつつも涙された人、一方にはめでたく成就された人と様々なことでしょう。昭和30年代、旧滋賀大学のグラウンド

で開催された運動会は、市民運動会かと思うぐらいの賑わいで、近隣の市民が多く参加していました。とりわけ前夜祭の市中仮装パレードは、春の開寮祭とともに市民が熱狂したものでした。

私は、生まれも育ちも、そして今も、彦根市民のまま人生をすごしてきました。ほとんど「他人の釜の飯」を食べたこともなく、わずかといえども寄宿したことすらないまま今日に至っています。幼稚園から小学校、中学、高校をずっと彦根城の周囲に通い、最終卒業校が滋賀大学でした。全国はおろか世界中を駆け巡る人も多い昨今、なんとも変化に乏しい人生なのかと感ずることもあります。とはいえ、古来よりの文化が醸成されたこの地に、こよなく深い愛情を感じています。

私の母は大阪で生まれ育ち、女学校の時に彦根に転校し、当時の日記に「彦根は、こよなく閉鎖的で、街



昭和41年10月 車山山頂にて
ユースホステルクラブ我楽苦多の面々と

も人々もなにもかも鬱陶しい」と、移り住んだこの街が好きになれなかったのです。ところが、ここから脱出するどころか、今もわたしたちとともに、文句を言いつつも彦根で暮らしています。母にとっては「住めば都」なのでしょう。

一方、彦根で生まれ育った私は、他所と比較できず、こんなものだと思って若い頃は過ごしていました。

ところが、古来よりの歴史と文化が満ち満ちたこの地をより多くの人々に知ってもらいたいという思いがフツフツと湧いてきたのが、10余年前でした。

私は、卒業後は本格的に父の仕事を手伝ってきましたが、父が小さな印刷店を創業した当時の志「地域のためになる仕事を力の限り尽くす」という気持ちを大切にしたいと思うようになってきたのです。そして平成5年に「淡海文庫」を創刊しました。

これを契機に現在では、牛歩のあゆみながらも滋賀の本作りを進めています。まさに父の志を企業理念ととらえ、陵水会諸氏の、青春の思い出が詰まった彦根・滋賀の素敵を守り続けていくため、私の出来る範囲の努力をこれからも続けたいものです。

我が青春譜

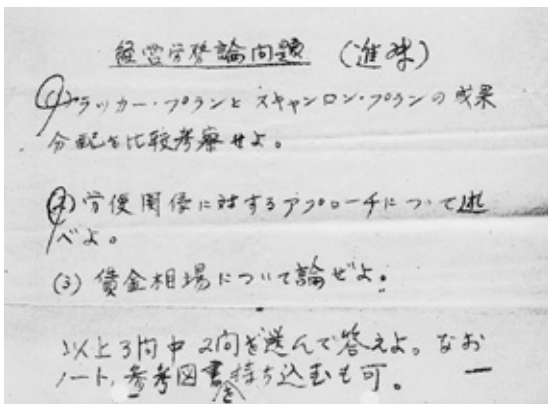


中嶋 篤 仁(短18)

想い返せば昭和45年春浅き頃。私は京都中央郵便局の勤務を終え、夕闇の中、彦根駅から徒歩で大学へ向かい、正門近くの合格者掲示板の前に立っておりました。私の名前を薄闇の中に見たとき、人知れず、やれやれという安堵の気持と何とも言えぬ感慨が湧き起ったのを昨日のように憶えております。それから三年、なんとか経済短期大学部経営2科を卒業させて戴きました。勤務を終えて後の京都↓彦根の行程は大学始業時間に数十分、間に合わなかったのが、年次有給休暇を時間休1時間分割付与という形で職場の了解を取り付けられたのは幸いでした。そんなことで、どうにか卒業させて戴けたというようなことでした。夜学ですから、18期卒の同期生には、高校の教諭、ガソリンスタンド勤務者、酒店自営業者e t c. 種々雑多で、今思えば、なかなか面白い顔ぶれの連中とワイワイやっていたのが懐かしく思えます。楽しい思い出も多々ありますが、中でも岡部助教授(当時)の商品学ゼミは愉快でした。ゼ

ミの一環として市街の喫茶店・田園で先生を囲んで銘柄コーヒーを各種、回し飲みした夜は忘れられません。ヘルメットを被りセメント会社見学もさせて戴きました。当時は食品添加物のチクロとかサツカリンなどの人工甘味料、赤色黄色の着色料公害が社会問題になっていた頃でした。草津のカドミウム米汚染も確か、ありました。

必須である会計学の単位取得試験では、当時の国鉄が遅延し、息を切らせて何分か遅れで教室へ入りました。幸い、試験は受けさせて貰え、単位を修得出来たのは幸いでした。今でも試験の設問が甦ります。「会計公準について論ぜよ」でしたか…。進藤助教授(当時)の経営労務論は当時、労使紛争たけなわの昭和40年代でしたから、選択させて戴きました。先生の「労使関係と成果分配」は今も蔵書にしております。試験は「1. ラッカープランとスキャンロンプランを比較考察せよ。2. 労使関係に対するアプローチについて述べよ。3. 賃金相場について論ぜよ。以上3問中、2問を選んで答えよ。なお、ノート、参考図書を持ち込む可」でした。この



問題用紙は蔵書に今も添付保管しておりますので、そのままです。

体育実技単位取得では信濃大町スキー場へ行かせて戴きました。楽しかったです。

ファイアーストームを囲み、ガリ版刷りの歌集片手の愉快的コンパもありました。

ワンゲル部へ特別参加で穂高連峰に登山させて戴いたのも記憶に残っております。

学生運動の余波で、大学正門がバリケード封鎖されており、夕方、裏門から入ったのも憶えております。

裏門前の鉄板焼き蕎麦は美味でした。他にも数々の追憶が走馬灯のように溢れますがこの辺りで筆を擱くことと致します。

私事乍ら、水本爽涼のペンネームにてWebでブログなどを展開しておりますので、お暇な折りに一度、お寄り下さいますように…。

349

想い出の我が学び舎



大堀 良一（短20）

昭和四十七年四月、入学を許可（経営科）され、当時は講堂で入学式が開かれました。その翌日にオリエン・テイションが陵水会館（現社会連携研究センター）東側の通路で、桜花爛漫の下、開催され、学生の我々は希望を胸に真剣に聞き入った。

私の場合は出身校（現長浜北星高校定時制）で、本学で、経済短期大学部が設置されていた時代で、四十八年のオイル（ニクソン）ショックを迎える直前で、経済状況は余り良くなかった。

さて、憧れの大学に入学した以上、出来得る限り、多くの取得単位を受けたく想い、一回生時に九科目を申請し、目一杯の講義を受けて努力したが、昭和48年12月に父（祖父）が他界し、ショックも有り、二回生時に受けていた、英語Ⅱ（村田教授）を落とし、翌年ロシア語（江竜教授）を受けて合格と云う、苦しい想い出が有りますが、今から想うと江竜先生から、「ロシ

アでは文学のスケールの大きい事、各街の通りは文学人の人名が名付られている。寒い冷下の中、彼らはウオッカで乾杯する！」等、人間味有り、風土文化を取り入れたお話しが、印象深くて良かった。

特に驚いた事は、国立大学系の教授の方が多く、専向色の強い講義が成され、感動した。経済原論の松尾教授（経済学博士）等は、教室に何も持込されず、資本論の基礎構造を分析し、諸法則を体系的に展開され、公式や文献、年号、人名等を黒板に列記され、最前列に位置し、講義内容を速記し、後でマトメたものだった。

又、私の様に、商業高校からの出身者は「簿記論」は、高野教授に出席しても、基礎的に、一応理解して有り、楽して、普通科卒の友人である三浦君に教え、反対に私が、英語等を教えてもらった事、その彼も京都で高校の教師に成り、今でも友人である。又、この2月21日の学期末試験が実施された時は大雪の為、交通機関がストップして、やむに得ず長浜からタクシーで、会場迄乗り込み何とか、間に合った事も、なつかしいです。

特に特殊講義（英語専門演習）では、吉田龍恵教授に、ビジネス・コミュニケーション、をテーマに、要旨として特に英文国際広告を中心として、ビジネス・コミュニケーションのあり方を研究し、JAL等、航空会社の広告を研究し報告し、互いに討議をした事、又、先生との出逢いに、昭和37年当時、長浜商工高校の英語の授業を受けて以来、先生を人生の師として、（先

生には迷惑だったかもしれませんが……)後に
滋賀大学の方へ、転任し教授に就任され、現在
も滋賀大学名誉教授として、元気に御活躍下
さっている事に、大変感激し喜んでいきます。世
の中に變化しても、人の心は大きく変わること
なく、師弟の情(……)と云うか、温故知新
(……)と申し上げるべきか、私に一番の宝物
を授かった自分を、只、感謝している今日で有
ります。

その他、沢山の諸先生教授に感謝で一満です。
終わりに、創立90周年記念に際して、先輩、
諸氏の方々が、栄々として築かれて来た、教育
方針に沿って、益々、国際化に向け、語学・哲
学を身に付け、近江商人の発生の地の母校が世
界に通用する大学を目標に発展する事を期待し
たく思います



第20回経済短期大学部卒業記念

あとがき——『わが青春の彦根』に寄せて

経済学部長 梅 澤 直 樹

滋賀大学経済学部創立90周年を機に、多くの同窓生のご寄稿によって、このように立派な書籍として『わが青春の彦根』が刊行されますこと、心よりお慶び申し上げます。

私自身、学生生活を過ごしたキャンパスを巣立って約40年になりますが、学部、大学院と計7年間を過ごしたその時代、その地、また当時巡り合った恩師や友人にはやはり特別の想いがあります。学生時代は、私的にも社会的にも、一歩大人の世界に足を踏み入れた特別の時代であり、それだけに一人の感慨を抱かせてくれるものなのでしよう。

彦根の場合、街は歩いて行ける適度な範囲に広がっていたので、とくに寮生活や下宿生活を経験された方々には街のあちこちに懐かしい思い出が刻まれているので

はないでしょうか。また、キャンパスも昭和50年代半ばまで彦根高商以来の木造校舎でしたから、高商以来の伝統もリアルに体感されていたかと想像します。私自身、最初の赴任校が和歌山大学経済短期大学部で、そうした木造校舎で講義をしたことを懐かしく思い出します。とともに、そうしたことを思い出すにつけ、まだ初々しく講義と取り組んでいたその頃と比較して反省させられるところも思い浮かびます。体育会の冊子『陵水』34号に、長尾昌明氏が、創業記念日は単に創業何年を数える日ではなく、創業の想い、企業のアイデンティティの根幹を振り返り、それをみんなで共有し合っつてこそ意味があると書いておられました。個人的にも、若く純粹だった時代をときに戻り返ることは大切だと思いました。

最後に、大学は教員と学生の協働で創り上げられてゆくものです。本エッセイ集には学生の視点で見た本学の姿、伝統が多数綴られております。時代に合わせて大学も変わっていくべきですが、何を変え、何を変えてはいけないのか、貴重な示唆が得られることを期待して、あとがきとさせていただきます。

滋賀大学経済学部創立90周年記念

わが青春の彦根

発行 平成二十五年十一月一日

発行所 滋賀大学経済学部陵水会

〒五二二一八五二二 彦根市馬場一丁目一―一

TEL(〇七四九)二六一三〇二八

FAX(〇七四九)二六一三〇九八

発行責任者 陵水会理事長 戸田一雄(大12)

編集 滋賀大学経済学部創立90周年記念エッセイ集編集委員会

チーフ原 綱宗(大14)、倉坪和久(大13)、

西部宏道(大13)、大西久一(大14)、

村瀬英己(大15)、佐々木勉(短15)(事務局)

印刷 サンライズ出版株式会社

〒五二二一〇〇〇四 彦根市鳥居本町六五五―一

禁無断転載

非売

